

兵馬驚愕して遂に潰敗せり翌年ピルラス羅馬の軍と再びアスキュラムに戦ふて又之を破れり然れども其兵の死傷殆ど無数ありしに流石のピルラスも羅馬兵の勇敢なるに驚歎し且つ曰く此の如き勝利の寧ろ無きに若るす我をして再び此の如き勝利あらしめんか我の軍騎團に歸らざるを得ざるべし、偶よ「カーセジ人」シ、リー島を攻めしかばシ、リーに在る「希臘人」等援をピルラスに請へりピルラス乃ち鋒を轉じてシ、リーに至り「カーセージ人」と戦ふて大之を破り其後紀元前二百七十五年ピルラス再び兵を伊多利に出し夜に來りて羅馬の軍を襲はんとせしが誤で道を失ひ終夜進軍して翌朝に至り士卒大に疲る折柄羅馬の兵俄に來襲し火箭を放つて大象を奔逸せしめ大にピルラスの陣を亂し希臘の軍終に全く敗れピルラス僅に身を脱して本國に歸り後た伊多利に寇せしは是に於て乎希臘の殖民地に其千城を失ひ陸續相繼いで羅馬に降れり」

紀元前二百六十六年に至りては羅馬共和國の版圖北にゴールの南境より南にシ、リーの海峡に及び西に「タスカン海」より東に「アドリヤチツク海」に及び東に悉く伊多利半島を領して將に力を外國征服に用ひんとせり

扱「羅馬人」の如何なる政略を用ひて斯く征服したる伊太利の諸都府を支配せしやと尋ぬるに唯だ自ら政治上の三大權を保持せるのみにして地方の小政務に至りては一一之を各都府の自治に放任せり三大權とは何ぞや曰く宣戰媾和の權曰く外國の使節に接するの權曰く貨幣鑄造の權是を思ふに此三大權は實に國權の樞軸として其他の諸權に至りては仮令ひ之を各都府の自由に放任するも羅馬の主權の毫も損する所なきあり故に羅馬の各都府に對する政略は守る所約しして而して其用大なり一方に於ては各都府の自由を束縛せざるの美あると同時に他の一方に於ては其結合を保持するの利あり之を彼の希臘聯邦の相互の關係極めて寛放にして統一することなきに比すれば其優劣果して如何ぞや

當時羅馬の人民は三等に分きたり第一羅馬府民第二「ラテン人」第三「伊太利人」是あり

羅馬府民とは羅馬本部の域内に住する自由の民及び伊太利の他の部分の住民として府民の權利を許されたる者をいふ此階級の人民は「フォーラム」に集會して法律を議定し執政官と撰擧する等の權利を有せり「ラテン人」とは幾分か府民の

權利を有する者として其階級羅馬府民の次位せり又一伊太利人」といへば、羅馬府民の權利を有せざる者として最下級の人民なり然り而して後年羅馬國の益々盛大に赴くは、隨ひ羅馬府民の權力名譽の益々其重を加へ羅馬全國の人民をして切かに羨望熱中せしむるに至れり

（外國征服時代）亞弗利加の北岸に「地中海」を隔てて伊多利の半島と相對し四方を雄視する一國ありカーセージといふフヒニシヤの國史に於て語りし如く是彼の國人グイドウツ創立せし殖民地の發達して遂に一大國となりしものなり紀元前第三世紀の頃羅馬に於て民主政治の基礎方立んとするに際し「カーセージ」に「地中海」に於て専ら通商及び拓地の業を務め勢ひ日々盛んとして殆んど羅馬國と頡頏せり思ふに斯の如き二強國が繞りに一筆水を隔てて相對する時の勢ひ永く兩立すること能はず早晚衝突の變を生ずるに免れ難き數あるべし夫の「ビュニツク亂」といへる有名なる大戦争の兩國の間破裂せしに決して偶然事あらざるあり

「ビュニツク亂」後（紀元前二百六十四年より二百四十一年に至る）

初の「希臘人」のシリ島の東岸に殖民地を有し「カーセージ人」の其西岸に屬地を有せしが紀元前二百六十四年頃伊多利の海賊シリ島を襲ひメツセナ府を奪ふて之を據り頻りに四隣を掠奪せしは「カーセージ人」及び「シラキウス人」並に起て之を攻めぬ是に於て海賊大に恐れ接を羅馬に請へり「羅馬人」乃ち其はシリ島を出し「カーセージ人」を破りシラキウス王ヒエローを降し且カーセージに屬したる要用なる海港アグリゼンタムを拔けり是れ「ビュニツク戰爭」の濫觴を以て足れりと爲さず更に進んで「カーセージ人」とは雄雄を海上に争ひんと欲したりさりとて、羅馬人の夢よごん見ざりし所より蓋し積年の航商と稱せられ其艦隊は整頓しある羅馬の軍よごん見ざりし所より蓋し積年の航商中より自然に發熱し練磨したる水軍を以て「羅馬人」の剛強なる敢て之に敵せんを企て僅々六十日間より一百三十隻の艦隊を作り以て抵抗を試みたり

是より「羅馬人」の益々進んで「カーセージ人」を攻め遂に地中海を横斷して戦争を亞弗利加の地に開いたる羅馬の將トヌラス剛勇にして能く兵を用ひ連戦頻

爲め頻り其軍隊を操練せりハミルカーの深く羅馬を惡めり是を以て其本國を去りて西班牙に赴くや其子ハニバルをして死に至るまで羅馬の仇敵たらんことと誓ひしめて然る後ち之を同伴したり當時ハニバルの其齡僅か九歳ありしが此幼時の誓言の常ニ腦裡に記して忘るゝことなくカーセージの仇敵羅馬を滅ぶを以て其終世の目的ともたりといふ

ハミルカーの未だ其目的を達するに及ばず半途而して歿せしハニバル之は代りてカーセージの軍を指揮せり時ハニバル二十六歳なりハニバルのカーセージの軍に將たるや先づ西班牙のサガンタムを攻めて之を拔けりサガンタムの羅馬の與國あり是に於て「羅馬人」大に怒り直ちハニバルに告げし是れ固よりハニバルの望む所なれば毫も躊躇せず急ニ伊太利を侵襲せんと欲し「アルプス山」に向つて發程せり時紀元前二百十八年なりハニバル行々西班牙及びゴール地方の土族を破り遂に「アルプス」の山麓に達せり「アルプス山」は歐洲中最も險峻なりと稱せらるる險山にして其山上に積雪堆を爲せりハニバルの軍之を踰ゆるの際雪が馬に命を殞る者數を知らむ五月にして始めて伊

多利の平野に達せしが全軍十萬二千人の中現に生存せる者僅か二萬六千人に過ぎざりといふ

然れどもハニバルの毫も屈せず抜山蹶海の勢を以て直ち伊多利の平野を襲ひ戦へば必を勝ち攻むべきに必ず取り兵鋒の向ふ所疾風の枯葉を掃ふが如し殊に紀元前二百十六年伊多利の南部なるカンニの役の如たに其最も著しきものにして羅馬の將軍議官等死せる者百餘人兵士の死せる者七萬餘人の多き及びたかといふ

是に於て伊多利の諸州皆ハニバルに響應しハニバルは十有四年の間半島を横行して或は土地を略し或は財寶を掠め其勢猛烈にして敢て之に當る者なく羅馬の共和政も今や將に一ハニバルの爲めに顛覆せられんとするの危急に迫れり

此時母當りて羅馬に一豪傑ありパブリヤスシピオといふ密に兵を率ひて西班牙に赴き「カーセージ人」を逐ふて其地を略し以てハニバルの後援を絶ち更らば轉じて亞弗利加なる「カーセージ人」の根據を衝き連戦して頻りに勝利を得たり時ふたて「カーセージ人」大に恐れ伊太利よりハニバルを召還せりハニバル乃ち

羅馬部
たし何
新しき事
一なる也
に違ふべし

本國に歸り紀元前二百二年シビオの兵と亞弗利加のザマール會戦せり然るにハニバルの軍利なく力盡きて和を「羅馬人」に請へり「羅馬人」乃ち二ヶ條の條件を定めて其請を許せり曰く貢租を羅馬に納むべし曰く羅馬の許可を得ざして安んずる戰爭を爲すべからむと時、紀元前二百一年なりシビオは此軍功を以て「アフリカナス」の稱を得たりといふ

其後ハニバルの智略を以て漸くカーセイジの國力を回復せしむ「羅馬人」之れを聞き反問を縱ち「カーセイジ人」をして之を國外に逐ひしめたり是に於てハニバルは去て亞細亞に赴きしが此時羅馬のシビオも亦國人の爲めに逐ひきて亞細亞に在り兩國の兩雄偶然異郷に邂逅し互に胸襟を披いて往事を談じたりといふ

「ビュニツク第三役」(紀元前百四十九年より百四十六年に至る)

「ビュニツク第三役」の第二役は去る五十餘年の後、在り此五十餘年の間には重要なる事變なきにあらざれども便宜の爲めに姑らく之は措きカーセイジとの關係を説き終りたる後、更ら再述する所あるべし

カーセイジは既に羅馬に降りて之が屬國となりたれども其内治に至りては依然として自治の澤を浴せり且頻年兵革の災おく瘡痍漸く癒へて再び往時の繁盛を回復せしむ羅馬の名士中往々其便患を爲さんことを恐れて早く禍根を絶たんことを主張する者あり就中老議官カトリーの如きは其戰場に出づるべからずカーセイジの殄滅せざる可らざるを説きたりといふ

紀元前百四十九年「羅馬人」遂に此事を名を以て大軍を起し卒然カーセイジに臨めり「カーセイジ人」大に懼れ悉く軍器兵甲を納れて和を請ふ「羅馬人」聽るを悉く船艦を納れて和を請ふ「羅馬人」聽るを貴族の子弟三百人を質として送る「羅馬人」聽るを終に其内政を羅馬に委し全く臣下の地位に就かんと欲す「羅馬人」尚不聽かむ是に於て「カーセイジ人」策の出づる所を知らむ「羅馬人」は謂て曰く然らむ則ち如何せば可ならんと「羅馬人」答へて曰く須らく海岸の都城は幾ち人民悉く内地に退くべしと

時、於て流石に從順する「カーセイジ人」も今、憤怒の情失望の意と相合じ皆必死の勇を奮ふて防戦に従事せんと決意せり「羅馬人」乃ち前のシビオの養子コル

子リヤス、シビオを將としてカーセージの都城に迫り攻圍四年の久しき及び
 カ―セ―ジの既ニ船艦をく軍器をく又與國をく其危殆こと一髮千鈞を引くが如
 し然れども人々皆國の爲め其身を忘れ老幼男女を論ぜざ力竭くして防戦
 したり然るも紀元前百四十六年に至りて城終ニ陥り羅馬の兵城内ニ闖入して直
 ち火を市中ニ放ちしかば煙焰天ニ漲り滅せざる者十有七日幾多の歲月と人功
 とを費して建築したる殿堂屋宇も今も悉く烏有に歸し七百餘年間商業の中心と
 仰がれ七十餘方の入口を有して地中海上ニ雄視したる強國も今も空しく滅亡し
 て其領地悉く羅馬に「プロビンス」となりたり是も於て「羅馬人」の奉行を派遣し
 て之を管轄せり

カ―セ―ジの滅亡の之を一方より見るときは其内政の治らざるとハニパルの
 如克良將の威名を忌み之を用ひざるに因る所多しと雖も又一方より見るときは
 羅馬は兵制其宜しきを得政度整理せしに因らざるを得んや故に社會學上
 の觀察すれば所謂優勝劣敗の自然法として強大なるカ―セ―ジの一旦にして倒

れしも敢て怪むふ足らざるなり今其理由を明うせんが爲に當時羅馬の果して
 如何や否ある政度を用ひ又如何や有なる兵制を用ひしやを見るべし

羅馬府の行政長官は其職号を「コンソル」(即ち執政)と稱して常々二名ある由り
 已に前段に屢々説けり「コンソル」は下ふ三職あり(第一)司戸(第二)司法卿(第
 三)「イグイル」是なり「イグイル」ハ工部卿母して警察并に祭禮の事を兼任せし
 者なり以上四職ハ皆象牙の椅子に坐するの權を有せしものを

此外に「クエストル」(會計長官)といふ職あり此官ハ或は「コンソル」に從ひ或は
 「フリートル」に從ひ會計の事は司りしものなり又「パブリケナイ」(租稅司)とい
 ふ官あり四方の屬州より税金を集めて之を會計長官に致すを以て其務とせり會
 計長官は數最初は僅に二人なりしが伊太利全國は征略するに及び増て八人とせ
 り其中二人ハ常々羅馬の中央政府に在り其餘六人の屬州の奉行若くは「フリ
 トル」に從ひ出て屬州の會計を司れり

「フリートル」ハ已に前段語りし如く上代に於ては「コンソル」の職權を無ねし者
 なりしが別に「コンソル」の官を設くるに及びて専ら司法の事務を司る者とされ

羅馬地方政治の事、少く前にも陳述したれど、兵制と租税の制に關係せる緊要あること、尠をあらねば、今あらためて辨むべし。己のいひし如く、伊太利の諸都會は、大概同盟の國と爲りて、多少の獨立を維持したりと雖も、伊太利以外の諸都會に至りては、偶々同盟の位置を保つ者無きにあらねど、十中の八九は屬州として、所謂「プロビンス」あらざるをなし、されば諸屬州は、其風土人情を異にし、各々其制度を異にし、元來羅馬の他國を攻伐して、其地は略するや、其再び聯合して、以て背反を謀らんとし、恐るるは、百方政略をめぐらして、利を以て各屬州の民をすらし、其服従を買ふとを務めたり。論へば、最初戰爭の際、進んで羅馬の兵を授けし者、其戰終るの後、其獨立を保つて、依然たる屬州と爲し、其中間一位置せし者に至りては、征服の後、羅馬に若干の年貢を拂ひしめ、其内政は依然自治するの權を與ふるを以て恒例とせり。此に於て乎、伊太利は諸州に分られて三級の者と爲り、曰く同盟市府曰く首府直轄地曰く知事管轄地是と、伊太利の内地は總て諸税を免せられたり、之を名づけて「伊太利權」といへり。然るに外國の地の同盟の條約を得し者の外は、總て租税を免せ

るべきことを得て、租税を分て通常及び特別の二種とせり。通常税は公田の産物、其貸下料、橋賃、港賃等及び屬州の地租、舟して其他漁業税あり、礦山税あり、石山税あり、製鹽所の収入あり、皆經常費に充るべきを得たり。奴隸の解放の際、價格の五分を政府へ納むるものとし、之を貯蓄して非常費に充てたり。國家多事として費用を支ふるに能はざる時、所得税を課して之に充たり、之を名づけて非常税といへり。伊國の諸府并は諸屬州の政府は、敢て國庫の補助を仰ぐことなく、皆其費用を自辨せり。斯の如く所得税を課せしめ、雖も費用尚ほ足らざる時、國家に命じて武器、衣服、糧食等を供せしめ、事平ぐの後、之を償却する者とせり。當時羅馬は共和政治なればこそ、人民能く斯の如き募り、應じて出金したるを「ユニツク第二役」の間元老院議官中、豪富の者の多し、金を出して軍費を助けたり。當時若し此助けをかりせば、シビロ如何に智勇ありと雖も、或は其功を奏すること能はざりや、も知るべし。ちを而じて之を出したる者も、亦之が爲めに能く國を守るの利益を得たるもの、と謂ふべし。何と云はれば、軍用缺乏し、兵敵地を敗れ、國守りと失ふに至らば、其損失たる、決して少くならざるべし。されば、伊太利の諸府は、直税を免れしと雖

ども羅馬軍の使用する所の武器、衣服、兵糧、給金等々の之を供給するの義務を有しラテン地方の諸府の如きの兵糧の供給を中央の政府より得しと雖ども武器、衣服の自辨とせり伊太利諸府の兵とラテンの兵を連合して勝利を得し時其分取物の如たの之を分取するの權を有せり但し敵方より拂ひ込し償金の之を分取するの權利なかりき故に伊太利諸府とラテン諸府との其危難を共ふせしと雖ども其利益を一番する能はざる頗る不公平の姿あり是れ羅馬盛時の政体の大略あり

「第一マセドニア戦争」

「羅馬人」の伊太利、シ、リ、リ、を略するや漸く政治上に餘地を生じたるがため希臘の文物も倣ひ國風を飾らんとするの傾きあり故に彼の文學、技藝次第に羅馬に傳染し隨つて希臘との關係を密しせり偶にイライリヤの海賊伊太利の海岸に未寇し羅馬の貿易と害せると少なるらず「羅馬人」乃ち其償金を求めしるども「イライリヤ人」傲然之に應ずるの色なかりしを以て紀元前二百二十九年「羅馬人」遂に兵を出して之を攻めアポロニア及びイビダムノスの兩市府を奪ひたり是等の伊太利の海岸に在りて元來に希臘の殖民の市府あり故に却て羅馬の米粟を喜べ

る色ありされば羅馬の威力日一月に盛んし今殆ど希臘の北門を達せしむ希臘諸府迂濶にして羅馬が將來の大仇たるを悟らむ此たびイライリヤを征服して向後希臘の海岸に未寇せざる旨を誓ひしを以て大に喜び頗る「羅馬人」を徳とし慕へり是より先き紀元前二百十五年マセドニアのフヒリツアハニバルと同盟して之を援けたりしを以て紀元前二百十四年に至り「羅馬人」問罪れ師を出して之を征せり此役マセドニアの「アケイマン同盟」「アカルナニヤ及びエパイラス」の應援を得羅馬に「イートリヤ同盟」「ボルガマス及びスパルタ」の應援を得たり紀元前二百五年和を講じ一旦兩軍を退けしは是より「羅馬人」大に希臘の内事に干渉することとされり

「第二マセドニア戦争」

「第一マセドニア戦争」の結果に未だマセドニアの地を害ふに至らざる和信の條約の後も依然其舊態を存したりしが「第二マセドニア戦争」より大に其趣を異にし羅馬のアゼンスを助けて希臘の自由を保護するを以て口實とし大にマセドニアの地を略せり今其近因を尋ねるに「アゼンス人」「マセドニアの強大なるを恐

み援兵を羅馬に請ひ之が専横を防ぐんとせり「羅馬人」之と許し更にマセドニア王フビリツプに向つて雄雄を争ふに至りしあり是れ實に紀元前二百年なり此役を「イトリヤ人」の初めより羅馬に同盟し「アケイヤ同盟」の紀元前百九十八年に至りて羅馬の味方となれり紀元前百九十七年羅馬の「コンソル」フラミニヤスフビリツプの軍とセツサリ州のキノスケアラに戦ふて大母之を破れり是よりマセドニアの勢は振らざるに至り是に於てフラミニヤスの希臘諸州の羅馬に服従せしもの限り盡く往時の如く獨立なるべしと宣告し大にマセドニアの地を削りて之を附屬同盟の國と爲せり是より以後希臘の陽に獨立の体面を保ちしと雖も其實羅馬の臣僕たるに過ぎざるものとされり

「イトリヤの征略」

「イトリヤ人」の「羅馬人」が破竹の勢を以て全希臘を席卷せしを見て大に恐れ俄に羅馬に背反して援をシリヤ王アンチオカスに請へり紀元前百九十二年アンチオカ大兵を率ゐて希臘に入るに及び希臘の諸州羅馬に背き兵を起さるもの頗る多し然れども「アケイヤ同盟」の如き始終羅馬に屬して動かざりき紀元前百

九十一年アンチオカス大にセルモボリに敗れし後「イトリヤ同盟」も遂に羅馬國の臣僕となれり之と同時に「羅馬人」のザキンツス并にケアラニアの兩島は攻略し全ペロポネサスを擧て之を「アケイヤ同盟」に與へたり是より希臘は全く其獨立を失ふて羅馬の屬州の如くなれり

「第三マセドニア戦争」

「第二マセドニア戦争」以来フビリツプの力を竭して國力を恢復せしが未だ十分ならず其目的を達せしめて崩じ其子ペルシヤス位を繼げり紀元前百七十年「羅馬人」又干戈を動かし更にヘルシヤスと戦端を開き之を「第三マセドニア戦争」と爲す此回の戦争に希臘の諸府漸く積年の迷夢を覺破し羅馬のマセドニアより尚不恐るべき大仇たるを悟り皆大擧してマセドニアの軍を援けたり特り「アケイヤ同盟」のとき此時に至りても尚「羅馬人」に屬したり兩軍相戦ふこと數回遂に紀元前百六十八年ピシタの一戦でマセドニアの軍大に敗れて復た振らざるに至れり是に於て「羅馬人」はマセドニアの地を略し之を四分して四箇の共和國を設立しエパイラスの諸府の如き大概之を殘滅せり思ふに最も伊太利に近き州を

るが故に後患を防がんがた先の政略あるべし

「第四マセドニア戦争」

「第四マセドニア戦争」はマセドニア及び希臘の運命を決せしものなり此戦争は「ピユーニツク第三役」と同時（即ち紀元前百四十九年）に始められ此時に當りてマセドニアのアントカスなる者あり自らフヒリツブと稱しヘルシヤスの子なりと揚言してマセドニアに王たると欲し兵を擧げて羅馬に背たり「羅馬人」乃ち將軍メテラスを遣して之を討てりアントカス能く戦ひ始めに少くは利を得しと雖も遂にメテラスの爲めに破られたり是よりマセドニアは羅馬の屬州となり其國全く滅亡せり「アケイヤ同盟」も亦「ピユーニツク第三役」の起るに當り之を機として羅馬に背けり然れども紀元前百四十六年其兵大に敗り同盟爲るも瓦解して其諸府悉く羅馬に臣僕せざるなり但しアゼニス并に其他二三の市府は尚ほ名義上は於て幾分の獨立を保ちたりしと雖も其實は羅馬の屬州たりしに外ならず

「羅馬と亞細亞との關係」

希臘及びマセドニアが羅馬の屬國となるに及び亞細亞の諸州は其西門の守衛を

失はざるふひとし當時西方亞細亞に於て最大國の聞えありしはアレキサンドルの將セリユカスの子孫の君臨せる彼のシリヤの王國なり初め此國は甚だ大なるものにしてアレキサンドルの征略せし亞細亞地方は盡く其管下に含まれしや紀元前二百五十六年の頃「パルシヤ人」の反するありて大に其國境を減縮せり其他西方亞細亞に於てはヘルカマス、ピシニヤの二王國あり此等の國は皆多少希臘文明の末流を汲み當時頗る開化の域に進めり故に「羅馬人」は莫さず希臘及びマセドニアの二國を併呑せしより其勢恰も旭日の昇るが如く遂に進んで亞細亞に入り紀元前百八十九年大にシリヤ王アントカスの兵を破り「トウラス山」以東の地を略しアントカスの只シリヤの地は保つを得たり斯の如く「羅馬人」は西方亞細亞の地を略せしと雖も直ちに其屬州と爲さんといせざるを其同盟の諸州に與へたる而してアントカスより奪ひし地の悉く之をヘルカマスの王ユミニスに與へたり是を「羅馬人」が屢々行へる「先與後奪」の狡猾政略にして直ちに侵地を取て己の有と爲さむ之を其地の同盟諸府に與へ然る後ち機會を俟て漸次之を併呑するの慣手続を其後紀元前三十三年ヘルカマスの王ア

タロスの死をもるゝ及び國人其國を擧て羅馬に譲りたり「羅馬人」之を受けて「亞細亞外領」と爲せり是れ羅馬が「多瑙海」アキマンフレイ以東に於て其屬州を開きありし權輿之

「西班牙戰爭」

シビオ以来西班牙の地ハ漸々羅馬の所轄に歸せしハ叛服常なく戰亂絶えず「羅馬人」大に苦めり是を以てカーセージ及びコリンス滅亡の後羅馬ハ力を用ひて頑民と鎮壓し尚不盡く半島を從へんと企たり然れども地勢の險阻あると土民の慄悍あるとハ永く羅馬の成功を妨げしが紀元前百三十三年に至り彼の頑強ありしニューマンシヤの都府の陷るゝ及び半島靡然として降伏を全く羅馬「プロビンス」となれり

回顧すれば外國征服時代の始めに當りてハ羅馬の所領ハ單に伊太利の半島に止まりしが其時代の終りに至りてハ西に「大西洋」の海岸より東にコンスタンチノール海峡に至るまで歐洲の全南部及び北亞弗利加の海岸を領し且亞細亞の西部をも管轄をもるゝ至り彼の茫洋たる「地中海」ハ實に羅馬領内の一大湖水の形をみせり

又征服時代の始めに於てハ羅馬ハ唯だカーセージマセドニア等世界大國の中の一列をもを得たるのみなりしが其時代の終りに至りてハ羅馬ハ世界唯一の大國となりたり

左れば當時羅馬ハ名稱と權力とハ其頂きに達したりと謂つべし其勢恰も太陽の天に中して森羅萬象を遙か下に見るの趣あり世界萬國皆之に葵向し羅馬の府民といへば天下到る處之を優待し敬過し其聲を學び其風を習ひ之を榮譽とせらる有様ありき是に於てハシラクニウスカーセージマセドニア及び希臘等世界中の財富ハ盡く羅馬府に輻輳せり羅馬府に此際種々の土木を起し或ハ道路を作し或ハ橋梁を架し或ハ公館を建築し或ハ溝渠を開鑿する等一々枚舉はるゝ違わらむ其遺跡歴々として尚も今日に存せり

然り而して希臘の征服ハ羅馬の文明の上ハ大なる影響を與へたるものあり何とされむ希臘の文章家、哲學者、詩人等ハ此時より次第に羅馬府に移り住み其固有の才能を以て生計を營さんと計りし程に「羅馬人」も之に刺撃せられ漸く心を文學に注ぎ學ぶ志をも多かりしかハ第二世紀の頃に至りてハラテン的文學の

最初の曙光を見るに至れり今其二三の人々を擧ぎば詩歌壇上には著名なるエ
 ニヤス及びプロクタスあり羅馬散文の先達とも稱をべたカトーあり傳奇作者
 一の彼れ高名なるラレンスあり皆一世の鴻學なり蓋し羅馬文學の盛時に此後
 一百年オーガスタスの世に在りといふと雖ども此時代に於て其萌芽を發したる
 の疑ふ可らざる而して人才の盛たる侮る可らざるもの頗る多し
 斯の如く羅馬國內の祥雲發露として百事完美多幸多福太平安寧の状を呈せし
 雖ども仔細に其内部を點檢すれば其間種々の弊害の隱伏するものあり政治上の
 陋習奴隸の弊風奢侈の濫習の如き即ち是なり

羅馬にては有司を撰擧するの權總て府民の掌中にて在りし故に苟も撰擧を得ん
 と欲する者の皆府民に賄賂を贈りて其歡心を買ひんと盡力せり是を以て國政日
 ぶ腐敗し多く富を有する者の常に勝利を撰擧し得て政府の全權を掌握するに至
 る「プロビンス」の奉行の如き極めて利益を有する職掌に大抵富豪の輩の占有す
 る所となれり

是より先き「羅馬人」の戦争にて擒せざる敵國の民を奴隸として賣りしより奴隸

の惡習盛に行われ「羅馬人」にして土地を有する者の皆之を耕耘せんが爲め内
 外の諸屬州より奴隸と囚致し平賤の苦役を服せしめたりされば歲月を経るに隨
 ひ此奴隸の數漸く増加し外國役服時代を終りて至りては伊太利半島内に在るも
 の千二百万人の多きに達せり而して當時伊太利の通常人民の其數五百万人に過
 ぎざりしといふ

「羅馬人」の一朝外國を征服して一時に巨額の富を博取せしより奢侈の弊風一般
 に行われ國中到る處輪奐たる家屋の美あり葺鬱たる園圃の設けあり又浴深たる
 池水の觀あり人々皆靡麗華者を競ひ或は一飲一食の爲め數百千金を費やし一
 夕に饗宴を開くに音樂を奏する伶人あり舞蹈を爲す美人あり玉杯あり銀盤あり
 花檀燃るが如く餘慢人の目を眩したりかゝる驕奢の風一般に行われしが中にも
 特り有名なるカトーは如きの深く之を慨歎し「羅馬人」と目して墮落人種となし
 死に至るまで國人奢侈の惡風を矯正せんを力めしかど遂に其目的を達するに及
 むを憾を吞んで地を入れりといふ

(内亂時代) 此時に至りて貴族平民の政治上の權利は漸く平等の者となりし

「バトリシヤン」と「プレビヤン」の舊時の軌轢は全く絶たりきりながら新た
 は富者と貧者との新軌轢を生じたり悲しくいへば此頃貧富の懸隔實に甚しく富
 者の益々富み貧者の益々貧なるの有様にて富者の其財力を濫用し以て貧者を凌
 ぎ貧者の生活は汲々として其權利を伸ぶるを得ず嘉みすべき自由政体の將に變
 じて恐むべき寡人政体と爲らんとせり

然るに此時トウヒン市長官の一人はタイメリヤス、グラツカスといふ者あり國事の日
 非なるを慨き以爲らく人民の權力を平等ならしめんとせば私田の過大なるを制
 限するに若くはなし私田の過大なるを制限するに富者の所有を殺して之を貧
 者に與ふるに若くはなしと因て之が説と建てて曰く羅馬公共の田地に富者の專
 有をべたものゝあらむ宜しく之は貧者に分つべし古への「リシニヤン法制」四復
 せざる可らざるなりと豪族の輩之を聞て其己れに利あらざるを怒り後患を恐る
 この餘り窃に徒黨を結合し不意に起りて遂にタイメリヤスに虐殺せり

タイメリヤスの母をコロチリヤといふ有名なるシビオ、アフリカナスの女なり
 賢として能く其子を教育せりタイメリヤス及び其弟ケイヤスが一世は英傑と仰

がる、母至りたるに其天稟に由ると雖ども母氏の薰陶亦與りて力あるなり

タイメリヤスの不幸にして奸黨の爲め其命を夫ひたれども其功績は依然とし
 て永く存し「リシニヤン法制」に再び其實効を政治上に有するに至れり然れども
 反對を試むる者常に絶えず爲めに豪族と貧民との軌轢は日一月に其激烈の度を
 加へたり

タイメリヤスの死後十年を歴し其弟ケイヤス、グラカストウヒン拱ばれて民長の官に上
 りぬケイヤスもまた能く亡兄の遺志を紹ぎ貧民を助けて豪族を攻撃を其改革の
 條案數多ありしが就中貧民に毎月米若干を給與すべきの制と設けたり此の如く
 汲々として豪族を抵抗せしが故に在職二年の後ち反對黨計りて之を退かめ且
 其後患を爲さんことを恐る機を以て之を公會場トウヒンに襲撃し其黨と闘ふて大に死
 傷ありケイヤス逃れて「タイパー河」を渡り林中に隠伏せしが其到底生く能はざ
 るを知り終に自盡して死せり

ケイヤスの死後豪族と貧民との軌轢は日甚しきを加へ終に豪族黨の「サラ」
 といふ後傑出て、之が首領となり貧民黨の「マリヤス」といふ名士出て、之が巨

魁とされり此兩人の屢々羅馬軍の將となつて外國を征し數回の戦争に於て大なる功績を顯らし益々世上の名望を買へりされば兩雄並た、その後遂に劇烈なる内亂を醸し出し伊太利全國は鮮血を漲らせしに至りしなり

此時に當りても羅馬の終始外征に従事し益々其國權を伸張せり今簡略に其重要な者と舉れば左の如し

紀元前百十一年より百六年に至るまで「羅馬人」の亞非利加あるニユミヂヤの王
 ジュガルサと戦へり

同百十三年より百一年に至るまで「羅馬人」の北方に向つて兵を進め「キム
 リー人」及び「チュートン人」と戦ふて悉く之を破れり

同九十年より八十八年に至るまで「内國の役」あり是伊太利國內の戦争にして其結果たる遂に「伊太利人」全体をして悉く羅馬直轄の民とならしめたるものあり

以上の諸戦争の實はマリヤス及びサラエをして其勢力を固うせしめしめし者なり然れども其戦闘の次第の之を詳説するの要なきを以て茲に之を略し更らば進んで「内國役」の後起りたる一大戦争の事を述べ「ミスリアーチス戦争」是を

「内國役」の將に終らんとするも際し小亞細亞の各都府に居住したる八万の「羅馬人」及び「伊太利人」悉く虐殺せられたりとの急報羅馬に達したり今其次第を尋ぬるに小亞細亞はポントスといふ王國あり其王をミスリアーチスといふ亞細亞諸州及び希臘地方を糾合して一大聯合を作り以て羅馬の權力に抗せんといひ先づ手初めに小亞細亞に在留せる八萬の「伊太利人」を一時に屠殺し抗戦の意を示せしあり時に紀元前八十八年なり是に於て「羅馬人」の直ちに問罪は師兵與せしがサラエ及びマリヤスの二人之が大將たらんことを争ひサラエ遂に其目的を達せしかむマリヤス不平に堪へざり人民は向はてサラエを譏誣し同時に策を運らして豪族黨の威力は壓せんとせりサラエ之を聞て途中より兵を班し其羅馬に入るや武力を以て直ちマリヤスを亞非利加に逐ひ然る後ち再び進んでミスリアーチスと會戦せり時に紀元前八十六年なり

此際マリヤスのサラエの國に在らざるを窺ひ時の執政官シンナなる者と謀を合せ無頼の惡徒を聚集して突然羅馬に入り豪族及びサラエの党與之を聞て皆色

を失ひ倉皇狼狽せりマリヤスの直ち前日の怨を修めんと企く先づ悉く城門を閉鎖して豪族党の逃走を防ぎ然る後自ら一隊の暴徒を率ゐて府内を巡行し其日怨ある者を指示をマリヤスの指頭の向ふ所何人と雖ども殺戮の慘禍を免れず執政オクタピヤスを始めとして元老院議員其他豪族党の重立たる者悉く殘虐の犠牲となれり是に於てマリヤスの自ら執政の位に上り妄り威福を弄せしが其後十有八日として卒然病死せり然れども其黨與の依然として權勢を振ひ暴行を恣にする事毫も前日と異ならざりき

是より三年を経て紀元前八十六年に至りサラール全勝を得て羅馬を歸らんとせしが途上屢々マリヤス黨の爲めに妨がられたる然れどもサラールの悉く之を排撃し遂に伊太利に凱旋せりマリヤス黨の之を聞くや其復讐の奇酷なることを想像し悚然皆色を失ふざる程にサラールの勢に乗じて悉く貧民黨を屠戮せんと盟ひ新たに當死者の名簿を作り重立たる貧民黨の氏名を記入し日之を公布して普ねく國中に嚴令し此等の一人を殺したる者其の褒賞をして其人の財産を賜與すべしと定めたり吁殺害已ぶ富を得るに足らば富の以て殺害を招くに足らん是を以

此際或人の浩歎し「我莊園に我を斬るの刀斧」とをばさし、是より羅馬府内の流血河をなし腥風人を襲ひサラールの門前の人頭を以て丘阜を築くに至れりといふ此の如く殘忍なる處置を以て悉く反對黨は壓伏し遂に紀元前八十一年に至りてサラールの唯我獨尊永年總裁の職に昇り政府の組織を一變して純然たる寡人政体となし専ら豪族の利益を計れり然れどもサラールの窃るに速く慮る處ありし由も永く權勢の位地に居ることを甘んぜず其後三年にして忽然位を去りて一人の生涯を送り紀元前七十八年、於て命を祚席の上終りサラール及びマリヤスの内亂の爲め「羅馬」人の生命を失ひし者十五万人に過ぎたりといふ

是より其後羅馬の共和政の益々衰運に向ひ國中到る處として黨派の軌轢を見ざるに如く紛々擾々として人々其堵に安んぜざるに至れり夫れかくの如く黨派の軌轢底止する所おけきや國事益々紛亂するに勢の必至ある者にして政綱弛亂復た收拾すべからず共和政の回復を得て望むべからず唯だ一有力者の出で、最上の權力を握り以て人民を塗炭に救ふを待つの外なし

サラールの死後ニイヤスポンベイといふ者あり始めサラールの副將となりて屢々

戦功あり已に國人中其武名を知られり紀元前七十七年より同七十二年に至るの間はポンペイのマリヤスの黨人サトリヤスといふ者が西班牙に在りて羅馬に反し亂を計りしを平げ其歸途「劍客」スバルタカスの殘黨を撃つて之を破れり「劍客」の亂は紀元前七十三年より起り其黨は羅馬に在りて一時猖獗を極めしがクラサスおも者の爲めに撃破せられ餘衆ゴール地方に逃れんとして再びポンペイの爲めに破れきたるなり

是よりポンペイの武名全國に轟き紀元前七十年撰べれて執政は官より上りクラサスや共力を國事に盡せり

既にして在職の期限満ちポンペイの一旦其職を退れしや此時地中海に海賊横行して羅馬は商業を妨げ財寶を掠め伊太利の全海岸常に恐るならざりしかば「羅馬人」乃ちポンペイをして之を討ぜしめたりポンペイ兵を出して之を伐ち僅かに九旬にして其功を奏せり是に於てポンペイの武名益々盛んとして引續きミスリデーチス征討の任をも受たりミスリデーチスの爲めに破られしかど其後尚不屢々羅馬に抵抗せしが故に再び遠征の軍を出せしなりポン

ペイ大將の任を受けて亞細亞に赴き三年の間種々の激戦を爲せしがミスリデーチス遂に全く敗績し自ら身を毒して死せり是に於てポンペイのソピニシヤシリヤ及びセルサレムを服して羅馬の「アロピンス」と爲し紀元前六十二年十分なる名譽を負ふて羅馬に凱旋せり

此時に際し羅馬の黨派およそ四つあり曰く寡人政黨（元老院議員中少數の有力者相集り一團結を爲せし者）として其主戦たる少數の威力を以て一國の全權を左右せんとする者あり曰く貴紳黨（元老院議員の寡人黨を加へらざる者より成り其主意とせる所の政權を貴紳の全体に握り少數に制せられざるとせる）に在り要するに寡人政黨の貴紳黨の極端に走りし者なり曰くマリヤス黨（サラアの爲めに虐待されたる族人の黨派にして其主意とする所の平民の權利を伸張するに在り）曰く武人黨（始めサラアに從ひたる士官老兵の集合体にして其主意とする所の常の機會の至るを待ち手は垂して功名富貴と博取せんとせるに在り）是なり

ポンペイが亞細亞の遠征に赴きたる間此四黨の首領たりし如何なる人々か

るやせ尋ぬる也

(第一)寡人政黨の首領ハボンベイ其人なりしも亞細亞遠征の爲の不在ありしを以てマアカス、タリヤス、シセロなる者代りて其任母當れしシセロハ羅馬第一の莊辯家として名聲赫甚の人あり

(第二)貴紳黨の首領ハクラサスなり此人ハ始めボンベイと同じく執政の職に在りしが今の互に敵對の地位に立てり才能ハ速くボンベイ及びシセロに及ばざれども夙に豪富を以て聞えたるが故に政治上に於て常母權勢を有せり

(第三)マリヤス黨の首領ハケイヤス、ジュリヤス、シイザルありシイザルハマリヤスの親姻として紀元前六十五年の頃其黨と總理し頭角を露せり其年齡ハボンベイ及びシセロに及ばざれども夙に才技熟達を以て稱せられ後來羅馬の全權を掌握すべき運命に有したる英雄あり

(第四)武人黨の首領ハカチリンとしてサラアの士官中最も雄略に富み且最も猛烈なる人なりカチリン、ボンベイの亞細亞に在るを時とし密に謀りて執政官を殺し羅馬府を焚き現政府を顛覆せんとせしが一人あり悉く其謀をシセロに告げ

しかばシセロ乃ち雄辯を振ふて元老院にカチリンの罪を鳴らせり是に於てカチリンハ羅馬に安んずること能はざり其黨と共に國外に出奔せしが道中して連兵の殺す所となれり時ハ紀元前六十二年あり武人黨はより滅じぬカチリンの陰謀發覺して謀は就きたると同年にボンベイハ羅馬に歸りしが其後寡人黨と不和を生じ轉じて平民黨に加入り寡人黨に抗抵せり是よりボンベイハシイザルと親密なる交際を結び互に相寄り相助々しが尚も其間を親密ならしめんが爲めシイザルハ其一女をボンベイに嫁せり又クラサスも前の兩人と心を合せ三人連合して力を政事に盡せり是れ羅馬史中に有名なる第一三頭政治なり

其後シイザル換はれて執政官となり滿期の後ゴールの太守となれり此時「アルプス山」以南のゴール地方に既に羅馬に従ひしも以北のゴール地方に蠻民常に跋扈して屢々羅馬の患を爲せり然るに紀元前五十八年シイザルのゴール地方に至りしより九年の間敵地を横行し大戦八回を経て悉く「ゴール人」を征服し紀元前五十年の始めに於て「アルプス」山南の勿論山北三百種族を懾服し大に政法

を布き貢賦の制を定めたり是より於てシイザルの威名日れ盛んとして羅馬人皆之を畏敬し其管下の諸種族も亦皆シイザルに心服し敢て離叛の念を生ぜず加ふるに率ふる所の士卒の恰も其手足の如くシイザルの命を奉る所の水火も之を避けざるに至り

叔此際ボンハイ及びクラサスの如何なりしやと尋ねるに紀元前五十五年母於て二人共に撰ばれて執政官となり満期の後ちボンハイは西班牙の太守となりクラサスは亞細亞領地の太守とされり然れども歳くあらむしてクラサスに「ベルシヤ人」と戦ひ軍敗れて之より死せしかむ三頭政治今の變つて二頭政治とされり其後ボンハイシイザルの間、漸く不和を生じたり蓋しシイザルのゴールに在るや其勢益々盛んせむして遂にボンハイの前功を壓せんとするの状ありしよりボンハイの怨ち妬思の念を生ぜしのみならず此時其妻既に死してシイザルとの關係全く絶えしかむボンハイの遂に離れて貴紳黨を助けシイザルを反對試みたゆ而して貴紳黨も亦シイザルの威權漸く盛んなるを恐みしかば直ちボンハイを以て執政の官より上りしゆ只管力をシイザルの攻撃に盡せり

是より先シイザルのゴールに於て其任期五年ありきざりしが其後更らば再任せられしが故に紀元前四十九年の正其解任の時、當れり是より於てシイザルの四十八年より於て本國政府の執政官撰舉されんことを願ひ窃かに其準備を爲せしがボンハイの之を妨んと欲し元老院に勅め命を降して曰くシイザルの五十半第十月に於て太守の任を去り其權を放棄すべしとシイザル之を聞て以爲らばゴール太守の任既に去り羅馬執政の官未だ至らざる無位無官以て羅馬の陣からは陣組の險前を在りて躊躇して敢て其命に従はざりしが元老院の固く前議を執り遂にシイザルに於て政府の命を奉せんとし國敵として之を討せしむと布告せたり

是より於てシイザルは遂に心を決して是非を干戈に断へんと欲し紀元前四十九年兵を率いてゴールを發し行々伊太利に入り已むして「ルビコン河」を渉り猛烈羅馬城に迫れり「羅馬人」シイザルの名を聞て皆之に響應せりボンハイ其謀す可らざるを知り一旦其銳鋒を避きて更らば爲を所あらんと欲し遂に出て「希臘」に奔

シイザルの六十日ししく悉く伊太利を平定せしが更に進んでボンベイを破り以て禍根絶たんと欲し「アドリヤチツク海」を渡りて希臘に入りボンベイの兵とフアトサリヤの地と會戦せり時と紀元前四十八年なり此役兵士の多寡より評せんにボンベイの軍遙かにシイザルの軍に勝れりさりと云へり然る者將勇卒も富めるものとか全軍の掛引きをケラ手足の如く此に大かたに新撰の兵士進退し習はざる者多きが故に兩軍の干戈を交ゆるや勝敗忽ち一決しボンベイの出で、埃及母奔り救を國王トレミイに請へりトレミイ乃ち臣下の勸めを容れ舟を繕して之を迎へ其陸上母達するを待て直ち之を殺せり

シイザル既しボンベイの軍を破り長驅して埃及のアレキサンドリヤ府に至り始めてボンベイ機死の報に接せり既にして埃及王使者としてボンベイの首級を齎らしめしがシイザル其慘状を見るに忍びを浩然涙を流し使者をして禮を厚くして之を葬らしめしといふ

シイザル埃及に留まること數日、其間國王トレミイと其姉クレオパトラとの争位に關係し之を爲めに一時危難のどのみしかど終に戰し勝利を得て國王ト

レミイを殺しクレオパトラをして王位に即めしめたり此時の戦争にて有名なるアレキサンドリヤ府の文庫に兵燹に罹り有用なる書籍幾万巻悉く灰燼と化したりき

シイザルの埃及より兵をボンタスに進めミスリデーチスの子フアア子セスを襲ふて直ち之を降せしが其迅速なること實に言語に絶したり此時シイザルが羅馬に送りし書信の文句の「采り望み降しぬ」といふ儘か三言止まりしは事と文と誠母能く相かなへりとして後の世までも稱し傳へたり

フアアサリヤ戰敗の後ボンベイの殘黨は脱して亞弗利加に至り遂に一團結を作りてシイザルに抵抗せり此黨の首領は有名なるカトありシイザル乃ち鋒を轉じて亞弗利加に入り紀元前四十六年ザアサスの一戦に於て大にボンベイ黨の軍を破れりカト一事の爲を可らざるを見て自ら劍を伏して死せり

其後ボンベイ黨の餘燼西班牙の地と再燃せしがシイザル兵を出しく之を討ち紀元前四十五年マンダの一戦に於て悉く之を滅せり

是より先き亞弗利加の役既終りて西班牙の戦争未だ起らざるころシイザルは

一旦羅馬に歸りしが國人皆其威武に慕ひ馬前より群集して其功績を稱揚し壯麗なる儀式を整へ四日の間其凱旋を祝したり府民より皆寵賚あり全都悉く歡樂して人々萬歳を唱へ元老院議官の如きも遂に膝を屈して諛言は献するに至れり是に於て人民遂にシイザルを推尊し上將の位に上らしめ任期十年となせり但し満期の後速かに増加して修身となれり其後シイザルの更に「インペラトル」の號を得たり「インペラトル」とは大都督の義なり又此時シイザルの肖像を刻して「カピトル」に安置し「ジュピター」の神像と對立せしめたりといふ

シイザルの神變不測なる働きに因りて終に紛亂したる羅馬の秩序に忽然茲に一新し隷屬の諸州皆其公正なる施政の恩波に浴せり「エーブル人」の如き今や議席を元老院に占むるを得其他の隷屬諸州の賢人長者も亦皆此貴重なる職に與かるを得るに至れり此外層法を改良じて萬民に便利を與へ「コリンス」若くは「ガール」に多數の移住者を送りて大に貧民の愁訴を減じ又「タイパー」の河流を道うんが爲に巨大なる溝渠を開鑿せるの計畫を起せり蓋し此希世の政事家に取ては天下の萬事萬物一に盡して之を能くせざるを得ず又之を厭ふの心を絶して「インペ」

「アグニニア」又ハ「ユーフラチス」の諸河邊を治めて其絶大なる版圖を經營するの方法を指揮するに因り其始む所又其長治る所亦もて羅馬の街道に幾多事業を監督するが如き或は競争力試等も臨み勝者を賞賜する徒文空章も耳を傾くるが如きも亦其避けざる所なりた
 今やシイザルの終身上將の任を帯びて王者に均しき大權を掌握するに至りしがシイザル 獨り其實を有するを以て足れりと爲さず更に進んで王者の稱號をも得んと欲せり然れども心算かよ之を望みしのみよて未だ口より發せざりし然るに一日市街を通行せし際人民シイザルを尊んで王と稱せし者ありしに群衆之を聞て皆不平の聲を發せしにシイザル乃ち疾く呼んで曰く我ハ王にあらざるにシイザルありと又執政にしてシイザルの親友たる「マルクス・アントニウス」が或る發儀の日に於て王冠をシイザルに獻せしむとシイザルは之を忌む者の如く故ら一斥けて受ざりしといふ
 然れどもシイザルの威力は日々益々強盛し赴きしる「パウルタス」カシヤスを始めゆ平生シイザルと快むざる者の益々嫉妬の念を起し共和黨の不平を懐くを奇貨

とし羅馬の自由と愛をもるを名として密に徒黨を結合し三月十五日を期してシイザルを暗殺せんと企てたり斯くシイザルの爲めに大不幸なる時日の漸く近づくに隨ひ種々の警告現れてシイザルに未然の禍害を報じたり就中有名なる一占者の豫めシイザルと戒めて「三月十五日の厄日」に當れり宜しく深く注意をべし」と告げ又シイザルの妻カルハニヤの其前夜に極て不吉なる夢を感じたりといふ三月十五日シイザルの元老院に入るや徒黨不意に起つてシイザルを刺殺せり時ふ紀元前四十四年なり

叔シイザル暗殺の結果に大に徒黨者の希望も反せり議堂血を流すの變に方り議官等皆恐怖して其家へ遁逃し敢てアルタス・カシヤス等を援くる者亦又シイザル一片の遺書の人民をして大に奮激の情を發せしめたり其書に曰くシイザルは其所有を分ち羅馬府民每人に三百「セスタース」十弗餘を與ふべし又曰く「タイバー」河畔に在るシイザルの莊園に之を人民の公園と爲すべしと遺言既し此の如し加ふるもマーク・アントニーの葬禮の日於て悲壯なる演説をなして人民をしてシイザルを慕ふの心を起さしめ且血痕斑々として襟袖に裂け破れたるシイザルの衣服を出して之を示し以て當日の慘狀を想像せしめしかば人民皆徒黨者を惡むの情制し難く一時は狂奔して火を殺害者の家へ放ち且其人を屠戮せんとせり是に於てアルタス及びカシヤスの二人は安然羅馬に留まると能はず遂に出で、國外へ奔れり爾後アントニーはシイザル黨の首領となり日其勢力を加へしが幾くならずしてシイザルの嗣なるオクタビヤスマセドンより歸り議官等の援助を得てアントニーを國外へ放逐せりアントニー乃ち身を西班牙及びゴールの大守なるレピダスの許に托せりオクタビヤスの其後益々人望を得て紀元前三十年遂に執政の官に上れり時一齡甫めて十九歳なり其後オクタビヤスアントニー及びレピダスの三人新たに連合を作り是れ羅馬史中に著名なる第一二三頭政治なり

羅馬に全權を三人の掌中へ集めんとするに先づ二箇の目的を達せざる可らむ(第一)三人の讐敵を殲滅すると(第二)共和の勢力を顛覆すること是なり是より其後「羅馬人」中苟も此三人に抵抗するの意思を有する者は殘忍なる手段を以て之を除死數百の議官と數千の府民とい皆其殘虐の犠牲となり就中有名

あるシセロの如きの其の妻は雄辯を揮ふてアントニーを議院に攻撃したるを以て遂に此慘禍に罹りしがアントニーの妻フルビヤのシセロの頭を見て憤怒に堪へず金釵を以て其舌を貫きしといふ

ブルタス及びカシヤスの二人の妻は羅馬を脱してスレーヌに至り遂に十萬許人の兵を集めて再舉を企てしがアントニー及びオクタビヤス大軍を以て之をヒリツビ野に撃ち遂に大之を破れりブルタス及びカシヤス事の役た爲す可らざるを知り自刎して死せり時に紀元前四十二年十一月なり

今や連合の三雄は十分其目的を達せしかば乃ち羅馬帝國を三分してアントニーは東國を領しオクタビヤスの西國を領し而してレピダスの亞弗利加の「プロピンス」を領せり然れども此中レピダスの其勢力最も薄弱にして分地に得たる後ち幾くあらむして之を失ひしるばアントニー及びオクタビヤスの二人専ら帝國を左右するに至れり

アントニーは既に其領地を得て小亞細亞のタルサスに赴て使を埃及に遣し其女王クレオパトラを召喚し其カシヤスを接して羅馬に抵抗せし罪を詰問せりクレ

オパトラ巧言令色を以てアントニーを籠絡し遂に相携へて埃及に歸り益々其心を蕩めしめ妻フルビヤの死するやアントニーは一時埃及を去りオクタビヤを迎へて後妻とせしが幾くならむして再びアレキサンドリヤに赴き身は埃及王の衣冠を着け亞細亞の諸州を擧て之をクレオパトラと與へたり

紀元前三十二年羅馬の議官等終つクレオパトラに向つて開戦を公告せりアントニー乃ちオクオビヤを離婚し兵を出し伊太利を襲撃せんとし双方の軍艦希臘北西海岸なるアクチウムの近傍に會戦せしがクレオパトラ先づ船艦を率ひて逃走せしるばアントニーも亦卑屈にも其後を隨ふて共にアレキサンドリヤに歸れり是に於てアントニーの軍勢は悉くオクタビヤスに降きり

オクタビヤス新勝の勢に乗じて進んでアレキサンドリヤ府を攻めしに府兵悉く之を倒しし羅馬の軍を迎へ城門守らば一府忽ち敵の有となりしるばアントニー策の出る所を知らむ終つ自盡して死せり

クレオパトラは其矯媚を以てオクオビヤスを眩惑せんとせしかどもオクタビヤスの深沈にして思慮ある容易に其術中を陥らざりしるばクレオパトラは羅馬の

匈奴曰く希臘語曰く亞細亞國是なり第一羅馬地方と總稱せし者のうちハ伊太
 利全州ハいふハ及バセゴール(今の佛國地方)地方并ニスペイン地方をも含みた
 せ其中スペインとゴールの地方ハ始め羅馬の爲ニ征服せられしころハ未ダ開
 けざる國ニして野蠻の民たるニ外ならずしが次第ニ羅馬國の文物ニ化せら
 れ其國語風俗等おほむね羅馬國ニ倣ふととるれり亞非利加の地方の如きハ「シ
 ーザア」ガ埃及ニ滞在ニカーセージの舊跡を再興せんとして大ニ殖民と送りしか
 ばいつとなく羅馬の風俗ニ感化し是また羅馬的の國となりたり
 然りと雖も希臘の本土マセドニヤ地方其他希臘の殖民地方及びマセドニヤの威
 力大ニ行われし地方ニ於てハ希臘の國語風俗依然として餘力を保てりされむ此
 等の地方ハ其政治上の關係ニ於てハ純然羅馬國の管下ありと雖も其文物の性質
 よりいへば全く希臘の傳來あり是之を希臘的の國俗といふ
 亞細亞地方即ち「トラス山」以東シリヤ及び埃及の地方ニ於てハ親しくマセド
 ニヤの支配を受け若くハ希臘殖民地の近隣ニありし者も多かりしが其國の起源
 の遼遠たるガ爲の故母や當代ニ至るまでも他の文物ニ感化されし事極めて少な

し故母其國語ハいふも更也風俗といひ宗旨といひ皆傳來の者を保存し絶えて變
 革を醸さざりき蓋し思ふニ此等の地方ハ一旦其國の閉けて後年を開きること久
 しきが故ニ舊來の文物土地と人民とニ凝着して容易ニ外國の新文物と混淆調和
 せるを得ざりしニ因るからん
 借ら／＼紫むる母羅馬帝國の創設ハ決してラクタピヤスの力母よりて成りし母
 もあらねば又決してアルタス カシヤス等の暴舉の果實としてあらざるなり之
 を要するニ自然の進化の已を得ざるニ出たるハ換言すれば外領日一月ニ擴張さ
 る、ニ隨ひ所謂專制一統の必要を醸せしなり元來羅馬府の政府の組織ハ一小都
 會のみあてはまるべき者として宇内を統御すべき組織にあらねば早晩革新を要
 するべしハ當然の事なりしも此時母至るまでハ外征と内患とに國力を費やし之
 と顧みるニ違をかりき然るニシーザアの時ニ及び外征の事漸く止み内患隨ツて
 減せしむる時勢ハのづから一變し專制一統の新政治を正母要するニ至りしかど
 皇天口無し人神ニあらむ當時何人歎此理を知る者あらんやシーザアの機敏ま
 る漸く此理の在る所を悟りしに似たれど惜しい哉未ダ十分ニ時勢と人情を悟ら

ざりし歟王位の實を得て満足せざ併せて其名を得んと望のりきまばあを國家の爲に至要の改革を企望しなから空しく中道にて倒れしなりヲクタブィヤス母至りてハ勇武シーザア及バむと雖も其謀の遠大なる恐らくハシーザアの上に出し歟機を察し時勢を考へ前車の覆轍を殷鑑としておのづから誠むる所ありし母因るといへ敢て急激に權力を得んとせむ漸を追ふて專制の基をひらけり機を知るの人といふべきあり

さきハヲクタブィヤスの治世以來ハ羅馬府ハ次第に其趣を變化し來りモハヤ早に伊太利の首都たるにどゞまらむ全羅馬國の首都となり隨つて四方の屬國の國民の如きも漸次に羅馬府民たるの權利を得て同等同格の民となり斯くて歲月を閱するまゝに終に巨大なる帝國を成せり昔ハ外領の民といへハ羅馬府民の臣僕ありしが帝政確立の後に於てハ皆帝王の臣下となり全く面目を一新したり

紀元九年羅馬帝國ハ日耳曼地方に於て大なる災厄を蒙りたり是より先き日耳曼地方ハドルーサス及びタイペリヤスあんどのカに依りて大に羅馬風に感化せし

がペイラス知事となりて之を治むるに及び施政宜しきを得ざりしかば國人一時に沸騰しアルミニヤスといふ者を戴いて首魁をかしペイラス及び其麾下の兵を聚めて悉く之を殺せり此變報の羅馬母達せしとせ「羅馬人」驚惶し「爲す所を知らざりき」オーガスタスの數日間快々として宮中を彷徨し絶えず安眠せる能はざりしとなり或日其頭を柱壁に觸れ且叫んで曰く「ペイラスよ我兵士を活し返せ」と其後六年ドルーサスの子ゼルマニカス日耳曼母至り不幸なる戦死者の白骨を収めて之を葬れり然れどもゼルマニカスの才略を以てするも遂に日耳曼地方を以て再び羅馬の支配を受けしむること能はざりき

然れども概して之を論むればオーガスタスの時代(紀元前二十七年より紀元後十四年)に至る四十一年間ハ平和隆盛の時代なりと謂ふべし帝ハ常に勤儉を重んじ力めて質素なる生涯を送りたり其衣服の如きは皇后リビヤ及び其侍婢等の自ら手を下して織る所ありしといふ帝又神祇を崇敬して民風を敦ふし學者を優待して民智を開けり又羅馬府の如きは帝の盡力によりて大に其美觀を増せり故に帝常々人々誇りて曰く朕瓦造の羅馬を前代に受け而して大理石造の羅馬を後世

一遺せりと之を要する一國安泰母して盜賊外患の虞なく豊富なる穀物埃及より來りて人と生活の安きを樂み地方の政治其宜しきを得て各國皆万歳を歌むれば此時より以降はじめて文學の盛んを見るあり之より以前即ち内亂の引續きたる間の總て文藝の微々として振はむ只盛んなるの政事界の激動のみ此故に政事的の機關として最も重大なる効用を有せる彼の縦横の術の如きは已に内亂の時代にて著しき發達を成したるに似たり其最も尤なる例は彼の有名なる辯士シセロにて見るべし此人の如きは彼のアゼンスの大辯士デモスゼニスを除く時の前後空絶の辯士と稱す理論實際無備へたるの人にて辯論に關する著述多し

共和政治の末路にては教育の道絶えて振はむ隨つて羅馬の府内にては學藝を修むるの便宜もふかりき故に其比の學生は速く希臘のアゼンス等母赴きりしこと良師母つき其學藝を研究せること入唐又ハ洋行の例にひとしかりき然る母帝政のはじめに至りて文壇の局面頗る變じ文學藝術振ひ興り大家鴻儒輩出せり是併しながら時機の正に熟せる外ならずタクタビヤス一人の力をかりと

いふ可らざるあり何とあれば此時代にて興起せる文人大家の總て共和政の末路母當りて已に頭角を露わしたる前代に屬する人間にして其色々の傑作のいづれも其頃母時置きたる種子は果實たるに過ぎざれば必ず必竟せる羅馬の開化に彼の共和政の末路に及びてはじめて成熟の域に達し希臘の文化と相調和し新に新開化の端緒をひらき所謂羅甸的の文學の奮興を見るに至りしなり

當時詩壇母於て大名ある者をホレトス并ハウバルジルとモウバルジルの紀元前七十年に生れたり其傑作を「エイチイド」物語といふ重ハホーマアの作にならひ更に一機軸を出せし者にて優美嫺雅を以て古今に稱せらる翁の實に古今に大詩人の一人にして羅馬文學の基をひらきし最初の一人といふべきなり希臘は文學の羅馬母入りしに此人并ハシセロホレトスの力ありといふも敢て誣言にあらざるべし

ホレトスの紀元前六十五年にて生れたり「ラトツ」と題せる詩曲を著して美名を博せり其他有名なる詩人跡しとせむ建築術の如きもまた大に進みたりといふ扱又オースタムの治世の間にて歴史の中心ともなるべき一の肝要なる事件

起れりとは他はあらむ猶太なるベスレヘムの一村落に於て耶穌基督の生誕せしこと是なり但し此事は起りし紀元前四年の事をれは現今用ひらるる曆算の年期は少しく事實と相違せる者あり悉しくいへば今の所謂紀元一年は其實紀元後五年に當れり

此時羅馬帝國の境界は東に「ユーフラチス河」に至り北に「ダニユール」及び「ライン」の二河に迫り西に「大西洋」に濱し地中海の亞弗利加の沙漠に接せり此境界内には色有せる人口は大約一億にして其邦國の數は百を以て數ふべし而して各々其固有の國語を用ひ其固有の宗教を奉じたり三十五萬の陸軍を以て管下の不虞に備へ一萬の「アレトリヤンガード」即ち近衛兵は帝王の玉体を警衛せり「羅馬人」呼んで「我海」と爲す所の地中海は此大版圖内に散在せる諸州の間は天然の街道のを成し其他幾百の街路首府と地方とを聯絡せり然り而して此至大至廣なる帝國の版圖に向つては帝意即ち法律ありき帝の一嘆一笑は一人一都一州の禍福存亡を決したりき

是より後羅馬の歴史は人民の歴史にあらむして帝王の歴史あり蓋し羅馬の政府

の名は未だ帝王政府にあらずりしども世々君長を設くるの恒例を定めしむるに遂に純然たる帝政の体面を具ふるに至れり但し外國世襲の制は敢て一門一閥の族人をして王位を世々とする事を定めざりき

オーガスチス帝は崩御より紀元四百七十六年に至るまで羅馬は七十有餘の帝王あり然るも今一々之を擧ぐるは暇あらむ唯だ其重なる者を述ぶべし

オーガスチスの崩するや議院の評定を経て其養子タイベリヤス位に即く即位の初めの善政を施して頗る人望を得たりしかど其後漸く虐主の性質と見出し一旦其寵臣の帝を惑はして權柄を擅ふしたる者を處刑せし以來大小人を疑ふの念を生じ故なくして臣民の命と絶つこと多かりき故に人民皆戰々兢兢として一日も其心を安んむること能はざる帝の崩御を聞くに及び始めて枕を高くせりといふタイベリヤス在位の間は最も著名なる事件はセルサレムに於て基督は磔殺されしよし是なり基督の略傳は後宗教の事と共に物語るべし

紀元三十七年カリギユラ次いで位に即たり性來狂癡の傾きありて國政を顧まざる其衆馬を愛するの餘り之に執政官の位を授け又金槽を作りて之を養ふ如く狂人

類きも穢弊多し且暴虐にして人を殺すを嗜めり嘗て公言して曰く「羅馬人」合して一頭を為さんとを望む一頭あれば一撃以て之を断つを得べし豈快まらや

キヤリビユラ崩じてシロイシマヌ次ぎアローシヤヌ崩じてネロー位に即けり或上執事も養子として實子あるを時ニ紀元前五十四年ネロー殘忍にして即位の始め其母及び妻を殺せり又嘗て火を羅馬市中に放ち炎燭人家を一掃するの隙自ら高臺に登りて其慘狀を傍觀し欣然として琴と彈しとらといふ後元老院の爲に位を廢せられ自殺して命を終れり以上四帝皆暴主にして朝綱大に亂れたり故中アローシマヌの如きの兵士の推選よりして王位に即きたる者もて議院の評定に因りしとあらざるを羅馬帝國の兵選帝王の事起りしに實に此帝を嚆矢とすニロー帝の崩もある後ハ天下亂る、事麻の如く四方の兵皆其將を推して帝とせん事を試みたりキマルス帝アトイ帝ウバイテリヤ帝レ如きの皆兵選に係るといふ所しを皆皆相尋いて臣民の殺す所となり四紀元七十年の頃よりして至りてウベヌスバシヤンセルサレムを攻めて武名あり終に猶太に於て麾下の兵士等

ふ擁せられて帝位に上れり帝の徳行の良主なり銳意羅馬の風俗を改良し古代の儉徳と質直とを回復せんことを力のたり其子タイタス父に繼いで位に即き徳行の名留世に高ありき不幸短命在位二年にして崩る其弟ドミシヤン位を襲へり帝の第二の子ロー若くハカリグラとも言ふ可し性暴戾國又大に亂れ九十六年其妻の爲めに殺さるたり帝に常々自ら神明ありと稱し人をして神明に對するの尊敬を表せしめんとせり

其後紀元九十六年より百八十年に至るまでチルバトレジヤンハドリヤンアイントニヤス、バイヤス、オーレリヤスの五帝相繼いで位に即けり皆徳行善良を以て稱せらる此五帝の或ハ土地を分與しく人民の貧苦を救ひ或ハ文庫を起し學校を立て、教育を勤め或ハ管下を巡歴して有司の良否を察せり之を要するに五帝在位の間ハ國家太平にして人民其恩澤を喜びたり

斯くて後紀元百八十年コムモーダス帝の位に即く、及び其政宜しとて得て物情騷然帝に終ふ其長子の爲に殺されありヘルチナツクスといふ者處ち選まきて帝となりしが教程も亦く近衛兵の殺す所となり朝權ごとく、地は墮たり當時近

衛兵の権力の殆ど無限にして終身帝王の位を金銀に代へて賣るに至れりジュリヤンといふ元老院議員の豪富を以て名有り近衛兵一名につき各々六千二百五十「ドラクマ」(凡我千圓)を與ふべしと約して反掌の間帝位を昇りぬまわれども浮雲の虚榮久しからず僭主八方に濺ひ起り國中亂るゝこと麻の如くありき終にセベラスといふ將軍あり兵を師めて羅馬に入り兵士等推されて帝位に即き直ち母ジュリヤンを刑に處せりセベラスの位母即くや遠く將采を應りて從來の近衛兵を解散し新に衛兵を徵集して大に回采の弊を革を以て王權を守りしかば一時の國內の擾亂も治り帝も自然の死を遂ることを得たりた

其子カラカラが其弟ダタを殘殺して持り帝王に位置せしむ及び國內また紛擾せり斯くてカラカラの幾ばくも亦く臣民の爲に弑殺されマクリナス選ばれて位に即れしが帝をまた暫時にして位を失ひエラガパラスが爲に殺さるりエラガパラス帝位を得たりと雖も放逐して不明若長たるの資を忍ち兵士等の殺す所となりぬアレキサンダアセベラス次いで皇帝となりしかども紀元二百三十五年帝もまた人の爲に殺されたり之より以降二百五十三年ウパレリヤン帝の時

に及ぶまでの内亂外患をむ時を就中二百五十一年デシヤス帝の時より北方より「ゴツス」といふ蠻族の襲來をあり帝は之を迎へ撃て大敗し命は戰場に落したりきガルラス帝位を襲ふに及び歳貢を献じて「ゴツス」の歡心を買ひしと雖も之より北蠻の輕侮を蒙り羅馬帝國日お月に危うからんとせりウパレリヤンの朝に至りては「フランク」族漸くゼルマニイの地方に跋扈しゴールスペインを侵襲し羅馬の外領を悩ましたり之と同時に東方亞細亞領に接近したるペルシヤ國の國王アルタキゼルキセス其子サボアと共に兵を起し大に羅馬領を侵略せり帝親征して大に敗れ終に敵の爲に擒りたり

加之内國に於ては僭主八方を並び起り各々其威力を張らんとせり史に所謂「三十僭主の時代」といふ實に此時を指す者あり

其後紀元二百六十八年クローヂヤス帝の位に即く及びゴツスを征討して克を得たり同二百七十年フーレリヤン帝位を繼ぐに至り國政漸く日お復し同二百八十三年此間五帝あり(ダイヲクレシヤン帝の朝に於て王權次第に伸張し兼て全體の國憲の上にも大なる改革を生ずるに至れり他は中央集權の制度の全く其

に至りて破きたる事はなり更ニ悉しくいへむ帝ハ往時の事蹟ヲ後して將來の利害を考へ到底一人の力をもてして斯くの如き大國を治めがたきを看破し大帝國を分ツて東西の二部と爲し其將マキシミヤンといふ者を擧げて之ニ副帝の榮号を與へ専ら西方を治めしめたりされバ帝國の首府の如たも之より東西二分る、事とあり小亞細亞のナイコメヂヤを以て東方即ちダイヲクレシヤン帝の首都と定め伊多利のミランを以て西方の皇都を定めたり併しおがら斯くても尚足らざる所ありし歟後更ニ二人の副帝を新任せり先任の二帝を「陛下」^{フレイグスタス}と稱し副帝を「シイザル」と尊稱せり

其後紀元三百二十三年コンスタンチン帝の時に至り更ニ大なる改革を行ひたり即ち二分されし帝國を統一し二帝副帝の制を廢し中央の大都會を東方バイザンチヤムの地ニ遷せりバイザンチヤムハ「ボスホラス海峡」ニ在りて元と希臘の一都府なりしが此時其規模を擴張して羅馬國の首府と爲し帝自ら命名して新羅馬せいへり後世呼んでコンスタンチノールと爲す者是なり蓋し是より以前と雖ども歴代の諸帝常ニ羅馬ニ居住せしニあらざしてミラン、ナイコメヂヤ若く

ハ其他の地方を以て帝居と爲せしとあり然れども遷都ノ事ハ古來未だ曾て之をらざるべきハ此一事を見てハ大帝の時羅馬府の既ニ衰へたるを知るべし都をバイザンチヤムニ遷せしと同時に羅馬帝國の組織も亦大ニ其面目を改めたり元來コンスタンチン帝の都を遷さんと企てたるハ其意憲法を改革せんとせし外ならず蓋しコンスタンチノール即ち新羅馬ハ帝が基督教徒となりし後ち新たニ開々たる都府なれば第一ニ基督教を輸入するニ便利あるの土地なり何とされバ羅馬田來の宗教は此地ハ勢力と有せざるなり且之を羅馬府と比ぶる時ハ萬事其趣を異しして新政を始むるニ最も大なる便利を與へたりされバ帝ハ此新都ニ移ると同時ニ銳意國憲の改革ニ從事し從來ニ制度の中弊あるを除き利あるを恢復し文武の組織兩をがら其宜しきを得んとを力めたり元老院及び執政官の如きは依然此時も存したりと雖ども帝國の政府ハ全く專制の制度となり國內亦大ニ太平なるを得たり又コンスタンチン帝の在位ハ甚だ長くして爲めニ國政益々整理し其血統の續く間ハ帝位を世々よもるを得たりコンスタンチン帝ハ其崩るニ先ち全國を三分して其三子ニ與へたり然るニ帝の崩るニ及んハ

三子互に權と争ひ天下復た大一亂る紀元三百五十三年コンスタンシヤス遂に之を一統せりコンスタンシヤスの世叛逆を企つる者并に帝號を儲る者紛々として起り加ふるに「日耳曼人種」及び「ヘルシヤ人」との戦争あり帝の従弟ジュリヤン宰相となり大一「日耳曼人種」と戦ふて之をゴール地方より逐ひ出し頗る武名を得たり是に於て兵士等之を推して帝とせり會にコンスタンシヤスの崩れるありてジュリヤン遂に帝となるは得たり然れども久しく其國に君臨すると能はる三百六十三年「ヘルシヤ人」と戦ふて敗死しコンスタンチンの血統全く滅絶せり」基督教の發達の正はコンスタンチン帝の朝に在り故に是より叙事を導く轄らく基督教の變遷を語るべし

オーガスタスの時は當り羅馬帝國の種々其人民あり隨つて種々の宗教ありたり然れども之を要するは「猶太教」の外は皆偶像教のみ然るに此際羅馬領地の一隅に於て耶穌基督の生誕あり遂に一派の新宗教を開き古來の迷信を破りて斯世界の思想風俗を一新せり然れども當初に在りては「羅馬人」中賢明を以て稱せらるる者だに此基督の生誕といふ一事件が數十年に至りて至大至重

なる關係を世界に有するに至らんといひ決して想像を能はざりしあるべし願ふに羅馬帝國の統一の基督教の廣布に大なる便利を與へたり何となれば羅馬帝國が其版圖内に數多の異教國を籠入したるの一事は基督教をして一時は其力を廣大なる區域に及ぼすべき好機會を得せしめられたるなり

傳て曰ふ耶穌の父はエブラハムの苗裔ダビツドに後胤其名をジヨセフといふ工人なりメレーといふ婦人を娶りしに未だ室を同うせざるに先だちメレー已に懐妊しおたりジヨセフ初に疑ひしが天使降臨し天神のメレーに幸して天子を生ましめたまふ由を傳ふジヨセフ大に畏敬し其兒の生るるを俟り耶穌の生るるに天は異星現じ瑞祥いちしるしジューダ王大に怖れ禍根を未だ發せざるに斷たんと欲し嚴令して耶穌を殺さんとしジヨセフ天子を抱いてエジプトに奔る耶穌生長するに及んで天神禮拜の道の大一をたれて徳義壞亂せるを歎き奮然上帝の旨を奉じて邪教を撲滅し真成の宗教を布かんと欲し卑身空教の事に従ふ其間の苦楚艱難能く言語の盡すべきにあらむといふかくて其教よりやナハ方々廣布し門徒日一月に増をよ及び羅馬の政府に益々耶穌を忌憚する

の念を加へたと同時に異端の徒の誣妬甚しく之れが爲に耶穌の冤罪を蒙り
ジユデアなる羅馬の鎮臺の捕ふる所とあり十字架上の露と消へたりさりしが
其聖靈の滅せを直ちに復生して天に上れり云々

耶穌基督の磔刑に處せられたるのタイペリヤス帝御宇の十九年、在り其後門
人等能く基督の遺志を繼ぎ其教を四方に弘通せり之を耶穌使徒と稱す使徒の中
最も著名あるのセントポールにして小亞細亞及び希臘の地方を巡歴して基督
の教を説き其勢漸く羅馬に波及せり然るに此時暴君ネロ深く「基督教」の蔓延
を惡み遂にセントポールを捕へて之を斬罪に處したり又己れ自ら火を放ちて
羅馬の市街を燒さながら罪を在羅馬の耶穌信徒に歸して悉く之を殺したり是れ
獨り暴君ネロのみならず其後三百五十余年間羅馬の諸帝に皆「基督教」を惡く
と數々殘酷なる處置を施して其教徒を苦しめたり

抑も羅馬帝國の版圖に廣く其宗教亦隨て無數なり而して羅馬帝に能く此無數の
宗教を容れて敢て之を咎めざるに獨り其基督教のみ之を容れずして殘酷なる處置
に出づるもの何故なるやと尋ぬるに基督教徒の人を改宗せしむるに熱心なる

事及び其教徒の集會に常に夜に於てし往々秘密の事を談むる事其重なる原因な
るや如し

夫れ基督の教たるや諸國の宗教に勿論羅馬の國教をも亦之を排撃し羅馬の神祇
を尊むる羅馬に諸帝を拜せせ而して都て斯民をして其教旨に従はしめんとする
ものなり故に羅馬帝に能く他の從順なる千萬の宗教を容るゝも遂に一の倔強な
る「基督教」を容るゝこと能はざるに至れり又其秘密夜會の如たに政府より認め
て以て最も不道理とあし且危険ある結果を生ずべきものと爲したり故に羅馬に
於て「基督教」の禁制せられたるに宗教上の原因より採れりと謂はんよりの專ら
政治上の理由より出でたりと謂ふ方適當なるべし

されば羅馬に於てトレジヤン若くはオーレリヤスの如た明君賢主の出づるや必
らず「基督教」に甚しき危険を與へ庸君暗主の位に在る時却て此宗教に其自由を
與へたり然れども殘酷なる處置に未だ以て教徒をして其志操を變せしむるに足
らず又宗教廣布の進歩を妨過するに足らざるありされば其後トシヤス及びコレリ
ヤンの諸帝亦虐待を施せしむるも「基督教」に毫も之が爲めに屈撓せざるのこ

ならず次第に萬國に周達するの傾向を現はせり
紀元三百三年ダイオクレシヤン帝の時に至り帝は婿ガレリヤスの基督教徒の深
篤なるより帝は勸めて悉く「基督教」の禮拜堂を毀ら「基督教」は經典を燒き「基
督教」の人と官爵の外に放逐するの布令を發したり

ダイオクレシヤン崩じガレリヤス位に即く及び「基督教」の虐待は一層甚しき
を加へ八年の間一息の間断えなく之を苦しめたり然れども基督教徒の固執なる
到底其種子を撲滅はるること能はざりしかむ晩年に至りてガレリヤス遂に「基督
教」禁制の令を廢したり

是より風潮一變し紀元三百二十四年コンスタンチン大帝立つ及び大に基督教
を信仰し遂に立て、國教と爲せり爾來其宗旨大に發達し羅馬の古教は爲めの大
に衰へたり時に埃及のアレキサンドリヤに一僧あり所謂「アリヤン派」の基督教
を唱へ出せり又羅馬の古教も往古より人民の信仰せし所なれば一朝一夕に其跡
を滅せず數教交々起り互に相軋轉して大に愚民を惑はせり是に於て三百二十五
年ニシニヤのニゲヤ各派の僧侶を會して其争ひを止むるの議を開けり是を

「匈奴」ニースの會といふ基督教徒總會の權輿なり

此時に當りて羅馬の政治は純然たる專制政治にして往古の共和政治の遺る其痕
跡を留えず尙も其位に在らざる者も敢て争を政治に容るゝと能はざりしが獨り
宗教の事には於ては自由に其説を述ぶるを得たり是に於て乎獨斷の教理百出し愚
民の宛も其玩弄物とならんとするの傾向を生ぜり是れ前記述べたる總會を開き
て其紛争を止めんとしたる所以なり此の如く種々雜多の宗教の現れたる中
に就て基督教の最も信仰を博し大に勢力を得たり然れども羅馬帝國の境界に甚だ
廣くして其風土人情亦隨つて同じからざりしは基督教徒の慧敏なる早くも其
事情に適應するの必要なるを覺り土地および人および多少其教旨を變更し以
て其廣布を計れりされば同じ基督教の中にも遂に種々の相異なる教派を
生ずるに至れり

試み當時の各地方の宗教の性質を略述せんラテン地方即ち伊太利、ゴール西
班牙等の如き其文明の度未だ希臘の文物を傳承せし東方の諸國に及びざりし
故に其宗教の如きも唯だ外面の形に泥み眞の微妙なる教理を探究するの域に至

らざりき然るに希臘の流れを酌みたる東方の諸國に之は異なり其從來の文物業已は優等あるを以て深く宗教の真旨を味ふに至れり其他亞細亞地方及び埃及の如きの今尚や古来の宗教を信じ基督教を奉むるの傾向をかりき是れ此國の文物の基礎極えて鞏固にして基督教の力を以ても之は打勝つと能はざりし由る乎將た又基督教の自然の進路常は西方に向ひし故に先づ容易なるを取るは策より基督教徒も敢て此地方の教化を力めざりし乎思ふに此原因兩ながら與りて力ありといふべし

斯くて後ジュリアン帝の時(三百六十二年より同六十三年に至る)に至り帝は基督教を信奉せむを銳意舊日の宗教を恢復せんとせしが其事終に功を奏せむ基督教の彌々其勢ひを逞うせりシアドシヤス大帝の立つて及びては基督教の殆ど全盛の域に達し此宗教を奉せざる者の嚴し刑罰に處すべしとまで勅令を下すに至れりといふ此に於て乎舊日の宗教の靡然として衰へ次第に痕跡を失ひたり以上基督教の興隆せし所以を講じたりされば予は更らば本史に反りて羅馬帝國末路の史を語るべし

紀元三百九十五年シオドシヤス帝の崩るや帝國また二ツに分る長子ホノリヤスに西帝となり次子アーカーヤスに東帝となり是より以後羅馬史分れて二ツとなる西帝國の變遷を叙する者を羅匈帝國史となし東帝國の盛衰を語る者を希臘帝國史となす然り而して希臘の帝國史は重し中世に涉るものなれば此古代史の章下は於ては單に西方の歴史の之を取り其兩分せし時代よりして其に減り至るまでは所謂末路史を略述すべし

今やローガスタス帝の時代を距ること殆ど四百年の久しきに渡りしかば士民專制の政治は慣れ一人の法令を甘んじ奉じ太平無事ならんことを是欲してまた往時の共和政治と思ふものもなし必竟るに羅馬の人民はモハヤ堅忍不拔なる自由獨立の精神を有しある民にあらむして優柔不斷卑屈無氣力民と化せり且や華奢靡麗の風俗日一月に上下の徳操を腐敗せしめ廣漠たる帝國の中また一人の

カトー其人を見ること能はざるの有様とされり是より先き北の方ゼルマニイ(今の獨逸)にさまよひの蠻族あり總稱してテュートン人種といふ者接踵して帝國の境を侵し終に之を亡ぼすに至れり元より北蠻

の入寇ハ此ころハはじまりし事ハあらざレ以前段も述ベシ如クヲトガヌ
スハいふハ及バズ其他勇武なる諸帝王ハふるツテ其衝ハ當リシウバ流石ハ慄慄
なる「チユートン人種」も終レ之母克ツ能ハズ繼グビも本國ハ追カヘされたり然
れども歲月を経ルニ隨ヒ蠻族ハ漸ク強大トナリ其兵鋒の銳ミことまた前年の比
ニあらざるニ羅馬帝國ハ之ニ反シク一たび四海の富を集メ奢侈風流ニ泥ミテ
リ武威振ハざるニ至リシハ今ハ強族ト奮闘シテ勝敗を戰場に決スル能ハズ何
時トナリ彼と親シミ利を以テ其歡心を買フオトをカメ貨を以テ服スルの策を用
ヒシカバ「チユートン人」と羅馬人との關係ハその趣を一變シ「チユートン人」ハ
羅馬人と交ハリテ其國の開化ニ兼ヒ羅馬人ハ「チユートン人」を利用して重ニ兵
戰の事ニ當らしめたり是此國ニ於テ傭兵の慣例の大ニ盛んニナリ且根本ニ
ニ此國の亡滅セシ速因あるベシ爾來「チユートン人種」ハ一方ニ於テ羅馬の役員
トナリテ其文明の薰陶を受ると同時ニ或ハ勲功の賞として封土を得或ハ強迫ニ
よりテ所領を得たり此間「チユートン人種」ハ常ニ其名義ハ帝國の臣たりしが如
クなレト其管帝國の法令を蔑視シ往々不法ある振舞ありしが帝國之を懲ラ能ハ

ニ斯レ如クして「日耳曼人種」ハ次第ニ帝國の文化ニ染ミ後年ニ至リテハ基督教
を奉ゼシも極めて多シ然レども彼等ハ重ニ「アリヤン派」の基督教を信シたり元
來「アリヤン派」ハ基督教の一派ナルトモ其旨趣トスル所ハ大ニ異リ單純ニして
且荒唐なる者なりといフ是蓋シ蠻夷の耳に入り易ク隨ツテ「チユートン人種」の
信奉する所トナリ原因あるベシ
爾後「チユートン人種」ハ陸續帝國ニ移住シ幾もなくして其人口甚シク増加シ遂
ニ到る所「チユートン人種」を見るニ至レリ凡ソ蠻人の他國に移住するハ其本國
ニ於テ土地競争の劇シキニ由ルニ悉シク云ヘバ他の人種の攻撃を受けて其土ニ
安んズること能ハざるガ故ニ他國ニ遁逃シテ新居を營まんトスルニ在るガリキ
れば「チユートン人種」の帝國內ニ移住する者大ニ増加セシも當時所謂「匈奴」を
始めトシ「チユレニヤン人種」(亞細亞人種)の支那地方より逐ヒ出されて新居を
求めんガ爲メ「日耳曼地方」ニ侵入シ其勢甚ダ猖獗ナリトナリ「チユートン人種」
大ニ苦ミ遂ニ其故山を去テ居を帝國內ニ求めシニ由るナリ但シ此「ハンス族」ハ
未ダ帝國ニ向テ來侵を試ミざリた勿論後年ニ至リテ來寇セシことを言ハズ

と久しく其足を留むること能く他の地方に歸り去れり然れども夫れ日耳曼の蠻族が帝國の領内に移往して爲め其危解を促せしを蓋し「ハンス族」の歐洲を寇す基くあり故に「ハンス族」の進退の大に帝國の盛衰に關係する所ありと謂ふべし

「チニートン人種」の中にて第一に「匈奴」入寇の災を被むりしを「ゴツス人」を爲す「ゴツス人」は當時既に一大國を成し「ダニユープ河」の北岸に浴ふて嘗て羅馬國の所領たりしパシヤ領分を占有せり此パシヤに先だ羅馬帝トレジヤンの時「ゴツス」の酋長に與へたるものなり「匈奴」の歐洲に入るや疾風の勢を以て之を攻め一擧して之を破れり之を爲るに「ゴツス」の其土地に安んずる能くは「ダニユープ河」を涉りて羅馬國に入り國內に居住せんことを羅馬帝に請ひしに帝之を許せり是實に三百七十六年なり然れども帝國「ゴツス人種」を待遇すること厚うらざりしは「ゴツス人」兵を擧げて羅馬に及し三百七十八年一大戰爭を惹起せり東の帝ウパレンス之を攻めて敗死せり是より「ゴツス人」稍々強大となり常に帝國の領内に往して其勢を恣にせり

「ゴツス人」の初めて帝國に入りしは其東部よりせり然れども既に帝國に入りて其國と建てんと試みるに及んで其地を東方に擇むを以て遙るに之を西方に擇むべし是蓋し師に従ふて常に其下に居るは實力ありと雖ども大事を成すは難しといふ道理を覺りざるに外ならざるなり夫れ「ゴツス人」の初めて帝國の東部に入るや其文武の技を於て固より羅馬の人民及び其及びざる所を彼に學び而して其師たる人民に打勝んとするに固より難くして行ふ可らむ然れども細つて西方に至り當初よりの關係なく且己に文弱の弊に陥りたる西羅馬の所領を奪るに易し是れ「ゴツス人」の西方を擇びたる原因なり此派の「ゴツス人」を或は稱して「西ゴツス」といふ

當時羅馬帝國大に亂れて蠻族國中に横行し帝王の廢立踵々接し僭主四方に走り朝憲地に墜ち帝國の威力を失せオドシヤス帝の天下を一統するに及び民少く其堵に安んぜしが其庸愚なる二子が之に繼ぎ東西の帝となりし時は當り西方の「ゴツス人」既に強く有名なるアラリック其王となり帝國北境を侵せり西帝兵を出して能く之を防ざしと雖ども遂に其銳鋒に當ると能くは羅馬府に遂に「ゴ

ツス人」の陥る、所とあり後ち幾もあくしてアラリツク死しアドルハス繼て「ゴツス人」の王とをる母及び新た「羅馬人」と和議を請じ「ゴツス人」に總べてゴール及び西班牙に向て退けり之と同時に「ウパングル族」を始めとして日月曼の諸蠻大にゴールを襲む進んで西班牙の諸領を奪へりアドルハス羅馬帝國の爲めよするを名せし大軍を將として西班牙に向ひ大に他の蠻族と戦へり是れ實に西班牙の幾分を征略して已れの有とせんと企てたるに蓋し歐洲の西方に「ゴツス」が獨立れ國を建てしに實に此役母基く之且またゴールの地方に「フランク族」「バルガンヂヤン族」并「ゴツス人」等各々擅に帝國の所領を奪ひ互に厭もて飽くあまかじ亞弗利加の帝領も又是ゼンセリツクといふ蠻將が率ゐたる「ウパングル族」の爲に略せらるたり其他英島の鎮堂の如たも悉く本國へ引上げたるが爲めは彼の島のゼルマニイの蠻族たる「サキソン族」并「アングル族」の爲は蹂躪さきたり扱斯の如く西帝國は諸領に「ゴツス人」「フランク人」「ウパングル人」以上總て「チユートン人種」等の押領する所となり朝憲益々地は隆ちたり而して東帝國も亦屢々「ヘルシヤ人」に侵す所となり大に其防禦は苦めり時

の王アツチラ大舉しく東西の帝國を襲む帝國中に位居る人民に「羅馬人」と「チユートン人種」とを問はむ皆大に其災を被むり帝國の版圖は盡く「亞細亞人種」の有とならんとせり是に於て乎「羅馬人」「ゴツス人」「フランク人」等兵仗合せ四百五十一年「亞細亞人種」とシヤロンの地に戦ふて大母之を破り遂に其災を免るゝことを得たり此戦争の實に世界の運命の分るゝ所にして其全世界の文明の消長に關係をること極めて大なり何とされば此戦は「アリヤン人種」と「亞細亞人種」との大争闘たるに外ならざればなりされむ若し「亞細亞人種」として此戦争に勝たしめむ世界の宗教文物は皆亞細亞風のものとなり随つて永く開明の進路を妨げしや必せり故に此時「アリヤン人種」の勝利を得たるに全世界の爲め大なる幸福ありしと謂ふべし此戦争に於て最も著名なる功績ありしは羅馬の大將イーヂヤス并「西ゴツス」の王シオドリツクとして王の勇戦最も力の遂に命を戰場に失へり此間西帝國の其勢益々振はむ帝王の廢立屢々起り四百七十六年ロミユラス、ラーガスチユラスの世に至り羅馬の元老院は最早帝を置くの必要なきを決議し東帝を以て一統の君と爲し西帝國を廢止せり當時の東帝ジイノ

西帝國の日耳曼雇兵の大將オドアセルは國司の號を與へ之に伊太利の政事を委任せり是母於て羅馬帝國のコンスタンチノールを首府として僅るに其命脈を維持せしと雖ども夫の一時四海に君臨せし羅馬の都府に遂に蠻族は手に歸せり然れども流石に西方文明の中心たる首府なれば其文物の依然として存し蠻族之に由て法律其他の文物を學び開明の先導となりて永く羅馬國の芳名を傳へたり西羅馬の廢止に所謂上古史の結局あり是より以後の歴史を中古史と稱す中古史は各國勃興の歴史にして佛國に起原英國は權輿并に西班牙伊太利獨逸土耳其等乃濫觴に皆此中よ於て謙ぜざる可らざる而して夫の東羅馬帝國の史の如きも亦此中に於て叙述をべし

さりながら中古史に移るに先だち説漏らしたる文學上の事を今少しく此に述べし
 フーガスグス以来文學の大に隆興せると共に大家ならび起り基督教は盛んに布かると同時に神學の博士接踵して出たりまづフーガスタス時代以前に語りしワバルジルホレーヌをといふ詩人の外よりヒイといふ一百四十二卷は羅馬史

歴

史

を著したる歴史家あり其後三十七卷の博物學を編みたる老プリニイあり書信文を以て有名なる少プリニイ(前者の甥)ありタシタスに羅馬史を著して希臘のシユーシヂアス又ハヘロドタスとならば稱せられセネカの詩人として辨士として院本家として修身論者として并に哲學者として大名を博したり
 神學の博士として其名を當代に博せしもの蓋し一母して足らざれども其重立たる一二と舉れば「モナスチズム派」の開祖ゼロームの如きまづ其一に位すべしゼロームは紀元三百四十年にタルマシヤといふ所にて生れヘアリウ國にて學を修め其本國に歸るに及び其著述頗る多し最も名高き羅馬文に譯したる通俗の聖書あるべし又亞弗利かよて生きたりし僧正フーガスタンの如き又是録々たる大博士なり紀元三百五十四年を生れたり世に羅馬神學の父祖と尊稱する高僧にして聰明雄辯を以て聞えたり其重なる著述は「神徳論」「原罪」「神都」并に「懺悔談」(自傳)等あり
 文學は事によつてやめ少しく羅馬の生活風俗慣習等の事を語るべし但し下述する所の概して羅馬帝政時代の風俗に偏する者に其の共和政治時代は在りて

多少の相違ありし事無論なりと知るべし
 羅馬人の最もいちどるき特別の衣服は「トীগ」と通稱せし長外套カウチなりこれに純
 白なる羊毛を以て織りたる者よく其形蒲鮮カウチの切口に似たり思ふに今の日本人が
 着用せる廻し合羽に似て上品なりし者歟共和時代より其仕立かたも粗末ありし
 が後より美麗なる「ヒダ」を作り添えあとして立派なる者となりし禮儀の場合に
 欠く可らざる服装の一つせめてはやさしきと云「羅馬人」の旅行の時の外の帽
 子類を用ひし事おし市街より帽を戴く者あれば潜行せる人と思われたりとか家
 にありては跣足へ「ソリイ」といふ舄履やりの物をはき出る時「カルシウス」と
 いふ靴に似たる物を穿てり婦人の服装は三種に分れたり中流以上の人の妻とな
 りては「ストローラ」と呼べる上被を着せり此に短き袂の附きたる者母を胸のあた
 りにて帯よてしめ其裾を長く引くを帯とせり又「バルラ」と稱したる上被は外出
 の折に被る者おておしをべて其色の派手なるをよしとせり大かたは金糸を以て
 星を縫ひある蒼空色セウキョウのものが多かりしといふ今一つは長下被といふことより「ス
 トローラ」の下より「バルラ」の下よりたたるものと思はるる要するに「羅馬人」の頭

る華美なるを好みたれば就中女の衣裳は或は燃たつぱりなる紅ひは用ひ或は
 目も眩むべし黄金色を用ひたり其他紫碧綠等尚もめざましき色を用ひざる事お
 し故に羅馬上流の懸席に臨む時の錦繡の榮爛たるは寶飾の的線たるも相映じ其
 うつくしき類ひなく見る人の目を驚かせりしと貴婦人の概して薔薇花の頭飾を
 以て頭髮を飾り黄金の針を以て之をとめ加之頸と腕とより真珠または黄金の飾
 を着けたりといふ
 上代に「羅馬人」の麵包并は野菜を以て常食となせしが騎者の風盛んなるに及ん
 びて山海の珍羞其食卓を掩ひあり食事の度數は三四にして朝食を「ゼンタキユ
 ラム」と稱し麵包乾葡萄又は「フリープ」乾酪等を定食とせり但し恐らくは牛乳
 并は鶏卵のたぐひも併せ用ひたる事ならん中食は「ブランヂヤム」と稱し魚類鶏
 卵等を定食とし昨夕の殘物あれば之れとあさめて喰ふとせりまは葡萄酒を
 供ふるを定めとせり「キーナ」即ち夕餐の最も重なる食事にて譬へむ二の膳三の
 膳の備へありて鳥獸魚菜總て味ひの美なる者を探べりきりながら動もすれば味
 ひの美なるを二の次として品の珍らしさを好みし事あり此食事に所謂點心テウシンの

用意もありて善美盡さざる所なりし
 共和政治の頃まで列浴場の設けなく男のタイパー河に水を投じて冷浴を
 取るを常となせり是羅馬の壯士をして筋骨を逞くせしめたる所以ありしが世の
 中奢靡に傾き、後ハ市中到る所壯麗風雅ある混堂の設けありて男女老少皆爭つ
 て蒸發氣の温浴を取り全日歸家と忘るゝ事ありき其混堂の建築の如きは實に立
 派を極めたる者にて蒸發氣浴の仕掛れ精巧あるは古今とぐひなればかりありし
 といふ件の浴場の猶今日の温泉場の如く閑人優遊の仙窟なりしとか
 劇場の如きも頗る壯大ある者ありて悲哀戲も滑稽戲も共々盛んに行われたり然
 しながら最も當代の時好に適したるは「ソルカス」といふ大競馬場と「アマヒシ
 ヤトル」と稱せし圓形の戰場是之「ソルカス」は競車競馬の戲を演ずるの所なりし
 て「アマヒシヤトル」は細客の擊細場あり當時の擊細といふは體て真細の勝負に
 して誤つて戦むる者あり或は重傷を負ひて倒れ或は即坐命を落したり時
 として野獸と細客とを闘はしめし事もありき「トマス・ヤン」帝の時勅命により
 て一万人の細客を一時に闘はしめて觀る事ありとぞ

中 古 史

緒 論

博覽意味にて概解すれば所謂近世史ハ羅馬帝國の滅亡を以て始まるといふヤ
 當然あるべし何となれば古代史ハ此時を以て終り更に新排優史劇の壇上ニ現出
 して爰ハ新文明の基を開けたり然れども之れを便利上よりいふ時の羅馬帝國
 の破壊以來今日に至るまで一經過せる一千四百年間の之を二期に分ちて論ぜ
 るを宜しとす其第一期ハ通常中代と稱するものにして凡そ一千年間ニ亘り第五世
 紀の末頃より第十五世紀の末に至るものなり而して第十五世紀の末より現時
 に至るまでの概覽を以ていふ近代史ニ屬する者を知るべし

歐羅巴近代の文明ハ成熟せしむる第五世紀より第十五世紀に至る一千年間ニ在り此
 間世運或ハ變境に退歩したるの觀あるを以て第五世紀より第十一世紀に至るま
 だを特ニ「暗黒時代」と名づけたるし史家もあり然れども正當ニ觀察すれば是
 れ「萌芽發生」の時季として近代文明の種子の既に地中ニ播せるもの、駁々とし
 て新制度及び新國民ハ化成しよりし時代を去れば第十五世紀并に第十六世紀

母至り近世社會漸く定形を成し今日まで猶易にらざるは是を實に此一千年間
 お基因せりと云はざるべからず
 故に所謂中世の新人種勃興の時代あり新人種といふ元來歐羅巴史上の
 人種の「アリヤン大族」中の四大部分として「グリース人」并に「ラテン人」「セルツ
 人」「チユートン人」及び「スレーア」一名「スラボニヤン人」の四種に過されど古
 代史に於て既に記する所に専ら此等人種の一即ち「グリース人」并に「ラテン人」
 のみならず「セルツ人」「チユートン人」及び「スラボニヤン人」は三種族の全く近
 代史に屬する者なり是之を新人種といふ
 是等の人種の祖先は己に古代史に於て述べし如く原來亞細亞より來りし者あり
 其亞細亞に在る母當ては「インド人」及び「ベルシヤ人」の先祖と同居し共一族
 を成せり所謂「アリヤン」若くは「インドヨーロッパ族」の稱に即ち此一族の總名
 なり而して是等の人種の歐羅巴に移住せしは歴史以前の事なる由と最初に移住
 の浪に來りて歐羅巴に來りしもの今日所謂「セルツ」種族にして初めに中央
 歐羅巴にト居せしは後ち「チユートン人」の來住をも及んで其迫る所とあり竟

して遂はれて西部歐羅巴に移り而して「チユートン人」自ら中部并に東部歐羅巴を
 占領せし事、己に上古史に於て述べ置たり但し「ヘルラス人」及び「ラテン人」の
 祖先が歐羅巴に來りしは「チユートン人」の前に在るか將た其後にあるか、終に
 臆測を止まり未だ確實をも能わざるなり其後「スラボニヤン人」「歐羅巴」に現出し
 それが爲め「チユートン人」の中部及び北西部歐羅巴に遷り「スラボニヤン人」之
 時代に東部大原の全面に蔓延するに至れり
 古代歐羅巴の文明は地中海の二半島希臘及び伊太利に限りて其境外に出でず蓋
 し此二半島に住せる「アリヤン族」の夙に天澤に浴して社會を組織し且高等の開
 明に達せり然るに其同胞たる「セルツ人」「チユートン人」及び「スラボニヤン人」
 の依然として不文の境遇に在り文字なく文學なく技術なく又文明の諸具あるこ
 となかりき故に希臘及び伊太利を除くの外に歐羅巴全洲猶野蠻の域に在りき
 此蠻民を化して文明の境に入る、に於ては「希臘人」毫も與りて力あるを以て然る
 ども「羅馬人」の則ち然らば此三の蠻民中「セルツ人」先づ「羅馬人」に接近せり蓋
 し「サルピンゴールの住民」「セルツ族」にして羅馬共和政の時「羅馬人」の征服

する所と爲りシーサーの時に至て羅馬都民の特権を受けたり又トランスアルピ
ンゴール(即ち佛蘭西)人も同時ニ羅馬の治下ニ屬し終ニ羅馬都民の特権を以て
其全民も及びせず至れり又西班牙の「セルツアイペリヤン人」も之と同一く特権
を受けアリテシ諸島の「セルツ人」も亦「羅馬人」の眷族ニ容られたる是故を以て
ゴール及び西班牙の「セルツ人」は西帝國の瓦解以前既に全くラテン風ニ變化じ
且基督教徒とあり

「チユートン人」が史壇ニ影響を及ぼせるハ羅馬滅亡の時ニ始まるものにして其
の始めて存立し始めて史劇を演せしハ此時ニ在り蓋し中古史ハ「チユートン人」
即ち日耳曼の蠻族と「ラテン」及び「セルツ族」との兩原素相抱合する其事跡の史
にして近代の社會ハ即ち此兩原素結合の成果ニ過ぎざるなり而して其成分たる
自由を愛重せるの情及び獨立の氣象ハ之を蠻民より取り其文明の定形ハ之を
「羅馬人」より取れりといふべし

概するハ「チユートン」「ゴツス」「セルツ人」といハ三語ハ世人皆之と大同小異ハ
意義ニて使用し之を以て中部歐羅巴の此大族を指すものと爲せり而して此大族

の一体たるとの其言語の相類似せるを以て明かたり抑も言語の異同ハ種族の異
同ニ伴ふものにして今歐羅巴文明の諸原素を解剖するハ「チユートン人」より出
るものと「ゲリース人」「ラテン人」「セルツ人」若くハ「スラヴニヤン人」より來る
ものと其全く相異なるハ一目して知るを得べし

「日耳曼族」中の重要なるものハ「ゴツス人」「フランク人」「ウバングル人」「パー
カンヂヤン人」「ロンバード人」「サクソン人」「アングル人」及び「スカンヂナヴィ
ヤ人」是あり

「ゴツス人」の故郷ハスカンヂナヴィヤ今ノスウェーデン、ノルウェー)として其嘗て
住居せし處ハ今日猶ゴドラント、ゴテスコンジヤ(「ゴツス人」の城)及びゴスラン
ドの如た地名あるを以て之を徴とべし就中ゴスラント(「ゴツス」の地)の名ハ其
明證たり然れども流轉漂泊ハ蠻民の常情あるを以て「ゴツス人」も亦鄰里の叢澤
森林ニ安んぜる能はざりしならん紀元二百年の頃より漸く南方ニ流轉し幾くを
らむして其中部歐羅巴ニ現れる、や分れて「グイシゴツス」(即ち「西ゴツス」)オ
ストロゴツス(即ち「東ゴツス」)及び「ゲビタイ」(即ち「ラツガード」)の三大列

と爲せり而して「チユートン族」中第一に基督教の感化を受けしは已に説きし如く「ゴツス人」にして西帝國滅亡の久しき以前既に多神教を脱して基督教の一派「アリアン」宗を信奉せり

他の「日月曼族」にて西帝國の破裂に伴ひし紛亂混雜の活劇中已に其驕光を放ちし者一二これあり即ち第五世紀の初め「ウバングル」「スエウイ」及び「バヤガンチヤン」の諸族等「ゴツス人」の入寇に迫られ漢マとして「ライン」及び「ダニユーフ」兩河間の高地を去り「バーガングヤン人」の東「ゴール」に居住せり今尚依然たる「バーガンデイ」の地名は實に其記念たり「ウバングル人」及び「スエウイ人」の西班牙まで進み其半島の北西隅に一王國を建てり是れ皆羅馬滅亡の以前あり然れども此王國永く繼續せる能くもして幾くもなく「ウビシゴツス」采りて「スエウイ人」及び「ウバングル人」を敗りウビシゴツス王國を西班牙に建てたり（此事已に上古史中ふもいへり）是れ四百十四年頃の事にして之を近代の歐羅巴王國の濫觴と謂ふべし是れ於て慄悍なる「ウバングル人」の西班牙に「アングルシヤ」一時に「ヴァンダロス」と稱すの名を遺し海を渡りて亞弗利加に到りて

一國を建てカーセイジを首府せし然れども是れまた永續せむ後一百年を経て東帝國の併呑せる所と爲れり
「フランク人」の其初めて史上に現われし時は今日ベルジアムと名くる所の地及び「下ライン河」邊に居住せし羅馬没落れ其以前天下紛亂の際に「ゴール」に侵入し酋長クロウイスの時其根柢を「ゴール」に固め次て「バーガングヤン人」を東南に征し「ウビシゴツス人」を西南に服し遂に恰も羅馬滅亡の頃フランク王國といへるを建てたは是れ後「佛蘭西」と稱せらるる者あり（悉しくは後回み於て語るべし）

直接に羅馬の滅亡に關係せる日月曼諸種族を就ては既に上記せる所あり其中「ウビシゴツス人」の第一に伊太利に南下しヘルリの「ガイシゴツス」の酋長オドバーサー四百七十六年伊太利の國司となれり其後「オストロゴツス」及び「ロムバード」の兩族相續して采住せり蓋し「ロムバード人」の故郷ハ原シヤトランドをりしが後ち「エルプ」河畔に移住し次て又東南の方「ダニユーフ河」を渡り其處より進んで伊太利に侵入し遂に第六世紀の末に至りて「オストロゴツス」を逐ふて

之に代り今猶ロムバールヂーの地名を留めたり
 「サクソン人」は初め獨逸のホルステインに住み幾くもなく「ウエーセル河」邊の地を蔓延せり又其同族「アングル人」及び「ジュート人」のデンマークの半島に充満せり斯の如く此等の種族は北海の沿岸ある低地に住せしを以て人之を低地の「日耳曼人」と稱し又其言語を「チュートン語」中の「低地日耳曼語」と稱す此等の種族は此時に至るまでも未だ曾て「羅馬人」と交接せむ羅馬滅亡の時も依然多神教を奉たりしと雖ども其世界の文明に關係せることの跡からむとあす何とあれば第五世紀に當り海を踰えてブリテンに入り英國即ちイングランド（「アングル人」の地といふ義）の基礎を定め遂にサクソン王國を開た且「イギリス語」を創めたる者の實に此種族中の四方に漂泊せる者の力を多しあり
 「スカンデナヴィヤ人」を除くの外「チュートン族」中の重要なる者の既述之を記し盡せり「スカンデナヴィヤ人」は第九世紀及び第十世紀の頃に至り始めて世に顯はれたり「ノース人」即ち北蠻と稱せる者即ちこれあり悉しくは後述に語るべし
 歐羅巴の「アリヤン族」の第四部は東部の大平原に住する「スラブニヤン」即ちス

レニア人」にして其の史上に重要なる動作を試みたるは中代の中頃より始まれり「イギリス」語の「スレーブ」即ち奴隸といふ語は此「スレーブ」人より出たる者なり亦以て中古時代禍亂結んで久しく釋けざりし際此人種の慘状と不幸の甚だしかりしを想見すべきなり「ポーランド人」も此種族に屬すれども其最も著大なる者は今の「魯西亞人」の祖先とも但し魯西亞の開明國と爲りしは遙に近世の事蹟ありと思ふべし
 歐羅巴の主として「アリヤン族」の所有する所を悉く然るにわらむ蓋し數百年間騷亂は際亞細亞の蠻民等屢々「ウラル山」を越來りて「ダニユーフ河」上を掃蕩せり上に記したる「韃靼」^{タタール}「匈奴」の如きもアツチラを將として歐羅巴を蹂躪し終に敗績せしと雖ども其餘族尚歐羅巴中に留まり皆一處に集合して今のハンガリーに據り其沃地及び礦山を占有せり又最後は米りしは「マグヤール」にして是れ亦「蒙古韃靼種」なり「ダニユーフ河」邊の地に下りて竟てここを駐まり紀元一千年頃に至りて基督教を信奉し文明開化の民と爲りて是より次第に進んで高尚なるハンガリー國民の形体を成せり又「土耳古人」も「蒙古韃靼種」に

してコンスタンチノールを掠奪しバイザンチウム帝國を覆滅し遂に脚を歐羅巴に立て以て今日に至り

今や羅馬帝國の墟址に起りし諸新國民の言語を觀察すべし初め「チユートン族」の伊太利及び羅馬帝國の西部諸州に侵入せし時より獨り伊太利のみならず「セルツ古語」及び西班牙に於ても「ラテン語」既に普通の用語と爲り昔日「羅馬人」に征服以前に用ひたる「セルツ古語」并に西班牙の「セルツアイペリヤシ語」の如きは僅に偏隅の地に於て其命脈を繋ぐのみなりた勿論此時行はれし「ラテン語」は純粹なる者非ざりしかど流石に「ラテン語」たるの實を失はざりき「チユートン族」の移住民の土人に比ぶれば其數遙かに寡かりしを以て勢ひ自ら「ラテン語」を學んで諸州民との交通便よせざるを得ざりしと雖ども其之を學ぶに際ふは又幾分か轉訛を充能せざりしか故に伊太利「ゴール」西班牙の普通語は漸く轉訛して一種の「ラテン語」と爲り之を稱して「ローマ語」と云へり然れども「ラテン古語」は尚學者の間に行はれたり既にして此三國に於て又漸く方言の差異起り普通の「ローマ語」漸く進化して「伊太利語」「佛蘭西語」及び「西班牙語」

となれり此等の言語は今尚「ローマ種の言語」と稱す以て其の「羅馬人」の言語に由来せるを見るべきあり

ブリテン島に於ては將に後段に記せんとするが如く日月曼の侵入者の「セルツ語」の「ブリトン土人」と交通せざりし故に「アングロサクソン」時代の「英吉利語」は純然たる「チユートン語」にして未だ「羅馬種語」の感化を被らざり第十世紀に其の「ノルマン人」に征服せらるゝに至りて始めて「佛蘭西語」の影響を受けしとす

日月曼及びスカンジナヴィヤに起れる純粹「チユートン族」の新植民は毫も「ラテン語」の感化を被らざりて當時純粹の「チユートン語」を用ひたり「日月曼語」「荷蘭語」「瑞典語」「諾威語」「連馬語」等即ち是なり

「スラブニヤン族」の人民が用ふる言語は自己の言語にして「アリヤン大族」の語に屬せり然れども全く「羅馬種語」とも異なり又全く「日月曼語」とも異なれり

伊太利語
佛蘭西語
羅馬種語
西班牙語

日耳曼語及
羅馬種語 英吉利語

高地日耳曼語又ハ南日耳曼語即ち現今の
日耳曼語

日耳曼語

低地日耳曼語即ち北日耳曼又ハ海岸日耳
曼住民の言語として現今の荷蘭語

スカンデナヴィヤ語即ち瑞典、健馬、諾威
及びアイスランドの諸語

セルツ語

ゲーリツク語スコツトランド語
アイルランド語ウエース語

スラボニヤン語

魯西亞語
ポーランド語

新人種并ニ新國語の事ハ已ニ既ニ説盡したり之よりハ愈々中古史の本文に移る
ベシ中古史中の重なる事跡と稱すべきものハ

第一「亞刺伯人」の勃興

第二「佛朗克人」の勃興

第三近代國民の勃興

第四十字征伐

第五一百年戰

第六蕃徽戰爭

是をり而して中古史全体ニ貫通したる性質は文學技術の類廢、封建制度の流行
及び法王權の隆盛也

然れども中古史の本文ニ移りて新人種勃興の事は詳説をるニ先立ち一言せざる
可らざるものあり何ぞヤ羅馬東帝國の史是あり請ふ是より之ヲ述べん

バイザンチアム帝國

既ニ上ニ記せし如く西羅馬帝國ハ全く頽敗して竟ニ蠻夷の手裡ニ落ちたれども
東帝國は此大厄を免れ後ち一千年間東帝國、希臘帝國若くハバイザンチアム帝
國の名を以て纒々其命脈を繋ぎ而して此間歐羅巴の新國漸く起り新文明漸く
芽を放つニ從ひ其(東帝國)運命日ニ月ニ敗頽せり

バイザンチアム帝國ハ五百二十七年より五百六十五年ニ至るジヤスチニヤン帝
の永き治世の間其隆盛ハ極めたりジヤスチニヤン帝ハ土木建築を以て著名にし

て殊にコンスタンチノープルのソヒヤの大會堂を築造したるを以て其名最も高し然れども帝は名の尚更に尊むべきは夫の羅馬律を編纂して整然たる成典と爲したるの大功に在り蓋し是より以前の政府の布告と法衙の判決と往々相矛盾し且其數夥多なるを以て何人も法律を了解すると能はざりしニヤン帝之を慨きトリポニヤンと稱する法律大家及び其他學士の補助を以て「シヴィル・ロー」を稱する完備の羅馬法典を編成せり「コード」「インスチ、ユーツ」及び「パンテック」を稱するものは是なり歐羅巴諸國の（英吉利を除く）多く之を以て國法の大本と爲せり

東帝國既に其進歩を止め國事の記すべき事なきを以て以下に於ては専ら西部歐羅巴諸國の事を述べし蓋し東帝國の文明は其外面に就て之を視れば文物燦然たりと雖ども其精神已に敗朽し恰も死体と同じく而して將來に獨り望みある者は夫の當時所謂西歐歐羅巴の蠻族なり然れども東帝國の尚存する事と又其諸帝がコンスタンチノープルに居て其祖先の全地を管令するの權あるを往々主張し機會の來るべきある毎に之を實行せんと勉めし事の常に之と心に記

して忘れざらんことを要す

既の上記せし如く西帝國の「ウビシゴツス」の酋長オドーサーが伊太利の王と爲りし時を以て終り試告げありオドーサーの其國を管治するや陽に東帝より附與せられし權力を以てすといへども其實に敢てバイザンチヤム朝廷を尊敬せし是時母當り「オストロゴツス」即ち「東ゴツス人」已に一王國を「黒海」を「アドリヤチツク海」の間にて建て勇武の少王シフドリツク又の名チートリツク之を管治を此種族時ふ東帝の命を奉ぜず往々抗敵せしこともありしが大方の陽面の屬隸たる事を甘んじたり故にゼノ帝の東帝をなす時帝はシオドリツクに命するに伊太利に進軍して之を恢復せんことを以てせりシオドリツク乃ち全族を擧げて進發し各人をしゝ其妻子老父母を携へしめ且無數の車輛を以て百級の貨物を運送せしむ其實進軍に非ずして全族の移住なりき相戦ふと三年にしてオドーサー終に戦ひ負けて歸降せし（四百九十三年）復幾くもなく宴會に於てシオドリツクの刺殺する所とあり

シオドリツクは伊太利全地を三分し其一を兵士に分與して他田法を設け以て自

家の權力を保護せんと計れり其分地法宜を得て敢て旧来の地主を損害するに至らむ且「ゴツス人」の皆善く其君長の訓諭を体し人民を憐み律令と重んじ舊民と虐することおかりしかば伊太利全國其善政に浴し圖らば蘇息の思ありたされば美鬚の「ゴツス人」の皮衣を着け粗鞋を穿ち長劍を帯んで羅馬に往來し「羅馬人」の寛濶の「トーガ」を着し典籍を懐しして首都に道遠を然きども絶えて相害をるおとよく能く親和して相益せり此の如きと三十三年にして五百二十六年レオドリツクの死するに及びたゞち怖るべし戦争起り伊太利また亂れたり

此戦争の起るやバイザンチアムの政府に此機に乗じて更ふ伊太利に干渉せんとせり此時に當り東帝のジヤスチニアニムして西帝國滅亡以來東帝中の最初の明主たり是に於て其良將ベリセリアス帝軍を率ひて伊太利に進入し羅馬府を掠取せり次でナーセス、ベリセリアスの後任と爲り五百五十三年全く伊太利のオストロゴツス國を覆滅せり是を以て伊太利の役び東帝國の一州と爲り首府コンスタンチノープルより任命せる州令の管轄する所とある此州令を「エキザークス、オブラウエンナ」と稱す蓋し伊太利のラウベンナに在りて其國政と執りたるゆ

蓋し此名稱を得たるあり「エキザークス」とい州令の義あり

伊太利に爾後東帝國の附庸として在ラウエンナの州令の管治を受けしが五百六十五年ジラスチニヤン帝の崩御後三年にして「ロムバード人」が侵入し會ひ其壓服する所と爲れり此侵入を以て「チュートン族」の三大侵入の最後の者と爲す當時「ロムバード人」(長鎗の義)中部歐羅巴より南進し「アルプス山」を越え「ポー河」の邊に下り今のロムバード人の曠原に居り遂に此地を占領し「パピヤ」を以て首府とせり時五五十八年あり「ロムバード人」を虐殺し劫掠至らざる所なし此抑壓に堪へむして土人中家眷を携へて「アドリヤチツク海」頭の濱澤島嶼に遁る、者少うらざるに至れり蓋し此地は是より先き數年前ペニス國の創建ありし處なり

「ロムバード人」已に伊太利の大半を征服すと雖どもラウエンナ羅馬ネーブルス海濱の一部及び南部の大半に東帝國依然之を管領せり故に東帝國の稱號未だ此半島を去らば爾後二百年間ロムバード國王と在ラウエンナの州令と伊太利を分領せしが紀元第八世紀の頃にはラメンナの總督政府を顛へし次第に東羅馬の

所領を蚕食し羅馬府の如きも殆んど危急なるに至りしかば羅馬の法主人民の爲めみ救ひをフランク王ヘピンに請へりヘピン乃ち大軍を率ひて伊太利に入り「ロムバード人」と戦ふて之を破り遂にラベントの州を取り之を羅馬の法主と與へたり然れども伊太利の南部は幾分の東羅馬の管轄に屬せしといふ

叙して此に至れば勢ひ羅馬法王の歴史を略述せざる可らむ夫れ羅馬法王が歐洲中古の歴史上大なる關係を有したるの極めて著名なる事實なり今其由來を探索せんに先づ基督教の尚ほ幼稚なりし時を遡り教會の基礎の鞏固をなす所を以て語らざるを得ず基督教會は西帝國の管下に在りて多神教の皇帝の支配を受けたりし時だに既に著大なる財産を有したり勿論當時に在りては教徒にして田地を所有するをば許されざりしかど密に其信徒を勧誘して以て不動産を得たりしと少からむ其後コンスタンチン大帝が基督教の信徒となり之を國教となすに及びては公然教徒の田地を所有すると許し次いで有志の者の教會に向つて其所領地を奉納することを許し是より後の基督教會の財力大に加はり隨つて僧侶の徳義漸く腐敗し日夜汲々として唯財是求め奉納喜捨を促すを以て其目的

の如く思ふに至り

西羅馬帝國既に倒きて蠻族此國を領するに及びても基督教會の毫も損害を被らざりしのみならず却つて其勢力の増えしを得たり蓋し「キエーソン人種」の不文の野蠻たりしは相違をけれど其信神の念の篤きと幾彼の心の深きとの違ひは他の野蠻に異なる所有り是故に基督教の如たは夙に彼族の敬信と博し且彼族の手より夥多の領地を得たり但し此時代は公然政府より教徒に向つて封土を與へたる事なけれど君主皇族又は權家等が私の好意により教會へ喜捨せしもの頗る多し其他新らしく僧となる者の其財産を擧げて教會に奉納し或は初えて兵役に就くは臨み冥加の爲め其財産を喜捨するもあり實に教會の收入の一として足らざりしなり且又基督教徒の罪業消滅を得んとするは天帝の代理たる基督教會の僧侶に向つて財産を喜捨するの外他は方便なしと論じて其教を説きたりしかば衆皆之を真とし若し其死するに先だち財産を喜捨するを怠る者あれば甚し犯罪人の如く思ひたりといふ其後又「タイヌ」といふ制度起れり「タイヌ」といふ直譯れば十分一の謂にして純粹の利潤中より其十分一を教會へ奉納するの

制度をり以上列擧したる様々の収入よりて教會の財力の愈々増加し其人民
對するの勢力亦日一月に加われり是れ蓋し僧侶たるの神聖なる資格を具へたる
が上より濟度賑恤をも務められたるあり

之と同時に教會の大なる政治上の權力をも有したり是れ蓋し帝國瓦解後の伊太
利の國勢が自から然らしめしものあり既に前にも述べし如くシヤステニヤン帝
の時「オストロゴツス族」の權力遂に推け伊太利全國の再び東帝の管下となれり
然るに東帝の目代たる人のラベンナといふ處に在りて羅馬に在らざりしが故に
政治上の權力の姑らく措き社會上、徳義上の事關しては其頃羅馬府の名望あ
りし大僧正の勢力極めて強大なりき大僧正の或は稱して「ベータータル」又は「ババ」
といへり「ババ」は師父の義なり後より轉訛して「ポープ」と稱せり第八世紀に至り
「ロムバード人」伊太利の北方に王國を創立し次第に南方を蠶食して其國境を擴
張せんとせりラベンナの政府之と戦ふて克つ能はざらラベンナの首府といふふ及
むを羅馬其他の都會も盡く被滅せられたる然ども「羅馬人」は此革新を喜ばむ
して救ひをフランク王ベドンに請へりベドン乃ち采りて「ロムバード人」を破り

先づラベンナの領地を復したり是より教會の權力に一大變動を生むるとなれ
り何と云ふも此時より以後法王のラベンナの君主と爲り宗教上の權力の外に政
治上の權力をも得たれば其後ベドンの子シヤレマンがロムバードの王國を
顛覆して伊太利の王となり次いで西羅馬帝國の帝とあるに及び更らば法王と約
束してラベンナの領地の永く教會の有と爲せり是も羅馬法王が次第に政權を得
ある原因なり但し此時代は法王の權力未だ國王を凌ぐに至らむ其廢立の
如きは往々勢力ある國王の願使ふ出でしが歳を経るに隨ひ法王の威力列國の王
を凌ぎ遂に自ら稱して國王の國王といふに至れり是等の事實は列國勃興の史を
述べ終りたる後更らに折を得て語る所あるべし
中古の歴史は於て最初は勢力を有したる國の夫らフランク人の王國をり今の佛蘭
西獨逸等の如きはフランク王國の分裂の後より起りたるものあり故に先づ「フラ
ンク人」の歴史を叙し次に列國の濫觴に及ぶことと思ふに正當の順序あるべし

フランク王國の勃興

西羅馬帝國漸く瓦解せんとするの時、際しゴール地方に於て「日耳曼種族」の國を建てしもの三あり曰く「ウビシゴツス人」曰く「バルガンチヤン人」曰く「フランク人」是あり此三種族の中「フランク人」獨り強盛にしてクロビスといふ者王位に在りたる時、其領地「ライン河」より「ピレニース山」に至るまでを包有せり紀元五百七年クロビスは都を巴里に定め「メロビンジャン王統」の基を開けり是より先代クロビスの日月曼の「アレマン族」と戦端を開くや基督教徒なる皇后クロチルダ其神に祈りクロビスの軍勝利を得しよりクロビス及び其勇敢なる戰士三千人悉く基督教に歸依するの心を生じ紀元四百九十六年レームの地に於て洗禮を受けたり是より宗教の勢力大にクロビスの成功と助けフランクの國境を廣めたるといふ

クロビスは初めて基督教を採用して民心の一致を固ふしたるのみならず若干の法令を設けて政府の権力を鞏固せり夫の有名なる「サリツク法」の如きは全くクロビスの創意に出でたりといふ所謂「サリツク法」は其後封建の時代は於て大なる勢力を有し近世に至るまでも尚ほ其中の一ヶ條を存せり他は女子

王を立てざるの制是あり

フランク國の恒例に據れば國王は男子數人あれば其數に應じて國土を分封するの定めあり故にクロビスの崩するや其國土を四分して其四子に與へたり是も此國の亂れ始めたる根本にして是より内亂殘殺等の弊害相繼ぎ六百三十八年ダグベルト王崩御の時に至り王家の権力次第に衰へメロビンジャン朝官宰と稱する大臣獨り政權を擅するに猶ほ藤原氏の我皇室に於たるが如くなりき所謂官宰の其始也於ては單に官中の事務を司るに過ぎざりしが此時に至りては全く專權の大臣とをれり故に國王の虚位を占めて空しく深宮に宴樂を事とし遂に無為王の綽號を得るに至れり六百八十八年ヘビンアリスタルといふ者官宰の職に上るに及び國王を幽閉して自ら政治の全權を掌握せり然も尚ほ王と稱せむ此頃既に國會と稱する人民の公會ありしが王は唯だ毎年一回此公會に臨御するのみもて其他の秋毫も政事に關係するよしあるべき此公會の原野に於て集會したるものにて會員は貴族及び平民より成立せり國家の大政を議定するの會あり

ヘビン逝き其子チヤールス繼ぐに及び「サラセン」の強族歐洲の地を侵し西班牙

を取り伊太利を略し更にフランク國を併吞せんとせり。キヤールス之をツールの地へ遣へ撃つて大に勝ち武名を一世上輝かし「マルテル」即ち鐵槌の綽號を得たり。是よりキヤールスの名望日月高し然れども尚ほ王と稱するを憚かりフランク國侯と自稱せり。其子ヘピン宮宰の職を繼ぐ。及び書を羅馬法王に送り問ふて曰く苟も身は王權の實を有する者。亦王に名を受くるも不可あるなきや否やと法王ヘピンの威權に仰れ且將來其幫助を得んと欲するは意ありしを以て之を答へて不可なるべしといへり。ヘピン乃ち時の王を廢し自ら國王の名を取。り時中紀元七百五十二年より夫の「ロムバート族」の伊太利を凌辱せし時ヘピンの法王の請ひを容れてラベント州を回復し且之を法王に贈與せし。其妻は法王の許可によりてフランクの主位を占領せし報酬の外あらざるなり。

クローピスは系統の諸王に其鼻祖メロピヤスの名に因み「メロピンジャン系統」と稱したりしが是母至りて其系統全く斷絶しキヤールス、マルテルの子孫即ち「カロピンジャン系統」の朝となれり。ヘピン王の身体矮小時の人之を嘲けりて倭人と綽號せり。至務は臣民の已れを輕侮せんとと恐れ野牛や獅子を聞かしの其

闘争の耐あるに際し一刀の下に兩敵を殺し以て其驍力の大なるを示し一世を威服したる物語は廣く世の人の知る所なり。

ヘピン崩じて其子シヤールマン位に繼げり。シヤールマン夙に大志を懷た再び舊羅馬の如き大帝國を組織せんと欲し此目的を達せんが爲を母「チユートン人種」の固有の性癖と基督教の勢力を併用せり。「チユートン人種」は元來愛國の氣質に富み且政治上の事熱心なるの癖ありシヤールマンの慧眼能く之を洞察し苟も其臣民の愛重する所は制度と文物とを問ひを務めて之を涵養し以て民心を繋ぐとを力めたり。然り而して一方に於ては夫の基督教の信仰心を利用して以て人民の一致と團結とを鞏固せんとは務めたり。其証據は王が熱心に基督教を保護し法王を補翼したるを見て知るべきありシヤールマンの攻伐の歴史を詳らうと語らんとすれば能く數葉の紙の盡くも所あらざる故に唯だ其大要を擧ぐればシヤールマン兵を出しよる事大小五十三回征服したる國民の數十有二の多き。及び「ゴール人」「サクソン人」「アングス人」の如きいふ及ばざらば「アラビヤ人」の如きだ。遙か其威風凛々して靡き服したりといふ就中伊太利のロムバート王

國の如たに盡くシヤールマンの征服する所となり其王アシアリヤスに擒となり其有名なる鐵冠ハシヤールマンの頭上ニ戴くる、に至れり年を開すると三十三年にして干戈の聲漸く止みフランクの王國に驚くべた大國となり北に「日耳曼海」より南に「アドリヤチツク海」に至り又「英吉利海峡」より「ダニエーブ」の下流ニ達せり是に於てシヤールマンは英名を赫々として世界ニ冠かけり蓋しシヤールマンとの尊稱にしてチヤールス大帝の義なり其實名のチヤールス即ちカルハスあり

シヤールマンに既に劍戟に依りて至大なる帝國を征服せしが今の法律を以て其人民を整頓せんと計り先づ其版圖を縣に分ち每縣知事を置いて之を統治せり又一年四次王より委員を各縣ニ派遣して政治の良否を察し民情の安否を問ひ宛を伸べ枉を矯めしめたり又各地に整然たる議會の制度を創設し以て日耳曼の亂雜無法なる舊集會を代へ或は時々法例彙纂の如きものを發布して帝は訓令規則等を世に公せりシヤールマンは性米學を好み諸國より學士を招聘して大に教育の道を開き國中に子弟を獎勵せり就中英國の高僧アルキエインの如きは最も王

の信任を得て常に宮中ニ出入し學問の事を談したりといふ蓋し當時の僧徒の學問を專にせり然るもシヤールマン大に文藝を獎勵せしが故に平民も亦其知識を進めたり王は學校を宮中に設けて自ら其校ニ入學し王子皇后を集めて學問を講究し又諸國に學校を開けて文法、算術、唱歌を教授せり王は此の如く學問を獎勵するを勉めたりと雖ども己れの書簡だも認め得ざりしといふ蓋し當時に在りての筆記の術は獨り僧侶の専らにする所にして平民は決して學ぶを得ざりしものなれりあり思ふに王の朝に近代と古代との關鎖にして佛國の文學技藝初めて其萌芽を發したるの時あり實に佛蘭西の文明の重し此期に始まると云ふも敢て誣言にあらざるあり

紀元後八百年王伊太利の羅馬に往けり此時に方りて王の名四方に過ねく其威勢國に震へて羅馬法王、王の世界に利益を與へたるを嘉とし王は贈るに西羅馬帝國の帝號を以てせんと欲し王が羅馬の天主堂に於て神前の机の前ニ踞踏したる時且際し突然西羅馬帝の金冠を王の頭上ニ加へたり王、事の不意に出来たるを以て陽に驚たたる色をなせしか亦敢て之を辭せざりき是に於て西羅馬帝國後

と東西の二帝を見るに至れり然れども西帝即ちシヤールレマンの其都を羅馬に定
 るを又宗教上若くは政治上の公文の外に総て日耳曼語を用ひたり（當時西羅
 馬帝國一旦廢滅し羅馬法王の威權も大に減却したりしかば法王、一大國王の
 威力を假りて以て其威權を維持せんと欲し斯くのシヤールレマンは媚びあるなる
 べし）

シヤールレマン帝崩じて其子ルイ一世嗣げりルイの其性極えて温厚篤實なりしか
 ば人呼んで善良質といへり然れどもフランク王國の如く亂れたる大國を統御
 するは技術多ししかば故に竟に國中の擾亂を醸したり今其原因を釋ぬるに
 帝の在世中フランク王國を三分しくロテイヤ、ベピン及びルイの三子に與へた
 り然るに其後ち末子チヤールスの生れたるを以て更らば三子の所領を割いて之
 をチヤールスと與へんとせり是に於てか三子不平を懷き遂に兵を擧げて其父に
 叛けり此時羅馬法王グレゴリーのロテイヤ等の三子を助けてルイを攻めルイ敗
 績して幽閉せられたり然れども三子領地の事關して相聞ぞ殆んど底止る所
 をなきを以て竟に其父ルイの幽閉を解きて位に復せしめたりルイ復位の後幾もな

くして崩ぜり時八百四十年なり

是より先きベピン死しロテイヤルイチヤールスの三人互に其國を争へりチヤ
 ールスの人呼んで禿頭と稱せしルイと好し相結んでロテイヤを攻め遂に之に
 勝てり是に於て更らばフランク王國を三分し各々其一分を領せり即ちロテイヤの
 伊太利を領して西羅馬皇帝の稱号を有し又東西フランク國の中間「ライン河」と
 「ローン河」「セイヌ河」とを以て境しある土地をも領したり然れども此地の邊に
 一、東西フランクの爲めに分領せられ伊太利の國も亦久しからむしてロテイヤの
 系統絶えしより全土割據紛擾の狀を呈したり次に東フランク國ハルイ之を支配
 せり東フランク國ハ即ち日耳曼として分裂後速るにその名稱を得たりアアゲン
 條約の年の正に其建國の初年として一千八百四十三年の恰も其一千年期の祝節
 に當れり又西フランク國ハ即ち佛蘭西の名を得たるものにしてチヤールス之を
 管轄せり分裂以來佛蘭西及び日耳曼の次第其言語風俗を異にして終に劃然た
 る區別を見るに至れり

英 蘭 國 の 濫 觴

英國の歴史の文明の關係したる点よりいふも皇國の關係したる点よりいふも極めて緊要なる事の論を俟たず故に他の國史の例にならざるを特別に詳述せる所あらんとす諸子其精粗の差の甚したと怪む勿き

英島の原人を「ブリトン人」といふ「セルト人種」の一部屬あり「セルト」の已に前にもいひし如く二大派に分きたり一を「ゲール」といひ一を「キムリー」といふ而して「ブリトン人」の「ゲール」の分れたるも亦あり其始めて開明世界に知られしはジュリヤスシーザーの時なり此「ブリトン人」の極めく蒙昧蠻野の人民にして處々部落をなし首長ありて之を願使せり然れども一統の君主のあかりき上古の史の固より知り難し其中唯宗教の事の傳はれり「ドルイド」といふ僧侶の事はなり「ドルイド」の「ブリトン人種」にあつて非常の權力を有し宗教、教育、并に裁判の事をさへつかさどれり而して其門にあるもの總て租税を免せられ又兵役を免られたり又其命は背く者の破門せるを例とし而して其罰を蒙る者の祭事は與るを得ざり死して葬るを得ざり是を以て人民唯其命を違はんとを恐れたり

而して其威愈重く其勢轉盛なり抑此宗教の他教に異なる者の祭祀を林間に行ふと是なり又柏の木を敬し其寄生木ミズシロを尊ぶと甚だし常に深林を遊遊するの際寄生木を見るや且牛は割て神は祭り祝意を表せり尚ほ其他宗に異なる所の人々犠牲とするの風あり

シーザーの此地に渡航せしに實に紀元前五十五年あり其後ちシーザーのポンペイと討んと欲して兵を伊太利に退けしかば「ブリトン人」の再び羅馬に背き獨立せり降て羅馬帝クローテヤスの時、當り再び英島を征し四十年の後ドミシヤン帝の世に至りジュリヤスアグリコラ終に英島を略し全く羅馬の版圖とせり爾來羅馬の常駐鎮堂と此を置いて其土を守り太守と派遣して之を治むるを例とせり兎角もる中ふ「ブリトン人」の次第に其陋習を蟬脱し遂に基督教を奉る者あるに至れり然れども羅馬の日は月を養雄振らす遂に自ら守る能はざるに至り紀元後四百十八年に及んで羅馬の鎮堂の悉く英島は引去たり是に於て「ブリトン人」の再び獨立の姿となりしが數十年間羈絆を甘んぜし風の習に自治の精神を失はしむるの基となり殆ど獨立を保つ能はざるの有様あり時は英島は北部

母當て「ピクト」及び「スコット」ある二種の蠻族あり常母采て「アリトン人」を虐
 せ「アリトン人」之に抗する能はむ故を歐州の西北隅に住せる「サクソン人」に求
 めたり「サクソン人」の「チユートン人種」にして總稱を「サクソン人」といふ者之
 之を大別して三種とすべし即ち「サクソン」「アングロ」及び「ジユート」是より「ア
 ングロランド」より英嶋を「イングランド」と稱するに至れり是より於て「サク
 ソン」人の其求めに應じホーサ及びヘンヂストの二人首將とあり大舉して英嶋
 に入り「アリトン人」を力を合して「ピクト」及び「スコット」の二人種を本國に放逐せ
 り然るに「サクソン人」は「アリトン人」の懦弱與し易きを知り其土を奪ふく自ら
 之に居らんと欲し人を本國に遣して勇悍を募り遂に「アリトン人」をウエールス
 地方に放逐せり而して自ら代て英嶋を領せり是れ今日の英人は祖先なり此の後
 「アリトン」は七王國起りて互に虎視其長を争ひ所謂戰國の七雄を現たり其第
 一のケント國第二のサスセツクス國第三のウエツセツクス國第四のウエツセツク
 ス國第五のワイーストアングリヤ國第六のマルシヤ國第七のノーザンバランド國
 是より相闘ぐと多年ウエツセツクス王エグバート遂に全國を統一し「サクソン

王統」の基を開けり實に紀元八百二十七年にして「サクソン人」の英嶋に入りて
 より四百年なり

エグバート既して王位に上り更らむウエールスを克服して暫時平和をなせり時
 歐州の北部瑞典、諾威及び捷馬に三の強蠻あり此人種常に船に乗じて本國に出
 で歐州の各部を抄掠せり之を北敵と稱を慄悍にして向ふに前を其一部分に
 「デーンズ人」あり鋒を轉じて英國を窺ひ海濱の地方を蹂躪せり然れどもエグバ
 ートの生時其志を遂ぐる能はざりき其後エセルボルトの世に至り「デーンズ
 人」益々猖獗してワイーストアングリヤの侯エドマンドを生擒し其土を奪へり
 其後アルフレツド王位に即く及び「デーンズ人」を破りて「サクソン」の王統を
 復し英國を一統せり

アルフレツドの實に中古史の英雄なり其位に即くや「デーンズ人」日
 其銳を磨て復た抗すべからむ遂に王宮を脱して各地に流浪を然るども寝食國
 を忘れず嘗て身を獵夫に寄す老嫗を煮くアルフレツドに命じて自ら使をア
 ルフレツド弓を弄して箭の燃るを知らず嫗歸て怒る甚し云々其後また瑟を操

り「デーンズ」の陣中に入るアルフレツドの其技母巧なるを以て「デーンズ人」深く之を愛し會長ガスラムに謁せしむガスラム之を賞して軍中留む王、敵の動靜を探り了り急よ驍勇を募てガスラムを襲撃しがスラム及び其部下を生擒せり云々

アルフレツド既よ全國を清の大い海軍を設けて變を警しむ是れ後世英函ヶ海王とありし根本あり又教育を盛んよせんと欲し歐州大陸より學士を聘しオツクスホードの大學校を敎建せりアルフレツドの政治に長ぜしのみならず又其身を教育せり一日を三分して其一を政治に費し一を學事ふ費し一を休憩に用ひたり而して生時著書所甚だ多し加之商工業を奨励し其歲入七分の一を以て之に充てたり後世の史家之を評して中古シヤールマンを除てアルフレツドありといへり其他陪審裁判の制の如きも王の朝よりして實際の効用を見るに至れり王の尋常の歴史家の稱するが如き良立法家ありあらざりしかども舊來の法律制度を整理して弊を除き利を採り以て國家の基礎を堅ふしたる良行政家と稱すべし
其後一代を経て王の孫アセルスタフィンまた明君として「デーンズ人」屢々襲ひ米

れども志を得ず此時ふ當り種々の法律を布けり其中に於て記をべたもの國人たるもの其貴賤を論ぜざ商業の目的にて渡航をもるときの貴人の位母列をべしといふ事なり此一率以て其貿易に奨励せしことを知るに足るべし

エドレツドの代に至りても「デーンズ人」の未髮止む時なし然れども當時の最も著しきものはダニスタンの僧の威福を弄せしとなりダニスタンの前代エドマン王の時より用ひらる然るにダニスタンの其行為の不正なるが爲め一朝王廷を逐られたりダニスタンの大い懲り數年の間俗を避けて山林に入りしがエドレツド位に即くに及んで再び朝廷に召され遂に寵榮を專し其宗敎を擴るを得たるのみならず大小の政治悉く其願指し出づるに至り偶歐州の伊太利一の宗敎起れり「ベ子ゲクチン」派と稱せり此派の僧侶の不犯を以て主旨とせり當時ふての各地の僧侶皆妻を有せしが此宗敎起りてより羅馬敎の僧徒は總て不犯誠を守るとせ成れりといふ英國にありてのダニスタンの「ベ子ゲクチン」を賛成して其派の巨魁となれりエドレツドのダニスタンの勢を假して宗敎上の惡弊を矯めんと欲せしが紀元後九百五十五年果さむして崩せり是ふ於て其甥エドワ

イ位を踐めり

エドワイ位に即くの年甫て十七然れども其性賢明なりし然るにエドワイのアン
 スタン派の宗徒と争を生じ相容れず遂に之が爲に横死したり今其由來と探るに
 エドワイエドワイ其親戚エルジバを娶らんと欲を然るに基督教の寺法に親戚の相
 婚嫁するを禁するを以てアンスタンの之を妨げんとせり王聽かず遂にエルジバ
 を后とせり後ち即位の式を行ふに當り王の式の中半にして後宮に入りてアンスタ
 ン乃ち捷を排して入り強て王を伴ひ出し貴族皇族の會せる所にして於て王を辱しめ
 たり王之をふくみ後アンスタンの管せる大藏の會計を檢せんとせりアンスタン
 其私曲の顯われんとを恐れ遂に歐洲に奔りしが其身を開地を置く能く能く再び歸
 て「デーンズ人」を誘入し且王の弟エドガーと奉じて兵を擧おたりエドワイ
 禦能く能く后を離別して謝罪を是に於てアンスタン エルジバを捕へて之を愛
 耳蘭に幽せしがエルジバは遁れて王の許とて寄らんとせり然れども遂にしてダ
 ンスタン黨の虐殺する所とせり時九百五十八年あり是に於て其弟エドガー位に即て直
 ちアンスタンを以てカンタプリーの大教正と爲せりエドガーの世に別り變遷

なし僧侶の專横せしのみ當時の史家の盛んエドガーの徳を頌を然れども其載
 籍盡く宗徒の手に成る故に信すべからざるあり王二子あり兄をエドワルドとい
 ひ弟をエセルレツドといふ二子異母兄弟ありエセルレツドの生母エルフレダ其
 生子を立てんと欲せれどもアンスタン黨之を聽くをエドワルドは奉じて王とす
 エルフレダ快々として樂まを然るに或る時王遊獵の途次コーヒーカツスルに母
 の起居を問ふエルフレダの從者王を弑す故に其弟エセルレツド王位に上る時
 九百七十九年あり又アンスタンの之を聞て憤る甚じ然れども當時既に老耄後た
 如何ともするなし後ち十年にして死せり當時又「デーンズ人」の侵入を受け國歩
 大に難し金帛を贈りて一時「デーンズ人」の侵入を防ぐが如き姑息の手段を用ひ
 しが故に竟に「デーンズ人」をして益々其欲を逞くするに至らしめたり其後ち
 連馬王スエイン諾威王フレア大軍將として英國に闖入せり
 於是英國の辭を卑し二万四千磅を輸して和を講せり然るに明年復た來る乃ち復
 た金を納きて和す如此にして國帑空竭遂に「デインゲルト」と名くる一種の新稅

を課す敵兵再び承らざるに至て尚此税を置くに至れり「デインゲルト」或ハ「デインモネイ」と稱す「デイン」ハ「デイン人」の義にして「ゲルト」并「モネイ」の金の義あり蓋し「デインス人」の強請に應ずる爲の徴募する税金あり是後世鐵院の手を假らば虐政を行ふの一手段となれり其後エセルレツドハノルマンディー侯の妹を娶て后となし以て我ノ聲援を爲さしめ遂に國內に住まらば「デイン人」を虐殺し前代の讐を復ひたるがこれが爲ハ「デイン人」また怒り戦争止む時あし其子エドマンド王位につく及びスエインの子カニウト大舉して英國を侵せしに英王之をふせぐ能はざる全土をカニウトに奪はるゝに到れり此に於て乎一時「サクソン王統」ハ絶えて「グニツシユ王統」之に代り實に紀元千十六年あり

エドマンド二弟あり兄をアルフレツドといひ弟をエドワードといふ二人英國を脱してノルマンディーに在り亦子ありエドマンドといふハノルマンディーに在り國王スチイアンの客たりカニウト既ニ英國を得てよりノルマンディー侯の歡心を得んとし勉めたり蓋し先王之二弟外戚にして「サクソン王統」を回復せんとを恐るゝあり乃ち先王エセルレツドの後エニマなる者を娶り后と爲さんとして曰く若し

子を生むあらむ之を以て嗣とせん

と遂に以て后とすカニウト既ニ其患を除し權威漸く盛なりカニウトハ其王中アルフレツドを除てハ最も名君と稱せる紀元千三十年に至て崩す

カニウトの從臣嘗てカニウトに謂て曰く滿天下陛下の命と奉ぜざるをじと一日海濱を跋渉して波浪に向て曰く退くべしと然るに波浪何ぞ知らん王は却て衣を濡せり乃ち其從臣の嘗て阿諛するものを招き謂て曰く天下我命を奉ぜざるもの尚ほ多しと爾來復た諂者なし

カニウト三子あり伯をスエインといひ仲をハロルドといひ叔をハーデカニウトといふハーデカニウトハエニマの生む所なりカニウト死したる時スエインに既ニ鬼籙母入れり而してハーデカニウトハ連馬母在り獨りハロルド英國に在り是に於て位を踐みハロルド第一世と稱す然るにハーデカニウト連馬より歸るに及んで將に兵を弄せんとせしむ貴族の中裁に依り英國を二分して管領することせり此時母常り先のエドマンドの弟アルフレツド及びエドワードの二人「サクソン王統」を挽回せんと欲し兵はノルマンディーに集め英國を襲ひしが英國の

貴族はアールゴドウ井ンなる者あり陽に降を納れ不意に二弟を攻むアルフレツドに捕へらるエドワードに脱れてノルマンチーに歸る然るにハロルド及びハーデカニウト相續で死し「ダニツシユ王統」絶す是に於て「英人」エドワードを迎へ立てり王と爲す之をエドワード、コンフエツソルといふ「サクソン王統」再興をエドワード、コンフエツソル即位をも雖どもアールゴドウ井ンの威名漸く盛んにして王家赫々其光を射し

「アール」の諸侯の一種あり此號の英國に特別なるものにして他國に之あるを見ず英國の諸侯に六種あり左の如し

- 第一「ヂユイク」(公)
- 第二「カウント」(侯)
- 第三「マーク井ス」(伯)
- 第四「アール」
- 第五「バイカウント」(子)
- 第六「パロン」(男)

然るに王はノルマンチーに長じて知交多し是に於て其舊交を招て之をして仕官せしむ英國人民外國人と嫉惡するの念其政治を外人の手に出でしむるを憤り王は遂に人望を失はる甚し時アールゴドウ井ンも亦國家樞要の地位に盡く「ノルマン人」の占むる所となるを見て平ふる能はざる遂に兵威を以て王に迫り「ノル

マン人」を放逐せんとを請ふ時母マルシヤ侯レオフリツクノルサンパランド侯

シワードの二侯アールゴドウ井ンの権力を惡み力を王に致してアールゴドウ井

ンを放逐せんと欲し貴族集會を開たし(貴族集會といふ賢士會のとあり)アール

ゴトウ井ンの黨に敗れて英國より放逐せられ歐洲大陸のフランダギーに至れり

賢士會の「アングロサクソン」の上世より成立せる國人會として其組織分明を

らむと雖ども要するに國家に大法を立條する議會ありしや明かき議員の國中

の僧侶の位高き者并に諸侯の職位尊き者に限りて凡俗の之に與ることを得ざり

し者の如し之を賢士會と稱せしに上等者流を以て賢明なりと爲す上世の常弊

に於たる者なるべし史家或は之を以て現今の「パリーリヤメント」の權輿なりと

爲す者あれども今日の如き撰擧法行はれたりとも思はれねば全く異質のもの

なりしからん

アールゴドウ井ンのフランダギーに奔りてより軍を率ひて再び英國に歸れり國王

エドワード之を拒んと欲せしが貴族の仲裁より會議を開て其歸國を許せり然

るも久しかりしにして死す其子五人あり長をスエインといふ僧とあり次をハ

ロルドといふ恢廓大度あり次をトスチーといふ暴戾悍惡屢々父兄の命を背く次をガースといふ樸直忠實父兄を助けて功あり次をレオピンといふ機敏にして戦略を長む軍功ありハロルド家系を嗣ぎトスチーの北方に在るノーサンバランドの太守とあるガーズレオピンの二人は常にハロルドの幕下にお在りて之を輔弼せりハロルドの素より寛仁の人なり故に四民の望を得ありエドワード國王嗣おし然れども位をハロルドに傳ふるを欲せむ乃ち其甥エドワードをハンガリーに招き王位を譲らんと欲すエドワード命を聞て直に英國に入る然れども不幸にして死し其子アセリング尚ほ幼にして王位に上るを得ず依てエドワード王のノルマンディー侯ウヰリヤムに位を傳へんと欲しハロルドを遣して其命を傳へしむウヰリヤム命を聞て大に喜びしがハロルドの野心あらんことを恐れハロルドをして敢て王位を望まざるべしといふことと盟のしめたり時會々ハロルドの弟トスチーノーサンバランドの人民を壓虐せしかばモーカーエドウヰンの二將其罪を責めてトスチーを放逐せりハロルド之を聞きてノーサンバランドに往き二將を以て其地の太守に封じ寛仁の政を布けりノーサンバランドの人民悦服

して令すむ行われ禁ぜれば止みハロルドの名聲赫々として權威日盛なり故にエドワードコンフエツソル崩ざるに及んでハロルドの容易に金冠をいたくことを得たり

ノルマンディー侯ウヰリヤムのハロルドの前約に背たるを憤り遽に使者を馳て詰て曰く何ぞ前約を履まざる速かに王位を我に歸すべしとハロルド頑然之に應ぜずノルマンディー侯大に憤り兵を召く艦艘千艘勇士六千直ちに英國に侵入す實に一千六十六年十月十四日の朝をり激戦數時英王の軍悉く敗れ王遂に兩弟と共に陣没を之をヘスチングの戦と稱を於是乎ノルマンディー侯代て王となり「サクソン」の王統亡ぶ

始め「サクソン人種」の英國を略するや原人(ブリトン)全く懾服し年を経るに隨つて言語制度悉く「サクソン」に化し去り原人の形跡殆んど地を拂ふに至りハラム氏曰く今日英國に歴遊する人の「サクソン人」渡采前に英國に「ブリトン人」なる者住したりといふ史傳の事實と信せる能はざるべし英國到處「ノルマン」「サクソン」「ロトマン」等の人種の記念となるべきもの存在すと

雖ども「ブリトン人」の紀念となる可きもの殆んど鮮しと定に其言れ如し
 「サクソン」時代は王位繼承の法の如きも他國に異なり蓋し本國獨逸地方の舊
 法に則りて文武並適の君主のみを推撰するを以て例となしたるなり故に七
 國一統の後と雖も王權極めて微弱なり元國王推拱の權始を以て全國民よりありし
 が後より貴族僧侶のみ之を作用せり「サクソン」の王朝は王位の鞏固を以てし
 て屢々繼承の争ありしに偏ふ之の原因するや明かなり

ヘスチングの戦争に於てウヰリヤムの太勝を得て英國を一統を令し「ノルマンチ
 ー王統」を略述するに當り先づ「ノルマンチー人種」に付て少しく述ぶる所ある
 べし

此人種は中古歐洲大陸の海濱を抄掠するを事としたる人種にして所謂北狄是な
 り而して諾威地方に住せり始の諾威侯はロルツなる者あり一隊は兵を帥て併國
 の海岸を掠め遂に其南岸なるノルマンチー地方を奪ふて之に居り自らノルマン
 チー侯と稱せり而してウヰリヤムの第六世の侯ありウヰリヤム己に英國を一統
 し民庶を撫育す而して兵權を「サクソン人」より取めんと欲し各地に城廓を築き

「ノルマンチー人」をして之に居らしむ蓋し「サクソン人」の及に備ふるあり斯の
 如くすると一年、英國靜謐を極め民康成を歌ひしに王は一たび故山に歸らん
 と欲し政を其權臣に委ねてノルマンチーに遊べり「サクソン人種」の其虚を乘じ
 「サクソン」の名を奉じて叛を謀り王之を聞き直ち英國に還り立どころに
 其亂を平けたり是より後王の政略は一變し専ら武力を以て新國民を威服するを
 を力め且叛者を罰するを名として次第に國土を没収し之を功臣に分與して其勲
 勞に報ひ王家の藩屏を鞏固せり

ウヰリヤム王の晩年及び皇太子ロバルト反を謀り兵をノルマンチーに起せ
 り始ぬウヰリヤム三子あり長をロバルトといひ仲をウヰリヤムといひ季をヘ
 ンリーといふウヰリヤム兩弟を偏愛してロバルトを疎んむ是を以てロバルト
 悦ばず時又ウヰリヤムは勲臣ニ三ウヰリヤムの傲慢を憤りてロバルトを咬
 し斯くの叛を謀りしあり王は之と闘て兵を率ひてノルマンチーに赴て戰ふて
 互に勝敗あり嘗てウヰリヤム親ら陣頭を巡視し圍らむロバルトの敵陣は巡視
 するまあり然るども互に兇を被りたれば其面を見る能はざり遂に父子搏闘し

王は遂に馬より落ぬロバルト之を刺さんとて忽ち其父あるを知り驚て扶け起し我馬に跨らせて走らしめしやあれより大に其不孝を悔ゆ王も亦ロバルトの未だ父を忘るざるを悦び遂に戦を止むたり云々

ウヰリヤムの英國を征服したる後ち英國の人民は屢々起つて其羈絆を脱せんと圖りしが随つて戦へば随つて敗れ遂に力盡きて復た爲もと能はざるに至れりウヰリヤムは是等の叛亂を機會として十分其征服の功を全ふし頻々封土を没收して之を其功臣に與へたためて英國に封建制度の基を開けり斯くて幾分を以て政治宗教に諸官大方に「ノルマン貴族」を占領する所となれり加之堅固要害の城堡處々お起りて「ノルマン」の貴族之に住居し「サクソン人」の野心は備へたり此時又「ノルマン」の工商等の「英吉利海峡」を渡りて此國に移住する者頗る多かりしかむ英國の工業大に振ひ興る事とあり

これより英國の二種の人民を包含せり「サクソン人」并「ノルマン人」是れを随つて國語の如きも「ノルマン」并「サクソン」の二種に別き「ノルマン語」の専ら公文并貴族社會に用ひられ「サクソン語」は普通人民の間に行はれたり然

れども歳月を経るに随ひ二者次第に混淆し終に今日の英語を成せしに至れり

「ノルマン征服」より生じたる他の著しき結果は英佛二國の交渉を其故を問ふにウヰリヤムは英國に於ては若王の位に在りと雖どもノルマンチの公領を領して之が侯たるの資格よりいへば佛王の臣たるに過ぎざるなり此を以てウヰリヤムは佛王に臣従する事を甘んぜざれど佛王はウヰリヤムを王遇することを快しませず是れ實に英佛二國の關係を六かしくせし所以にして後來種々の戦争を生ずるに至りたり其仔細の事は追ひて語るべし

王の將き崩せんとするや遺言して曰くノルマンチの侯領の嫡子に傳ふべし英國の地の之を仲子に與ふべし季子ヘンリー一の巨萬の財を與へんと王崩を仲子ウヰリヤムルーハス王位に即きウヰリヤム第二世と稱す時先王は勲臣移て此國に侯たるもの其踐位を悦ばず長子ロバルトを迎へて王と爲さんと謀れり王財を以て「サクソン人」を誘ひ協力しく遂に反者を平げ直ち兵を帥てノルマンチに入り兄ロバルトと戦へり後貴族の中藏よりて和を講じ先だつて死する者其邦土を生存する者に譲るべしと盟約せり然るに末弟ヘンリー一獨り省みら

れざるを憤り兵を起し二兄に叛れ遂に戦ひ負けてノルマンチに逐れたり會々各國に「十字軍」の事起りしかバロバルトも亦パレスタインを征せんと欲し其軍費の出るなきを因ミノルマンチの侯領をウヰリヤムと稱し斯くして軍費を得ミパレスタインに親征せり其後王の獵遊の際誤つて流矢を觸きて崩じ嗣を其弟ヘンリー一時は英幽に在り推されて王とふれり然れども其實自立せしより同トカリし之故ヘンリー第一世を稱す又「ボークラーク」と號す蓋し學者が義あり當時各國の帝王皆無學にして姓名を書し得る者少なし然るもヘンリーの其姓名を書し得るを以て學者を稱せられしと云ん

ヘンリー第一世の不正の手續よりて王位を得しかば心自から安んぜむ兄ロバルトが前約を主張し采つて英國を奪はんかと恐れ大に民心を収攬するを力めたり即ち詔を下して曰く爾後寺領の歳入の寺領の有たるべし(前代僧侶死する時其嗣を命ぜず直ち其管地を没收せしむ數々行われしを以てあり)曰く諸侯伯は重き封建税を課せざるを止むべし(封建税といふ王は嫡子加冠するるとき或は長女の結婚するるとき或は諸侯死して其子後を襲ふと或は諸侯王の支配を脱し

て他國王の支配を受けんとするときは國王は献金すると古來例典とふれり暴君の朝に立つは當りて其高を増加し諸侯を苦めしとあり)曰くエドワードコンフエツサー王の法律に従ふて政治を爲すべし(エドワードコンフエツサー王の法律の最も民庶の羨慕する所なり)云々加之王は蘇格蘭王マルコル第三世の女マチルダを娶りて后とせり蓋しマチルダは「サクソン王統」の遠裔なり故に之を娶りて「サクソン人」の歡心を買ひしなり其後ノルマンチ侯ロバルトパレスタインより歸りてヘンリーの英國を奪ひしを聞き大に怒り直ち兵を募り海を渡りて英國に攻入りしガカンタビユリーの大僧正の仲裁よりて和睦し更に前約と尋ぎ二人の中先だつて死せる者嗣なくんば國を生存者傳ふべしと盟ひ又今度の戦争に従事せし貴族の總て其罪を問はざるべしと約したり其後ロバルトのノルマンチの民望を失ひ其國大に亂れたり英王斯くと聞て直にノルマンチを襲ひ戰勝てロバルトを幽閉せり是より於てノルマンチ遂に英王の有室を奪り此ころ英王の羅馬の法王と齟齬を開けり其故を問ふに當時大僧正又僧正たる者の皆土地を領するの例なりしがおよそ僧侶の此職を命ぜらるるときは二重の

禮式を経ざる可らむ他なし宗教上の官職を命ぜらるゝの式と封土を拜領するの式是より官職を命ぜらるゝの禮式を「インベスチチュア」といひ土地を拜領するの禮を「ホメージ」といへり時の羅馬法王アーバン二世新に令して曰く僧侶は法王の式を受くれれば足れり國王を煩をも及びざるなり只法王を奉戴すべしと王之を聞て我權を殺がるゝと恐る僧侶に迫て強て彼の二式を行はしめんとせり是法王と隙を生じたる大本あり後和成りて「インベスチチュア」を廢し「ホメージ」を存する事とせり蓋し「ホメージ」の所領を關する者なれば國王に對して行ふこと當然の沙汰ありといふよりあり是れ併しなから異日歐洲の一問題となりしものなり

王崩じて嗣なしウヰリヤム一世王の女ニアデラといふ者ありプロア侯スチーアの妻となれり二子を生めり長をスチーアにせしひ次をヘンリーといひしが前王の朝に招かれて英國に來りヘンリーはウヰンチエスターの僧正に任ぜられスチーアも封を英國にて受けたりスチーアの前王の在せ中ハ承順ある良臣ありしが王の崩ざるに及び忽ち權略を用ひ貴族と結びて前王が嗣と定め置たりマ

チルダといふ皇族を逐ひ自ら立て王となれり實は一千百三十五年あり斯くてスチーア王の貴族の歡心を得んと欲し國內に城郭を構へて住するを許せり是より諸侯の權勢日盛んとして王室日衰微せり時ノルマンディーグロースター侯ロバルトといふ者ありマチルダの庶弟ありひろかマチルダは後位に盡力せり適まスチーアの貴族の人望を収めしも僧侶と葛藤を生じ一時王位を失ふに至れり蓋しスチーアの先き築城を許してより貴族の傲慢王室の衰微を承せしを以て既に悔ゆる所あり更らば僧侶をして之を微はしめば王威全く地に落つべしと恐れ英斷して僧侶の剛戾ある者を獄に下せりウヰンチエスターの僧正ヘンリー大に憤りマチルダに内應して王を逐はんと謀りマチルダはグロースター侯ロバルト及び其部下を率ひて英國に入り是に於て國內大亂れスチーア王の黨とマチルダ女王の黨と互に相闘ぎ遂にスチーアの敗れてロバルトの爲めに擒せられたり然れども後幾ばくもなくマチルダも敗れてノルマンディーに奔れり加之グロースター侯ロバルトも兵敗れて擒せられしかを兩黨互ひ其俘虜を易へスチーア及びロバルトに共其黨を歸るを得たりスチ

「アン黨」の其首領を得て勢ひ再燃せり此に於てマチルダの遺子王位に斷念せり
 マチルダ子ありヘンリーと名づくジョフレ侯の胤なり時既に長じて兵略あり
 又政務に熟せり兵を率ひて英國を襲へり時英國の貴庶族皆禍亂に厭き戦ひ
 を好まざる故に速に和を講じ且約を定めて曰くステューアレン在世の間は英國を領
 すべきも一朝鬼録に入らば速に之をヘンリーに傳ふ可しと一千百五十四年王崩
 ず是に於てヘンリーの前約を以て英國王たり之をヘンリー二世とす是より
 以後「アランタジネット王統」といふ

英國の王統「第一サクソン王統」ハエグバルトに起りてエセルレツドに終り「ゲ
 ニツシユ王統」ハカニユートに起りてハーデカニユートに終り「第二サクソン
 王統」ハエドワード、コンフエツソルに起りてハロルドに終り「ノルマン王統」ハ
 ウヰリヤム第一世に起りてステューアレンに至り「アランタジネット王統」ハヘン
 リー第二世に起りてリチャード第二世に至る
 リチャード死して「アランタジネット王統」二分を一を「ランカストル王統」と
 いひ一を「ヨーク王統」といふ「アランタジネット」といふ「第の本」といふ義よし

て蓋しヘンリー第二世の父冠帯の木を挿みしより其號とあれり

ヘンリー第二世王位をつぎて英國全土を領し父の遺物とし佛領アンジヨー弁
 ヲトーレインを得且又母の遺田としてノルマンチー及びメインを得たり加之外
 威ギエンボワトア公ウヰリヤムの逝去をもる及びギエンボワトアを得たり台
 せて英全國を佛の三分一を有せり斯の如く版圖の宏大なるに隨ひ其権力も炳馬
 歐洲各國の帝王の上に出たり始めステューアレンの時より英國僧侶の権力日
 盛んニ王位に之を憂ひ其權を削らんと企てし時當りトーマス、ベツケツトと
 いふ僧カンタビユリーの大僧正の邸に食客たり王其俊才を愛して之を推任し遂
 に舉て「チヤンセラ」を云高官に昇らしめ其後カンタビユリーの大僧正セオボ
 ルド死をもる及び其後任を承らしめたり蓋し此人を利用して僧侶の權力を削
 んとせしむベツケツトの大臣たるや一王の意を迎へ唯命是れ從ひしが其大僧
 正たるや變じて僧侶を庇護し其權を擴張するは是れ務めたり王大に怒り遂に之
 を放逐すベツケツト遁れ去り法王に寄る法王其僧侶を庇護せしを嘉みし之を優
 待し使を英國に遣し王に謂はしめて曰くベツケツトの歸國を許さば直に

「破門」を命ぜんや王己むを得む之を諾せりベツケツトの國に歸るや傲慢以前より倍せり王常より切齒し嘗て獨語して曰く誰か彼の惡魔を攘ふものかと侍臣誤て謂らく是必定ベツケツトを刺殺せよと諷し給ふならんと同志四人を募てカンタビユリーに至り立地よりベツケツトを虐殺せり王報を得て驚愕爲す所を知らむ以爲らく此事にして我が教唆より出るの說世上より傳播するに至らば法王必らむ我を破門し凶民また我より叛かんと百方法王罪を謝し早うじて赦さるゝを得たり」

此時に當り愛耳蘭の分裂五國となきり其中よりレインスタール王なる者隣邦の王と戦ひ敗れて其土を逐はば英王より寄り救を乞ふ時に王は法王の怒りを解くより力めしを以て外事に干渉するの違ふし故を以て令して曰く貴族中レインスタール王を救はん」と欲する者あれば之を允さんと貴族よりリチャード・トウクレシヤある者あり之を救はん」と欲し兵を率ひて愛耳蘭に入り遂に全島を克服してレインスタール王の女を娶り一部は王とあれりヘンリー之を聞き直に兵を率ひて之を征し其領地を奪ふて遂に全島を領せり是れ今日より愛耳蘭が英國に屬せし始のあり

ヘンリー四子あり長をヘンリーといひ次をリチャードといひ次をジオフレールといひ季をジョンといふ后エリンナー五の嬖妾子ジョンのみと愛するを嫉み奔つて佛國に入り皇子等を煽動して叛を謀らしむ佛王もまた王の權威あるを忌み援兵を出せり時に蘇格蘭王も亦皇子等を援くるを約し兵を率ひて英國に侵入す王四面敵を受けて大に困り英民中説を爲す者あり曰く王の此役より苦むもの蓋し神聖なるベツケツトを虐殺せし報へと王乃ち途をベツケツトの墓に枉げ其墓前に跪き僧侶をして己の身を鞭たしめたり斯くの如くすると一晝夜懸て軍を進め佛蘇の兵と戦ひ遂に蘇格蘭王を擒し爾後英を侵さざるを矢にしめ且之を藩屏とせり後ち佛王も和を講し王子亦罪を謝す後ちヘンリー及びジオフレールの二皇子薨じてリチャードと佛王と誘はれて兵を起せり王時より老耄干戈の勞を執る能はず遂にリチャードの意に任して約を結び和を講じ叔後貴族の此叛亂に與したる者を擒せし最愛の子ジョンも亦之に與れり是に於て王大に歎いて乍ら病を發して崩せりリチャード之を聞き悲歎悔悟其喪に走り後遂に善良の人と爲れり

ヘンリー王人と爲り深沈武略あり能く人を御せりといふ

リチャード第一世一千百八十九年を以て王位に上れり其為人磊落豪武當時歐洲

リチャード第一世一千百八十九年を以て王位に上れり其為人磊落豪武當時歐洲

第一の猛將と稱せらるる時に十字軍第二役起れりリチャード之に應ぜんといふ然れども國庫空うして資の出る所なし乃ち王室の財産を鬻て軍費とあし佛王フヒリツプと共に兵を率ひてパレスタインに向ひ「サラセン」の將サラジンと戦つて其國に歸り英王の弟ジョンを教唆し虚に乘りて相與に英國を奪はんと謀り王之を聞き直ち「サラセン人」と和を講しく歸らんとせしが四顧敵國なし其途塞がれり乃ち其装を變り潜り埃國に至りし其國の侯リオホルドの爲に捕へられ幽窓の下に呻吟せり此間英人のジョンも服せざるに遂に償金を贈りて王を埃侯より購ひたり王の本國に歸りて更に佛王フヒリツプと戦ひ互に勝敗あり後ち其麾下下リモセス侯ビトユーと葛藤を生じ其城郭を圍みし母流矢に中て死す時ふ紀元一千九百九十九年なり後人之を「リチャード獅子心」と号す其剛勇を稱するあり「リチャード崩れて子なし弟ジョン位に即く此頃より「サクソン人種」の漸く「ノルマン人種」と混和するに至れり是れ今日の英人の太祖なり

ジョン王の無頼の人なり治國を以て肯とせむ宴樂を肯とせり是を以て人心日

離散し貴族相議して皇甥アーサーを迎へてと王爲さんとせり佛王フヒリツプ之を賚け妻すふ其女を以てせり王大に憤り兵を率ひて佛國に入りアーサーを捕へる手づから之を殺せり後ちフヒリツプと戦つて敗れノルマンディー及びメイン其他大陸の領地を失へり時羅馬の法王をインノセント第三世といふ是れ法王の最も勢力ありし者にて常に歐洲を一統して其命を奉ぜしめんと欲せり偶に英國のカンタビユリーの大僧正逝して後任なしカンタビユリー僧侶王の命を待たざレノルドを奉じ嗣と爲さんと欲し使を法王に遣はして命を請ふジョン之を聞て大に憤り使を馳せて法王の許に至らしめノルウイツチの僧正を以て大僧正と爲さんと請はしむ法王兩をケラ之を容れず更にランクトンを以て之に充てんとを命ぜり其言の容れざるを憤り人をカンタビユリーに遣はし僧侶を逐ふて其歳入を奪略せり法王其暴舉を怒り王を破門を王之を聞て恐懼策の出る所を知らず遂に國を法王に獻じ身只之を管せんとを約して其罪を謝せり

貴庶族ジョンの國威を汚し英國として獨立する能はざるに至らじめしを怒り大僧正ランクトン及びヘンブロー侯ウヰリヤムと首とし擧て王に迫り終にラング

ミードに於て「大憲章」に捺印せしめたり今其要領を擧ぐれば左の如し

- 一 貴族より過分の補助金を請求せざるべし
- 一 國王の貴族の女をして其意に適らざる婚姻をなさしめざるべし
- 一 大會議を経ずして王の課をべた税の其嫡子の加冠の時及び其長女の婚禮の時若くは國王を購ふ時に限る
- 一 倫敦及び其他都府の特權の國王と雖ども之を破る可らむ
- 一 英國人民の課をべき租税の盡く大會議の決議を経ざる可らず又度量衡の之を一定を可し
- 一 裁判所の國王に隨ふて諸邦に移るを得ず
- 一 人民の同等人の裁判に非ざれば禁錮さる、能はず又其財産を没收せらる、能はず

一 國王の人民に裁判を賣り又權利を賣る可らむ

「マグナカルタ」に捺印せし一千二百十五年六月十九日ありしが王の一時己むを得ざるに於て、貴族等の爲を所任して更に願みざりしと雖ども私商人を國

外に遣りて兵を招き且法王に使を馳せ貴族等の亡狀を陳せしむ法王之を聞き貴族等は無禮を憤りジョンに告げて曰く凡う契約の強迫の爲めは結びしものを守ると及ばざると時外國の兵招に應じて集るもの多しジョン大に喜び直之を率ひて貴族等と戦ふ貴族、人をしく佛王フヒリツアに説くしめて曰く陛下若し吾黨憫み兵を出して救ふあらば遂に英國を王の儲君ルイに獻せん幸に援兵を出さんことを冀ふと佛王大に喜びルイをして兵を將ゐて英國に入らしむ遇に英王病んで崩す時に一千二百十六年なりジョン王人と爲り殘忍暴戾不仁不義加ふるに女色に耽れり其世に在るや歐洲の領地の佛國の奪ふ所となり今や本國も亦佛國に屬せんとするの勢あり其子ヘンリー立つてヘンリー三世と稱せしが其性質温柔治國の才乏し其姪メヘンボローフ侯ウヰリヤム政を攝し國政大に治れり貴族等ジョンに惡んで國を賣らんとせしもヘンリー繼ぐに及び之に悦服し更に前約を踐むの意あり後ちビーターツローシユといふもの相とるに及び政宜しきを得ず貴族之を惡みレイスタール侯サイモン、デ、モントホルトを推して首魁となし遂に王に叛く數回戰の後ち王を擒しサイモンに大に議員を會して

國事の改革を計畫せり是れ今日の議院の權輿あり何ぞかれば今までの議政に與る者單に貴族のみふて人民の未だ政務に參せざりしはサイモンを以て各州より「^{貴族}ナイト

ヘンリー三世の子エドワードは豪邁の人あり父王のサイモンを擒せられしを憤ふり之を救ひ出さんと欲しサイモンは党せざる貴族を誘つて我党とあしサイモンと戦ひエバシヤムの地に於て大にサイモンの軍を破りサイモンを殺せり是に於て乎ヘンリー王また其位を復するを得たり當時また十字の役起れりエドワード之に應じてパレスティンに至れり其間母王崩じエドワード之を聞き歸て王位に即きエドワード第一世と稱せらる

エドワード第一世の重なる功蹟はウエールスの征服ありウエールスの英國西部の山地にして昔は「サクソン人種」の英國を克服せし時「アリトソン人種」逃れて此地方を采り桃花流水の別天地をなして今までの英國の支配を受けざりしが王の時ふ至り其侯イレウエレンなる者ありレイスター侯モントフォルトの黨と好を

通じ王は叛かんとするの色ありしは王の之を機としてウエールスを征服せんと欲し自ら兵を率ひてウエールスに行きエレウエレンと戦ふて之を破り遂に之を擒よして歸れり後其罪を赦して麾下とあしウエールスを管治せしむエレウエレン歸國してまた反す王再び兵を率ひてウエールスに入り會戰數次遂に復た之を破れり此役エレウエレン戦没を是に於てウエールス地方の英國の版圖に入れりエドワード第一世ウエールスを討て次子エドワードを封じ後ち長子アルフォートに死するふ及んで次子エドワード英國は嗣子とあれり爾後嗣子を呼んで「プリンス、オブ、ウエールス」と稱するを例とせりウエールス公の義あり

王の第二の征伐は蘇格蘭の軍なり蘇格蘭王アレキサンドル第三世崩じて（紀元一千二百八十六年）男子なし唯だ一女子マーガレットあり王マーガレットに配すに世子エドワードを以てし兩國を一統せんと欲し使を蘇格蘭に送りしが議未だ整はざるはマーガレット覺じ蘇格蘭の王統は將に絶えんとせり然るに三人の貴族あり互に其血統の親疎を論じて王位を争ふ其三人は曰くジョン、ペリヨル曰くロバート、ブルス曰くヘスチングスは是あり共先王ウヰリヤムの裔なり

議員等之を憂む使を英王に送り仲裁を乞へり王之を諾し大軍を勅して蘇格蘭に臨み三人を招き其為人を見るにジョン・ベリヨルの温良にしてロバート・アールスの強剛あり而してヘスチングスの權利二人に劣れり是に於て王は其柔順與し易きベリヨルと擇んで王と爲し爾後英國の指揮を奉ずべしと約さし先ありされど王の素志は蘇格蘭の一統を在るを以て速に其位を奪はんと欲しジョン・ベリヨルを倫敦に招き大に之と辱しめたり蓋し其叛を促まをりベリヨル果して王の倨傲禮をを憤り國に歸るや直に兵を集めて叛たり王自ら兵を率ひて蘇格蘭に入りダンバーの戦に於てベリヨルを破り之を擒として歸る是に於て蘇格蘭は全く英國に屬す

此時母當て蘇格蘭の一の愛國者ありウヰリヤム・ウォーレスといふ蘇格蘭名家の子孫ありしが家衰へて庶民と伍せりウォーレス嘗て英國の士官と闘争し遂に罪を得んとを恐れ身を山林に隠せり此時は當り英國の壓制を怒り俗を避けて山林に遊ぶ者多しウヰリヤム・ウォーレスは此不平黨の魁とありて英國の代官廳を襲撃し大に之を破れり蘇格蘭の人民は此事を聞て大に喜び相争ふて此党に

歸し一時猖獗を極め英國の羈絆を脱せしめんとするに至れり王乃ち兵を將むく蘇格蘭に入りウォーレスと戦ふウォーレス敗れ遁匿を其反人の告ぐる所となり英王の爲めは疑はれて虜となり倫敦に於て斬られたり

時ふ又ロバート・ブルスの孫にロバート・ブルスといふ者あり愛國者の首魁となり屢々英人と戦ひ遂に之を破て王位に昇れり王之を聞て大に怒り大軍を出さんとせしが果さを病に罹りて崩ぜり時に一千三百七年あり

王は實にジョン及びヘンリーの闇愚な肖を聰明機敏當代の明君ありき此頃ハンフリー・ボント及びロージヤ・アヒロツトある二人の貴族あり力を盡して國民の權利を鞏固せり王屢々外征せしや爲に國庫空乏勢ひ苛税は課さるを得ざるに至れり人民大に激し王に迫りて更なる「マグナカルタ」を守らんことを盟ひしめ加之爾後を戒めて憲法上に緊要なる事件に制限を立てしめて曰く國會の許しを経ざれば人民に税を課す能はず之より英國人民の權利ますく暢びたり

一千三百七年エドワード一世崩じて皇太子エドワード二世位に即き先づ兵を率ひて蘇格蘭を征伐せしがロバート・ブルスと戦ふて大敗し英國に歸るに及び

て大に民心を失ひたり加之ピヤースガベストーンといふ一貴紳を寵用し委ぬる
 小國事以てせしかば時の貴族妬み怒みランカストル侯トーマスを推して首魁
 と爲し相率ひてエドワードに迫りガベストーンを逐はんとを請願せり王百方を
 構へて要人を助け庇ひしかむ貴族遂に擅に兵を放てガベストーンを虐殺せり然れ
 ども王の奈何とももる能わざりし其後王はまた蘇格蘭を征せしがパンノックバ
 ーンの大戦に於て再び敗きて英國に引揚げたり是に於てロバート、ブルースの
 蘇格蘭を一統し遂に其王とあり

時よヒエー、レデ、スベンサーといふ者あり王に寵せられいつしか政權を掌りせ
 り貴族憤懣禍亂再び生ぜんとせり王之を察し急ぎ兵を募りて貴族黨を覆ひラン
 カストル侯を捕へて之を殺し一時其亂を鎮壓せり國內の如く亂れし折柄英
 佛の間は隙を生じ佛王チヤールス大軍を率ひて將に英國を討せんとせり英王の
 后イサベラの佛王の皇妹ありしかば佛に往いて調和の策を講せんとせりランカ
 ストル黨の逃れて佛にある者之を以て好機會となし后を勸めてヒエー、レデ、ス
 ベンサーを斥けしめんとせり其党人ロージャヤ、モーチユマーの才貌共に秀で

頗る后に寵任せらる后と共に英國に歸るに及び急ぎ王を攻めて之を擒し且人
 をして幽室の中におきて之を殺さしめ其子エドワードを立てエドワード三
 世と稱し后と共に政權を握り万機を擅りせて

モーチユマーの政權を握るや直一人を蘇格蘭に遣して其獨立を許し加之前王が
 蘇格蘭に對して得たる特權を解れ専ら彼の國の歡心を求めしが爲に大に國人の
 望を失ひたりエドワード第三世の當時己に長たり天資英邁常に亡王の仇を報
 ぜんを欲し遂に二三の貴族と謀りモーチユマーを誅し且皇太后を幽したり王は
 エドワード第一世の遺業の前王に至りて大に衰頹せしを慨き銳意國權を擴張せ
 るの策を講り先づ眼を蘇格蘭に注げり時に蘇格蘭に於てロバート、ブルース
 己に逝きてダビツド、ブルース位に在り王即ちジョン、メリヨルの子エドワード、
 メリヨルを援ふを名として蘇格蘭を襲ひダビツド、ブルースの軍と破りエドワ
 ード、メリヨルを立て、蘇格蘭王と爲し先王の時に行ひし例に倣らひ服従の誓
 をおさしめたり然るに後幾むくも亦メリヨルの位を斥けられダビツド、ブル
 ースまた王位を復せり時英佛戰端を開れしかむ王はブルースを制する能わざ

り死

英佛の葛藤の原因は佛王チャールズ第四世が嗣なくして崩れたるに基けり英王が其母イサベラは佛王の妹なりしを理由として佛母王たらんと主張せし原因するあり佛國よては此時パロア公推されく王位に即きフヒリツア第六世と稱せしを英王に聞て大に怒り兵を率ひて佛國に入て長驅して國都巴黎を侵せり佛王大軍を擧げて之を迎ふ王衆寡敵す可らざるを知りクレシイといふ所に退死爰て大に戦む大に克てり是れ有名なる英佛三大戦の一なり此役始めて大砲を用ひ王の長子エドワード勲功あり武名を歐洲に懸せり其軍装黒を用ひしかば黒太子の名あり

王は己の勝利をクレシイに得て直ち兵を進めカレイ府と圍めり此府はドーバ海峡の傍らに在りて英國より佛國に進入するの要路なり王之を拔き以て後永佛國に侵入するの便を爲せり

其始めに當りては府民も拒守甚だ力む然れどもエドワード之を圍む數月にして去らす府民力盡さく降を請ふエドワード其強項を怒り府内を名ある者六人

をして徒跣面縛して轅門に米らしむカレイ府民以爲らく行かば必らむ命を保つと能はざる可しと一人の之に應むる者なし偶まユーステールなる者あり之に應む又之に従はんともる者あり遂に六人を得相率ひてエドワードに謁しエドワード直ちに之を斬らんと欲す后ヒリツア側然進んで王を諫めて曰くカレイ府民に代りて茲に米る是れ義士なり何ぞ殺すに忍びんやと王遂に之を許しカレイを屬地と爲し歸國の途に上れり云々

後ち一千三百五十六年王また兵に率ひて佛國を征せり時佛王ヒリツア已に崩れシジョン王位に在り黒太子を迎へボアチエに於て第二の大戦を試みしが佛軍また大に敗績しジョンは英軍に捕へられり黒太子之を遇するに恭敬を以て相俸ふて倫敦に歸るは英王もまた之を優待して賓禮を用ひたり後ち佛國より百五十磅の償金と出さしむるを約してジョンを還せし「佛人」違約して金を出さむジョン約を重んじ再び英母往死後ち遂に倫敦に於て崩せりといふ斯くて幾もなくして黒太子薨す王も亦崩れ時一千三百七十七年あり

エドワード第三世の時母當りて國會議員の権力大に進揚せり蓋しエドワード第

三世ハ始終外征ニ從事せしは以て國帑窮乏屢々國會に向つて租税ハ増額ヲ請求せざるを得ざりしかば議員等の之ニ應ずるや常に其報酬として王權の幾分を授かんを請求せしを以て古采國事犯罪を處すると不明にして損害を蒙むる者多かりしが此ニ至り其區域と判然ならしむるを得たり曰く國王を弑せんと謀る者曰く國王母對し干戈を動く者曰く國王の敵ニ好を通る者是之を國事犯罪人とす云々

之と同時に羅馬法王の壓制を脱するを得たり既ニ前四ノ説明せし如くジョン王此時英國を擧て法王に獻ぜしより毎年貢を羅馬ニ奉るを以て例とせしニ此時ニ至り議員等相議してジョン王ハ國民の承諾を得て擯母土地と法王ニ獻ぜしものなれば英人の敢て之を奉むべたの義務なしと議決し遂ニ其關係を斷絶せり又王ハ大母貿易を獎勵し就中毛布の輸出を盛んにせり加之以前公文ニ總て佛語をりしが改めて英語を使用する事となせり彼の英國の詩學の祖と稱せられたるジョフレイ、チョーサーを實ニ此時ニ出でしなり要するハ王の朝ハ政事上社會上文學上ニ於て大なる進歩を加へあるの時といふべし王崩れて黒太子の子

リチャード位に即く之をリチャード第二世といふ時ニ年甫て十一皇叔グロースター侯トマス執政とされり後ち殺もなくして英人の苛税母堪へを遂に一揆を起しウアツト、タイラア及びジャツクス、ストロー等魁を以て倫敦母迫り諸侯伯の家を襲ひ富豪の舖店を掠る狼藉至らざるを朝廷之を拒ぐ能はざり王時ニ年十六之を鎮撫せんと欲し二三の扈從を率ひ街巷ニ立出たり途次民軍ニ出會せし母ウアツト、タイラア王ニ對して言語不遜ニ從者憤り進て之を斬る是亦於て民軍沸騰王の身正に危らんとせり王動る色なく單騎雲霞の如き民軍の中ニ入り疾呼して曰く爾ハ爾の首領を失ふを憂ふるが朕ハ即ち爾の首領なり爾憂ふる勿れ也民軍其大膽ハ服しスミスフィールドの曠野に於て減税の條約を結び悉く解散せり

王ハ年少の頃の如此英邁の資あるニ似たりしが漸次酒色ニ耽りまた政務を省みむ且グロースター侯と不和を生じ之を幽閉して潜ニ殺害せり又第二の叔父ランカスター侯ジョンの死するニ及び其采邑を奪ふて其嗣子をしり相續せしめず恃戻放肆人心日に離散すジョンの子ニヘンリトといふ者あり王の勳氣を蒙り久し

く外國に放たれてありしが王の我父の封を奪ひしを憤り他の貴族と心と合せ不
 意に歸國して王を襲ひ之を擒よし遂に自立して王とされり之をヘンリー第四世
 といふリチャード王の其最後を評し之を或いふヘンリー王刺客をして殺さし
 めしなりと史家ハラム嘗てヘンリーと評しく曰く「ヘンリーの單身歸國もるや
 貴庶族僧侶を論ぜず一人のリチャードに應むる者なく糧を齎してヘンリーを迎
 ふ然ればヘンリーの篡奪者と稱するを得ざるか此變亂ハ英人の希望を出でしや
 明らなり云々」是より以後を「ランカストル王統」といふ

ヘンリー第四世の不正の手續より王位を得たる故に良心常に安らむ故
 に屢々政略を講じて百方民人の歡心を買ひしに保らむを及亂墮を接し國內常に
 亂れたり王崩れて其長子ヘンリー第五世位に即く王の太子たるや放蕩無賴父王
 の命母従わぬ爲に勳氣を受て王宮にあることを許されむ王崩むるの後ちハ其
 行爲を慎み豹變して明石となれり王の朝の大事事件ハ佛國の征伐なり當時の佛王
 をチヤトルス第六世といふ性闊愚にして且狂なり是を以てオトリヤン侯バルガ
 ンチー侯豆ひ母其權を爭ふバルガンチー侯使を英王に送りて援を請ふ王即ち兵

を率むて佛國に入るアチンコールトに於て英佛第三の大戦を爲し大に佛軍を
 破れり此時佛國に於てハ貴族將士の死もる者最も多し英軍死する者僅かに四十
 人佛人死もる者一万餘人なりしといふ

王勝利を得て一旦國に歸り大に糧を蓄へ銳を養ひ再び佛國に入り直に巴里に迫
 りバルガンチー侯の援兵を得て益々勝利を得たり遂に佛王と約し其女は娶て后
 とおし佛王の崩じたる後ハ佛國を英國に併せべしといふとを約束せり然るに不
 幸おして王の病を以て俄に崩じ其子ヘンリー位に即く年甫で九ヶ月是佛王の女
 の生む所ありヘットホルド侯ハ佛國の執政となりグロスター侯ハ英國の執政
 となれり

此時佛王チヤールス六世もまた崩む其嗣子チヤールスありと雖どもヘンリー前
 約によりて佛王たるが故に遂に王たるを得ず佛人望をチヤールスに屬する者多
 し遂に分れて二黨となれり曰くチヤールス黨曰く英王黨是あり而してヘンリー
 黨勢強しチヤールス佛國の南部オトリヤンスの地に奔り之れに據れり時ハ彼の
 ジヤングークある女丈夫出で遂に英佛の運命を一變せしめ英人をして足を佛國

に止むる能はざらしめたり此事は佛國の史冊於て悉しく説くべし
 ベツトホルド侯佛一病死し英軍の挫折して歸國せるに當り本國に於てハグロ
 スタ一侯大教正ビユートホルトを双方の領袖として二大黨派の相争ふあり王の
 時一二年二十三歳然れども其人と爲り闇愚へ故に兩黨各々其後と納れて以て政權
 を得んと争へりビユートホルトのサツホルク侯等と謀りて遂にアンジヨ一の女
 侯マアガレツトを迎へて皇后と爲し尋ひて頻りに皇后に媚びて其權力を藉りグ
 ロースター侯の滅亡を圖りしが侯果して冤罪を蒙り幾ばくもかく獄中に死せり
 大教正もまた續いて逝しサツホルク侯特り皇后の寵任を專ら母し宰相となりて
 國政を掌握せしが後ち罪ありて外國に流さる途にして人の殺す所とされり時一
 ヨーク侯リチャードなる者あり「モーチマー素」にしてエドワード第三世の第三
 子クラレンス侯の女ビリツクの裔ありヘンリー侯のランカストル侯の子孫なり
 正統を以て論ぜればヨーク侯は王位を踐むべき理ありリチャードの財産に富み
 且英才あり貴族望を屬すリチャード王の闇愚なるに乘じ王位を望めりヨーク侯
 の黨中オルウイツク侯なる者あり常に士を養ひ幕下三萬の食客あり勢威比肩す

る者なしヨークのオルウイツク侯を得て勢力轉々盛んなり是より先きサツホル
 ク侯の貶せらるゝやサマルセツト侯代りて宰相となりしが失政多しヨーク侯
 其罪を鳴らして之を退けんと請ひ兵を以て倫敦に迫る蓋し此機に乗じ王位
 を得んとせしかり會し皇后皇子を生えり故に當時王の病衰して殆んど政を執る
 能はざりしよりも最早平穩の手段にてヨーク侯の位を譲ふ可き望に絶えしの
 みか輿論の傾向も豫め計り難かりしかば侯は輕忽に兵力に頼ふることなきを
 只サマアセツトを退々ておのれ代つて執政とせしめて足れりとせり然るに皇
 后マアガレツトの其性王と異に機敏丈夫を凌げり其黨人と謀りヨーク侯の執政
 を解くヨーク侯憤懣兵を擧げ千四百五十五年五月セントアルパンスに於て兩
 黨會戦をヨーク侯大勝を得て王を擒ふせり是れ有名なる薔薇軍の原兆なり薔薇
 軍は三十年間相續き十二の大戦あり皇族の死する者八十貴族の其家を盡せりと
 謂ふべし薔薇の名の兩黨紅白の薔薇を以て區別せしを以てなり(ヨークの白ラ
 ンカストルの紅なり)
 セントアルパンスの戦の後ち兩黨一時休戦しヨーク侯舊職に復しヘンリー

王位を踐めり然れども兩黨の相執ること益々烈しく千四百六十年ノルザシアト
 ンの大戦に於て王はまたオルウ井ツク侯の爲め捕らせられ後マーガレットの
 逃れて蘇格蘭に入り蘇格蘭及び北部の貴族を誘ひ兵を募りてヨーク侯を攻め
 りウエークホルドの役侯の軍利なくして侯之に死せり三子あり長をエドワード
 といふ後エドワード第四世となれり次をデヨルジといひ季をリチャードとい
 ふ後母リチャード第三世とありしは是なり

ヨーク侯死して長子エドワードヨーク黨の魁となり之より戦亂相つぎ皇后の
 戦ふ毎に敗れ或は蘇に走り或は佛に奔り此間ヨーク黨十分の勝利を得エドワ
 ルド遂に英王の位に即たり之を第四世といふ皇后マサレットの逃れて佛に在り
 し間王はオルウ井ツク侯と不和を生じたりオルウ井ツク侯怒り佛國に赴きマ
 ーガレットを援けてランカストルの黨人となれりマーガレット大に喜びオルウ
 井ツク侯と共に英國を伐つ王其勢に抗する能はず逃れて大陸に至りバルガンヂ
 侯の援ひを乞ひ兵糧を借りて英國に歸り倫敦の近傍バル子ツトを於てオルウ
 井ツク侯と戦ふオルウ井ツク侯戦死すついでマーガレットは十五十クヌマリー

あててヨーク侯の爲め破られ其子エドワードと共に捕へられたり王はランカ
 ストルの系統を絶たんと欲してエドワードを殺せり時ヘンリー第六世も幽室
 の中に病死せり

後ちマーガレットの佛王ルイ十一世と王との條約を依り償はれ佛國に餘生
 を終り千四百八十二年に死せりといふ是に於て兩黨の争全に止みたり
 千四百八十三年王崩じ長子エドワード立つ之をエドワード五世と稱し時に年甫
 めて十二歳父グロースター侯リチャード政を攝すリパーズ侯之を教育せり在朝
 の人王の幼冲なるを乘じ互ひに黨を結んで相軋れり一は皇太后エリサベス黨
 すリパーズ侯の如き其一人あり一はグロースター侯に黨を先王崩御の際エドワ
 ード五世のウエールスの近傍ラドロウ城に居れり倫敦城に入りて即位の式を舉
 げんと欲しラドロウを發せグロースター侯之を其途に迎へリパーズ侯及び其同
 黨の士を捕へ之を禁錮し併せて皇太后をも幽せんとせり皇太后身を脱して寺院
 に匿るグロースター侯人と爲り奸佞邪智腹中細あり夙母王と廢じり自立せんと
 いふ心あり遂に竊に王及び其弟ヨーク侯を弑し巧み偽徳を粧ひてリチャード三

世王とあるに至りエドワード五世は在位二月にして此難ありリチャードの王位を奪ふやパツキングハム侯ヘンリーと與て力あり是を以て王の其封を厚くして以て之を報ひ然れどもヘンリーは之を以て足れりとせむ窃ふ廢立を謀れりリッチモンド侯ヘンリーはヘンリー五世の赤亡人キヤザリンを娶りしオーエンチエードルの孫に當れり故に母の系統より論せればエドワード三世の四男ランカストル侯ジョンの系あり故にランカストル黨の長となり仰がれて九五の位を踐むの權ある人なりパツキングハム侯之を奉りて今王に代らしめんと欲し妻のまゝエドワード四世の長女エリサベスを以てしランカストルヨークの兩黨をして釋然相和せしめんと圖りたり是に於て乎兵をウエールスに募り英國を襲はんと企てしが途に大洪水に會して兵士四散し遂に王軍に捕へられて斬られたり王は今や自らエリサベスを娶らんと欲し其後アンを妻從し更に奸謀を運らす折柄リッチモンド侯ノルマンディーに在て兵を募り急に英國を襲ふ諸侯期せむし會する者多しメーヌ州ボスワウスに於て王の軍と會戦す敵の總督スタンレー叛て内應を爲す王死を決じリッチモンド侯を格闘せんと欲し縱横奮戰遂に陣没せり

是に於てリッチモンド侯倫敦に入て即位せしむヘンリー七世といふ「チユードル王統」の始祖あり以上英國に關する中古史はあらがた叙述し終りたれば予は之より一轉して他の國の歴史を語るべしなれどもそれ先づつて爰に少しばかり注意して置く可なり事あり他も其の蕃穢戰爭の英國の歴史に重大なる關係を有する事是に己に前よりいひし如く英國の封建制度は「ノルマン」の戰勝に基いて次第に其基礎を堅うし「ランカストル系統」の朝に至りては極めて盛んなる者なりし事其國王を強迫して屢々政治上の改良を行ひし事の總て貴族の手に出たるを以ても知るべきあり然るに萬敵戰爭の爲に最も強大なりしウヰリツク侯戰死し尋いで數百の名門の陣没もるありしかば貴族の勢力は頗る減少し貴族の名目の依然存したるも係らむ英國の政事上の局面は大に他の大陸の者と異なる事とされり何とされば此より以後は貴族の爵位を有せし者の其數夥多ありたれども十中六七は新に受爵せる新華族にして所謂門閥家にあらず餘先の功名にて貴族たるの榮譽を得たる者もあらねば王に對する關係も人民に對する關係も大に異なりし事を俟

たを随つて後米の開明に對する關係の如きも大陸に於ては決して見る能はざりし者ありしならんそれらの事の後回して折を得てまに講せべきが兎に角英國の封建制度が大陸の者との異なりたる偶然の事情より倒れたる事と其滅亡の速うなりし爲に大に政事上の局面に異様の結果と與ふべたが如く見えたりし事と今より記憶するを要する事あり

予はこれより佛國の歴史を講じつゞけんと思ひあるが又更に考ふれば彼の有名なる中古の國民即ち「サラセン人」の勃興は事并に十字軍の事の顛末武官制度の性質米歷中古時代の文學の事等これらを先だつて語る事の極めて要用なるを感覺せり諸子乞ふ順序は錯雜を怪む勿れ

サラセン人の興起

「サラセン人」は中古の史上に一大變動を惹起したる國民にしてマホメット教徒又の回々教徒を号する者即ち是れ抑も回々教の始祖と聞えしはマホメット又ハ

モハメッドと呼ばるアラビヤの一部府メツカといふ所を生れたり是れ五百七十年乃至の五百七十一年の事マホメットの其歳四十に至るまで嘗て世人の耳目は驚おしたることもあし唯だ其家の富豪なるは性明敏敢爲にして正直信義を重むるとを以て世の人の知る所となりしのみ元米書と讀み字を寫すこと能はざりしと雖ども夙にアラビヤ半島の諸部并にシリヤ、パレスティン等へ旅行して貿易に従事せしを以て大に其見聞を擴めたりかくて後久しく深山の嶮に隠居して潜思考究する所あり遂に一派の宗教を創起せり一日親戚故舊の集會に於て突然宣言して曰く上帝余に任命するはアラビヤ全國の宗教及び習慣を改良せんことを以てせりと又説て曰く猶太教も基督教も共に上帝の宣旨を出ると雖ども余が上帝より受けし教義は彼等比すれば更に一層完全なりと乃ち其朋友及び親戚をして皆己れの威命を奉戴せしめ并に偶像を放棄して唯一の眞神を拜せしめたり

マホメットの其自國に對しては實に大功ある宗教の改革者といふべし其國人の爲の舊來の教法に比ぶれば遙かに優りたる宗教を開き且人民の宗教に熱心を

(ヘギラ) (2271)

るを機とし土族の分離せる者を結合して遂に一大王國の基を開きしこと大なる功績といはざる可らむ其經典の隨時記録せる者にて之を「コーラン」と稱し即ち「讀本」の義あり宗旨を「イスラム」と名づく即ち「救濟」の義あり

マホメツトの最初の門徒の僅うに其妻と親戚數人止まり其數の増加するに運かりし蓋しメツカの人民はマホメツトを目して狂人と爲し或は偽騙者と爲し容易ふ之を信奉せざりしが爲なりマホメツト居ると幾ばくならむメツカより逃れて危難を避けざるを得ざる場合に至り弟子と共に今日の所謂メゲナ府に逃れたり是れ實に六百二十二年七月十五日の事にして「アラビヤ人」は此日を避難日即ち「ヘギラ」と稱し爾來マホメツト教の諸國にて之を曆表の紀元とせりマホメツトのメゲナに於て好遇を受たりざるに既し許多の改宗者を此地に得たればなりきまむこそマホメツト此地に於て始めて回教の寺院を建たりといふ

マホメツトは是に至り忍ち一變して軍人となり呼て曰く廻の天堂及地獄の鍵ありと乃ち劍を把て萬民に迫り強ひて其宗旨を奉せしめ次第に諸族を征服せり未だ十年を出でざるにアラビヤ半島悉くマホメツトの主權を承認し全國の民一人

として「モスレム」は宗徒にあらざる者なきに至れり斯くてマホメツトは更に其新教をアラビヤの境外に布及せんと欲し其準備を爲せしや偶に熱病に罹り六百三十二年メゲナ府に於て歿目せり

マホメツト死して後「カリフ」と稱する主治者相繼いで此國の君とされり「カリフ」とは繼承者の義なり最初の「カリフ」はマホメツトの義父アビニューマカーといふ者あり爾後「カリフ」は政教の兩權を掌握し能くマホメツトの遺志を繼ぎ連り侵略征服を事とせり而して其到る處に於て土民をして常に三つの中其一を擇ばしめたり三事とは「コーラン」を取るの貢物を獻するか若くは劍戟の頭に臨むを欲するか是なり此手段に由てマホメツトの宗教は亞細亞及び亞弗利加に大部分を蔓延し次で又歐羅巴に進入するに至れり其事は後段に記すべし

最初マホメツト教徒の侵襲を蒙りたる者は彼のパイザンチアムの帝國即ち東羅馬の東方の領地なり悉くといへばアビニューマカーの時アラビヤ兵を以てシリヤ及びメソポタミヤを征服し次の「カリフ」オマルの時に至り埃及を侵略し又北部亞弗利加を蹂躪せり其埃及を侵略するや夫のなる有名アレキサン

ドリアの大文章を焚たりをいひ傳ふ此故に回々教の信徒は今尚非難さる、
 事なきとも近世の著作家の言に據れば其實彼の大文庫は是より遙く以前の頃既
 に破壊されしものなりといふ當時「アラビヤ人」即ち「サラセン人」の其勢は破竹
 の如く「タウラス山」以東の諸國に於て向ふ所前なき有様ありき蓋し此等諸國
 は羅馬帝國の管轄下に於て羅馬の法律及び基督教の根柢の最も微弱ありし所な
 りれば是は以て東帝國の次第に東方の領地を失ひヘルシヤ以東印度に至るま
 での諸國も亦「モスレム」の領地内に加へらるゝに至り
 然れども「サラセン人」が西方に向ふに及んでの全く之を反し極めて劇烈なる抵
 抗に出會ひたり第一「サラセン人」のコンスタンチノールの都を圍むと八年
 (六百六十八年より六百七十五年に至る)の久しきに渉りしれども城兵火箭を投
 げ下して頗る能く防ぎしを以て攻むる每必ず退けられ其後四十年を経て再
 び之を圍みしれども亦同じく失敗せり北部亞弗利加に於ても亦久しく固執ふる
 抗敵に出會し其志を擡する能はざりしが竟る其北岸の地シレニア、ドリア、
 シカ、セーシ等を征服せり次て七百十年に至りアラビヤの猛兵一團所謂「サラ

セン」の頭巾を戴き「サラセン」の短劍を提げ其將タリクメンサイドに従ふてジ
 プラルタルの海峡は渡り終り西班牙に上陸せり蓋しジプラルタルの地名はタリ
 クメンサイドより出たるを即ちジプラルタルの「ジエベルタリク」の轉訛に
 て「ジエベルタリク」とは「タリクの山」といふ義なり
 是より先「ウビシゴツス人」が一箇の王國を西班牙に建設したりしとの既述前
 に述べたり「サラセン人」の侵入をるや其最後の國王ロアリック之をセレスの野
 に迎へ撃つて敗績せり之に依て「サラセン人」固く西班牙に根據をうまへそれよ
 り數年間を経て終り此半島の全部を押領せり唯だ餘す所の基督教を奉ぜる一小
 國アスチユリヤスといふ北方の山地あるれみありし
 かくても「サラセン人」は尚未だ飽きたらむして進んで「ピレニース」の山脉を
 踏え南部ゴールの一小國を奪へり其後其將「アアルラーマン」といふ者あり
 ホメット教の勇兵を將ひて更に北征し「フランク人」の領地をも奪はんと企てた
 り其口ア地方に至るまでに向ふ所前なき恰も歐羅巴全國が「モスレム」の武威に
 風靡せんとするの有様ありた

此危急の時、當り佛蘭西のチャールス、マーテル振て基督教の國々を保護せんと欲し、前にもいひし如く大兵を集めて進軍し「サラセン人」とトウル及びポイトイとの間に會戦し劇闘すると七日、及び第七日の日、「サラセン人」大敗し死傷算無し時、七百三十二年より此勝戦は永く「サラセン人」腕臂を斷じ終つて歐羅巴と之と伸ばすを得ざらしめたり

之が爲、「サラセン人」の如く深く歐羅巴を侵略せると能はざりしと雖ども、固く西班牙の地に據りて一箇の王國を建立せり此王國繼續すると七百年の長き、涉り中代の末年まで存立せり

「サラセン人」のかくして征略せし大版圖の初の程、一國を成し能く一致してありたるゆゑ一人の「カリフ」上にありて西班牙とも印度をも統御してありしが幾ばともなく「カリフ」の戦に關して繼承權の争起り戦争平離離を接し七百五十五年に至りサラセン帝國終つ分れて二國となり一人の「カリフ」の西班牙に在て君臨し他の一人はバグダツドにあつて東方を統御せり

東方サラセン帝國の主治者の中に最も著名なるハールンナルラシツドに

て此人七百八十六年「カリフ」と爲りシヤレマン帝と時と同ふせり其管治せる都府の状況并ふ其處世の情態の巧に之を「アラビアンナイト物語」といふ小説の中に描畫し盡せりハールンの死後内訌起りて東方サラセン國分裂し次第州郡を失ひ終つ第十一世紀及び第十二世紀間「土耳其人」の領食とあり了れり

西方即ち西班牙の「カリフ領」はサラセン帝國二分して以采其政治の權力は常「オムミヤツド系統」の手裡に存たりたりコルドバを以て都とせり「オムミヤツド系統」の「カリフ」此都に在て四方を管治すると二百八十二年（七百五十五年より千三十八年まで）の長きを涉りしが第十一世紀に至り「サラセン人」は主權全く滅び「ムール」といふ人種威力を得て更に帝國を建ることゝあれり

中代の文明史を取調べんとせれば主として「サラセン人」の史を講ぜざるを得ざるなり蓋し當時歐羅巴の人心は總て昧昧の有様と沈淪してありしが持り此鋭敏なる「サラセン人」のみは盛ん理學、文學、及び技術を研究しコルドバ府の學校はバグダツドの學校と相競ふて書籍を蒐集し學術を獎勵せり故に中代歐羅巴の醫學、物理學、及び心理學は係る創意發明殆んど皆其源を此に取るといふも

証言にあらす此事の尚後章に於て詳説をべし

封建制度

余の既に「サラセン人」の歴史を述べ終りたれど前にも一寸いひし如く直ちに進んで日月曼及び佛蘭西の歴史を述べると適當の順序あるべけれども之を述べると先ちて中古の状況即ち普ねく歐羅巴諸國に關係せる大事は概陳し置らざる時ふの動もそれば讀者をして了解し苦ましむるとおさしむるもあらざるべしと思ふが故に先づ封建制度の事より説き起さんと欲す

當時歐羅巴諸國の社會のいづれも皆封建制度と稱する一種特別の狀態を呈せざるにありき又羅馬法王と多少の關係を有せざるにありき將又暗黒時代と稱する不文不學の一時期を経過せざるにありき且中代の末葉に起れる學藝復興といふ事關與せざるにありき

就中最も顯著なる中代の特相は封建制度ありきと此制度の嘗て西帝國の版圖に

屬せし諸國を押領せる「キエートン諸族」中行われし所の特別なる結社の關係に濫觴し第十一世紀頃に至り嘗て「日月曼人」の征略したる諸國に蔓延し爾後中代を通じて保続し而して近代の始め大事變の相續いて起るに及んで始めて廢滅し歸せざる者なり

初め日月曼の自由獨行の蠻人等が其酋長を授けて敵國を征服するや酋長の其功勞を酬ゆる爲に各人應分の采邑を與へ之を世襲産と名づけ各自の私有物と爲さしめあり而して酋長又ハ君王と稱する者も甚だ廣大なる土地を分取し以て己まが私有とせり然るふ其後君主己の領地を其隸屬の寵臣に割與し以て忠實を盡し且兵役に従ふとを誓ひしむるを常習と爲し至り此割與せる土地を食邑と稱し此約束に因りて土地を所有するを守産といへり此守産即ち食邑の全く世襲産と異なれり世襲産の真に各自の私有物なれども守産法より領する土地の其人の私有物にあらむ唯だ眞の所有主の允許ある間之を領するを得るに過ぎざ兵士若し臣たるの道を盡さざるべし則ち之を領するの權も亦停まらるゝ例ありき其眞の所有主を君主といひ所有主の土地を領する者を其臣屬といへり

君主が食邑を寵臣に割與すると同じく廣大なる世襲の采邑（即ち初めより全く自己の私有地）を有する者の其幾分を割き之を守産法にて我より劣等の位地に立つ者と與へ以ておれぬの家采とせりヒンロップ僧正アボット并アボット和尚も亦國王より受領せる領地を武官に分與して之を其家臣と爲し之をして其土地を保管せしめ寺院を護らしめ又國王の徵募に應じて兵役に従ふの義務を負はしめたり

凡そ臣屬たる者の其食邑を領するが爲めは君主に誓約する所の要點は臣禮を盡し事と兵役に従ふ事との二事に在り之を詳言すれば總て國王より食邑を受くる者の儀式典禮の時を參朝して其務に従ひ并に戦争の時を當りては若干の軍兵を率ひて國王を佐くるの義務あり又僅少の食邑を有して大地主に隸屬する者も同じく其地主の召喚に應じて城に登り并に軍務に従ふの義務あり而して地主の其臣屬を保護するの義務を有したりき

此土地所有の制幾くおらむして漸く上下を行はれ次第に隸屬の關係を爲すに至り蓋し大貴族は國王の贈與を受くるを以て甘んじて其臣屬となり又小地主も往々自ら好んで其私有地を近傍の大地主に献じ更之を食邑として受領し以

て此地主の保護を受けんとを願へり是を以て漸次一國の全体殆んど食邑隸屬の狀を爲し上の國王より下の貧賤なる自由の平民に至るまで屢々階級に従ひ各自上級の者より其食邑を受領しと國王と雖も若し其領地を他國の地に有れば則ち其國の王の臣屬たり例へば英吉利のウヰリヤムがノルマンディー公の資格を以ては佛蘭西國王の臣屬なりしが如し

封建制度の實際に於ける活動の狀態を知らんと欲せば一國に於て將兵を起さんとするの際其有様果して如何やうなるべからざるを想像するに若くはなしまづ國王の諸侯伯に令を下し若干の軍兵を將むて日を期して戦地に會をべしといひ諸侯伯も其部下の臣屬に令を下すと之に均しく又此等の臣屬も亦己れに服従する農民郷士を徵募する手續之と同じ故に軍隊は皆自由の平民より編成し其武器の或は自費を以て之を辨じ或は其主より之を給したり且兵士の各々其主人たる人の旗下に屬するを例とせり

上は於ては専ら土地所有者のこのみを述べたれども封建社會の人民の大がたは自由なる所有者の非らむして概して土着民といふものを土着民の今の

所謂奴隸母の非らむ即ち人を人として賣買さる、事におかりしうど始終或る領地は附着して進退去就を其領地と共にするの義務を負へり若し地主變ざる時其地と共に主を換ゆるを例せり又土着民の外に眞の奴隸といふものもありき戦時に俘虜と爲されたる者或は罪科の爲め奴隸と爲されたる者是あり食邑といふ俗に城下の町と村邑とが相合して成るものなり城下は地主たる者其家族并に武士と共に住居し村邑即ち附屬の領地の耕夫の住居する所なり耕夫は其村邑に住居して借地し若くは賃勞する自由民より成るものあり又は生れながら地主の奴僕たるものもあり

封建制度の其未だ英吉利國に行われざる以前既に「チエートン族」の征服せる諸國に蔓延せり而して其始めて英吉利國に入りしに已むいひし如くノルマン人のウイリヤム王の時なり「ノルマン人」の英國に侵入するや新に衣服せる國あると以て昔叛の震多し故に安全の住所を營んことを思ひ乃ち堅城以築き繞らす厚壁深溝を以てせり此等其城塞の通常分る三部と爲す即ち内廓、外廓、及び牙城ふして牙城は城主の侯伯之に住居す城は入口の外壁を構へて之を護衛す牙門

前より大抵最も堅牢なる者を設けたり其通路の門扉の外に鐵柵ありて上より之を開閉せし又城門の圓天井に數多の孔を穿ち敵の來る時の鎗鎗及び沸騰せる瀝青を其頭上より注下はるを得べからしめたり此等の城趾は今日英國中に散在する者少からざるを以て封建時代貴族の城堡の堅牢なりしを想見せしむる也蓋し此制度の下の人民も此裝飾を剥去れば此制度の不良なる者たるや明白なり蓋し此制度の下の人民の毫も權利を保護せらるゝとなく全く其禍福は君主に委任せざるを得ず幸ひにして其君主堯舜の如くかれは人民の状態必しも不幸にあらずと雖ども元來此制度たる人をして他人の意志に隨はしむるを以て主とをを者なるを以て其根本よりして己に不良なり實に此制度の下は咄々奇怪なる弊害ありしと敢て疑ふに足らざるあり諸侯は各自陰暗たる城寨の内は居り土着民及び借地者の城下は聚落を爲して之を圍繞し而して外に依頼する所なし是故に侯伯大に此人民を抑壓するも侯伯は即ち其食邑の主治者たるを以て人民は復た訴ふべき所なかり又封建政治の國体の成長を妨礙せり蓋し此政治の下に在ては百事百物孤立離隔

し一國の素より諸勢力の集合より成りて一の頭領を戴くと雖ども其頭領ある王者若くは帝者の眞の權力を有せざるを以て賦ひ侯伯貴族の帝王に忠義を盡すを普へども若し偶々背くことあるも唯だ兵力に是因るのみあらざれば之を制御するの道なかりき故に此制度の行はれたる時代の實に法律的の支配といふべからむとして全く無法律的の支配ありしといふべきなり

封建制度を漸次顛覆せし所の勢力三あり(第一)王權(第二)市府の權力(第三)僧侶の權力是より左に三者の各一就て一言すべし

王權の増大は直接に封建制度に牴觸せる者なり何となれば中央權の益々強盛を加ふるに従つて侯伯の權力は漸く薄弱とならざるを得ざればなり初の佛蘭西

日耳曼伊太利西班牙及び英吉利の如き「チュートン族」の新設せる國に於ては

國王の侯伯に對すると猶ほ侯伯は其臣屬に對するが如くありしが年を経るに隨ひ國王漸く權力を其一身に集め遂に封建制度と牴觸せるに至れり其然る所以は他なし王は全國の頭領なるを以て先づ其心裡に「一國家」といふ思想を起したり我は此全國の君主之を統一して支配せざる可からむといふ觀念を起せり故に

正に公侯伯子男の狀態より漸く下で平民其者の狀態をも洞察し遂に或は下民に當りて其權利を庇護し又は法令を發して之を全國に施行せしむ王權を以て法律を發すは其源泉と稱すに至りしなり而して其法律は封建侯伯の私意とは異なり全國を目的として發行するが故に其のうちに不偏公平ありて平民を利すること歎を於らむ以て「平民の歡心を買ふ」となり隨つて王權の左袒者を増もに至れり

第二の勢力は市府の勃興ありとす往時羅馬帝國の頃には到る處に自由自治の市府數處存在せしが此等の多く「チエリトニ族」の鋒鏑を免れ封建社會は中間に立ち能はぬ共和政即ち自治の社會を維持せたりと加之封建制度も亦自ら同様の社會を造出せるに至り其故を問ふに當時驕亂の際に民衆は王侯の城下を驅逐するに及び王侯も亦之より自ら強を增多の利益あるを以て其住民に若干の特權を與へ以て其歡心を買ふことの上り利益あるを悟りたり是より於て半所請都邑あり者起り王侯の任命せむ市府を管治し漸く又更に一層自由なる城市の漸興を以て其地は城市の確實なる特許狀を有する都邑として其地は自由

民自ら市尹を撰舉するの権理を有せり此都邑及び城市に封建壓制の沙漠中ニ在る自由の沃地といふべきものにて夫の竟に封建制度を倒し又王者の抑壓を和らげて立君代議政治を成したる歐羅巴社會の大勢力即ち自由平民の中等社會の實此者より起れるなり

又基督教會の專制の權力を靈魂の世界に於て建設せんことを努むるものなるが故に勢ひ一大權力と協力一致せんことを望まざるを得ず故に僧侶の概して國王と與して貴族を抗せり且歐羅巴諸國に於ては大抵其土地の一半以上の僧徒之を所有せり而して竟に基督教の博愛主義及び四海兄弟論の如き皆封建王侯の邪惡專横を逐過をべた一大利器と爲るに至れり

其他封建制度を破壊するに與りて力ありたる勢力中重大なる者は十字軍、火藥の發明、次第る戦法の變更、貿易の擴張、及び一般の知識の進歩是あり
思ふに封建の全く惡制度なりと言ふ可らむ必らむ幾分は時勢に適合せる所あり
是ならん若し否らむとせば當時に成立たる理由を解し得たし然れども畢竟する所此制度の實は野蠻の世態に屬する者あり故に文明の其体内に生長するを抑止

する能はずして竟に其文明の爲めを覆滅さるゝに至りしあり

十字軍

第十二世紀及び第十三世紀の全部に亘る二百年間の歐羅巴史上の大時代なり
此時代は起つたる重大なる事件は大概夫の有名なる十字軍と稱する非常の遠征に關係せるものあり此十字軍といふ語は元來佛蘭西語の「クロイツ」より出でしもこれにて「十字祭の戦争」といふ義なり而して此數度の十字軍ある者の西歐歐羅巴の諸國民が基督教の聖地セルサレムを「サラセン人」及び「土耳其人」の恢復せんが爲めに與せしものたるに非ざるべし
基督教の盛んするに初年より世の善男善女たる者の四方よりセルサレムに聖陵に詣るもの殆ど常例の如くなれり所謂「ピルグリム」なる者は是なりは「高」
「サラセン人」がセルサレムの地を管領せしころに於ては此參詣者の爲めに商業上の利益を受くる勢からざりしを以て敢て之を拒まざるのあり力めて之を奨励し且之を保護したり然るに第十一世紀に中頃「土耳其人」が小亞細亞及びシ

列王を管領するに至りての基督教信徒は其地の住民たるを参詣者たるを問ひ
 若最も残酷なる待遇を蒙りたり而してマホメツト教徒即ち所謂異端の徒は爲め
 一或の朝侮され或の辱められたる香客の争ひもて道れテ歐羅巴の本國に歸る者
 殆んど逐日あき増至りしと云ふことなきを得ず。然るに其時既にマホメツトの
 「土耳古人」が斯くの如くシテマホメツトは基督教信徒を無殘に虐待し朝侮する
 の報知の西部歐羅巴に聞ゆるに及びて各國の信神ある人民等其甚しく激し怒り
 マホメツトの邪教を撲滅して救世主の聖地を恢復し以て其汚穢を清むべしと切
 望せざる者なきに至れり。然るに其時既にマホメツトの勢力は漸く西に
 進み此願望を實行せしむるに至れり此異常なる人々佛蘭西國王とエジプトの王と
 ともに小社の時軍隊に從事し彼も皆となりて夜裏に境を越えしる事ありしが終
 一セルサレムに詣り親しく「土耳古人」の暴虐は目撃するに及び慨然として大に
 感動し余の聖墓を「土耳古人」の手裏より救出すべしとの天命を受けたりと深く信
 じて此大任に當るべきと決然し其志を遂げんとす。然るに其時既にマホメツトの

とセルサレムの歐羅巴に遷るべきは法王の宮に至り具にセルサレムの状況を陳べ
 七世法王ワルマン第二世之を聽き「公は其企圖の果敢と勇あるは誠は是れ其
 第一其説く所の理あるをささぐり力めてセルサレムを救済せしむべし」たり乃ち
 伊太利及び佛蘭西を周遊し其到る所至て基督教の基を異端の手より救出せしめ
 ち信者の聖務たるを説きけりセルサレムに於ては其難の爲めは憔悴し且身体矮小容貌卑陋
 として常に葛衣を着くるを以て「ハニミツト」(仙人の教)の神説を蒙り感れど
 も其辨論涵々として懸河の如く慷慨の熱情勃々として舌頭を近り大なる時の人々
 感ぜしめり。然るに其時既にマホメツトの勢力は漸く西に
 當時の歴史家の其有様を記述するや殆ど言辭を盡したり其言「曰く諸民群衆
 村落、會堂、街路に群衆してセルサレムの演説を聽き其同胞基督教徒の虐待を被む
 り又聖廟の汚辱を蒙むるを知り或は泣き或は歎き或は怒り又救世主の聖地を保
 護するの務を懈たり竟其之を邪教の手に委ねたりし其罪の輕かざるを悟り或
 り耻ぢ或は悔めり又セルサレムの誠諭は従ふて遂に罪を天に謝せざるべからず
 も或は感じ或は激し又上帝の敵と見たりサラセン人」は對して復仇の軍を起さる

べからむとし平生の無情なる荒士雄と雖も或は奮勵し或は躍りあがり云々
 是母於て乎法王の公に遠征の謀圖を識すると決し一千九十五年及びての第
 二回の軍評議を開くとおされり此第二の會合は佛蘭西のクレルマントを開き法
 王親ら之を臨み歐羅巴の諸方より來集せる幾萬群衆に向て公に演說せり其場
 上りて説を述ぶるや群衆熱心し異口同音に大呼して曰く「是れ神意なり」是
 れ天意なり」と其声轟然として大堂に反響するに際し法王は過し聖書中「罪障
 ある者の十字架を佩ぶべしとの比喩あるを想ひつきて凡そ此聖擧に與せんと
 欲する者の其肩の上或は胸の上より著るに救世主の徽章即ち十字架を以てはべ
 しと陳述せしに衆皆熱心し之を賛成せりされば此日此舊市を去る者にして肩上
 に赤色の十字架を佩びて十字軍の兵卒たるを表せざる者殆んど一人もあらずし
 といふ遂に明年の春を以て東方より出軍するに期と定めたり

第一十字軍の「一千九十六年より一千九十九年まで」
 法王の撰定せし十字軍進發の期日（八月十五日）未だ到らざるも過激粗暴の衆
 民等激々として之を喚びて能く新年始まりて未だ幾ばくあらざるも最下等の

男女老幼の無數ある巡禮者四方より佛蘭西の東境に集り來りビーター、ハーミ
 ヴトを圍繞して此聖擧の首唱者たるの故を以て第一陣の將帥たらんとを求めた
 りビーター熱心のあまり己れの其大任に堪へざるを量る母違あるを輕くし之
 を許諾したり是に於て乎連りし舊集せし大軍のビーター及びバークンチアンの
 貧士ウオルター、ペンニレウスといふ者の指揮と奉じ直ち母出陣して日月曼を
 過ぎ漸く東方へを進みたり

此十字軍の先鋒の其人數凡そ二十五萬人以上にして路は日月曼、ハンガリー、バ
 ルガリア及びネトレスに取れて進行せしが軍規なく又糧食なきを以て其過ぐる
 所の諸國に於て屢々奪掠を行ひたり因てハンガリーの農民の怒を惹起し其驅逐
 殺戮する所とある者多かりた自餘の數國に遂母コンスタンチノール母達し
 「バイザンチウム海峡」を渡りしかども幾ばくもなく「土耳古人」の爲母大敗し四
 方に離散せむること、おされり最初の十字軍は慘狀大抵此の如く二十五萬の生命は
 空しく原頭の露と消へ何の益する所もなかりし

兎角をる中、歐羅巴各國の真成の武官將校等十字軍に従はんが爲めこゝろしこ

み集合せり但し諸國の帝王一人も此役には與らざりしと雖も侯伯は各々其臣屬を率ひ總大將の旗下に屬したり此役の總大將は下ローレン(近代のベルジウム)國公ゴツドフレイノルマンチー公ロバート等を以て此の如くして六大軍を編制し各々別路よりコンスタンチノールに進みたり

此軍勢の用なき婦女僧侶を伴隨を除くも尚六十萬人に下りざりしかば其外勢甚だ盛大なりき之れを以て東羅馬帝の窮乏疑ひラチン地方の侯伯の聖地に向ふと名として暗に東國を掠奪せんと企つるにあらざりしやと仰れ俄に抵抗を試みたりしがあつらコンスタンチノール府を攻撃せられんとするに及んで帝其敵しがたむを悟りて抵抗を止め十字軍をして小亞細亞に渡らしめたり此處にて六軍合して一となり又曩より敗績せる先鋒の殘卒等ビーターと共諸處より來會して是又本軍に加はるることなれり

此大軍の精體は鐵甲を被むる武官なる者にして其數十萬人の上に出でたり皆歐羅巴武官の精兵にして所謂「ナイト」「エスクワイア」(騎士)及び其從卒等甲を蒙り楯を抱り鎧衣を着け鉄靴を穿き鐙狀鎧を襜り槍劍斧及び大鐵棒を携へ

たり歩兵の主要として十字形の長弓を携へしと雖ども之を騎士隊の黃鼠皮の羽織小紋章を縫着し兎楯や金玉を飾り旗幟の美麗にして官位を表せしむ比を以て其精粗同日の談にあらざりき

十字軍先づ小亞細亞のナイス府に向て進軍し遂に之を掠奪せり而して其小亞細亞を進行するや尚や五百哩を經過せざればシリヤの境に達すること能はざりしにム王(サルタン)大之を抗拒せんと欲し戦備を爲し騎兵の大軍(其數三十萬なりといふ)を將ひて十字軍の周邊を徘徊しドリリアムに於て不意に二大軍の一(進行中)と襲撃せり其かけひれ甚だ急速なりしを以て「土耳其人」勝利を収めたり然るども十字軍直々隊伍を整へ且他の一軍隊の援を得て更に敵を襲撃せり凡そ接戦に於ては亞細亞の弱兵曲劍投槍を以て何ぞ歐羅巴兵の利劍長戟を争はしむる奮撃するに當るを得んや僅の一撃にして土耳其の騎兵全く敗れ殺戮せらるる者無慮三萬人に至り是れ蓋し古來騎兵戦中の激烈なる者の隨一なり

ローム王ソリマンの戦地に敗れりと雖ども他に一策を出して大に勝を得たり他はソリマンの十字軍の進行せんとする地方の田圃を荒らし敵をして糧食

の據るべきものふからしめたり是を以て十字軍飢餓疲羸し或は惡水を暴飲し爲
 めに死する者日一數百へ殊に馬匹の斃る者多し三万の騎士中途に馬を下り
 重き甲冑を着け炎暑を冒して徒歩せざるを得ざるに至り斯の如き艱難を経て
 遂に「オロシテス」河邊に青野に達し遙かシリヤのアンチオツク府の塔樓を望
 むに至れり

シリヤの首府アンチオツクの攻圍に實に十字軍の一難事あり然れども十字兵
 の敢て屈せず大困難の中にして能く此難事を當り城兵能く支ゆると七個月其
 間十字軍飢餓疫病の厄に罹り其馬も或は餓死し或は屠らきて軍兵の食糧と爲れ
 り爲に出軍の始めに於ては馬匹の數實に十萬ありしが今の餘す所僅かに二萬に
 過ぎざりし終に城中一官吏の叛するあり十字軍乃ち風雨の夜に乘じて城を襲ひ
 之を取れり是れ一千九十八年七月あり

十字軍アンチオツクを陥れ未だ幾くならず其城下を於て二十萬のマホメツト
 教軍は圍む所とされり此軍兵はベルシヤ王の送れるものなり是に於て十字軍の
 飢餓は苦しむことを更に前日より甚し然れども奮勇突戦し終に全く奇手を破

れり斯くてセルサレムに達するの通路閉け乃ち總軍彼處に向て進行せり然れど
 も頭初に比すれば其人數甚しく減少せり蓋し始めにナイスを圍みし時の恐らく六
 十萬の大軍ありしからんが其後或は餓戦と寒暑の爲めに斃れ或は饑餓と疫病の
 爲めに死し或は逃走し或は俘虜となり其アンチオツクを出る時總軍の數は僅に
 一騎兵一千五百人歩兵二萬人と巡禮者役夫の武器を帯びざる者大約二萬あるの
 みなりし

アンチオツクよりシアツフマに至るまで行程三百哩の間は十字軍海濱に沿ふて
 進行しそれより轉じて内地に入り基督教徒をして感慨堪へざらしむる所の靈
 地神跡を經過し遂にセルサレム府を煙霞の間に望見せる處に到れり是に於て乎
 宿望素願便ち成り百衆も忽ち之を忘れ百苦も忽ち散り全軍雀躍欣舞し或は叫び
 或は抱き其感動宛も一の如く或は跪き或は俯し涙下りて靈地を濡きに至りしと
 いふ

然れども聖府及び聖墓は尚未だ之を救ふこと能はざりし蓋し此時當りセルサ
 レム府に「土耳古人」の有らむとして在埃及の「サラセン」王即ち「カリフ」の手裡

み有り「カリフ」の獨立の政府の頭領にして既_レ近時パレスティンを「土耳古」より奪取せしを「カリフ」斷然意を決し奮つて十字軍に抵抗せんやするを以て勢ひ之を圍攻せざるを得ざるに至れり時_ニ炎熱酷だしく天色恰も銅の如く池沼川流悉く涸乾し一滴の水をも留めず十字軍奮闘すると五週日して遂にゴツドフレ_ー及び部下の勇平城中に入つて凱歌を奏したり是れ一千九百九十七年八月廿九日マホメツト教徒七万人を殺戮し且「猶太人」の其會堂に在る者を燒殺し其四怨報ひたり

斯て後ゼルサレムに基督教的の王國を建設し從軍の諸侯伯互ひて投票して終にポイロンのゴツドフレ_ーを聖府の國王に撰舉せり(一千九百九十九年七月二十三日)然れどもゴツドフレ_ー謙退して帝に王冠を受くるを肯ぜざるのみならず聖墓の守護者といふ稱號の外決して他の尊號を取るを欲せざると斷言せり去れど猶ほ此ゼルサレムのラテン王國の建立はゴツドフレ_ー撰舉の日を以て起算すべきなり

聖府のマホメツト教徒の手裡に在りしこと實に四百五十年間あり

此勝利を収めて後ち此大活劇に與れる俳優多し本國に引歸れりビターハ

ミットも其中の一人にして後ち併蘭西國の一寺院に於て餘命を終れりといふ又ゴツドフレ_ーの聖國を管治すること一年弱にして死せり其政治甚だ公正仁慈ありしを以てマホメツト教徒も基督教徒も共に其死を悲めり其弟バルドウキン位を嗣ぎしが程なく其親屬バルドウキンデユボルグに冠を譲れり而して其子孫世々パレスティンに君臨せり(一千百八十七年また埃及王の爲のみ覆滅せらる)

第二十十字軍(一千百四十七年より一千百四十九年まで)

此後此の東洋の基督教王國の四周のマホメツト教徒の攻撃に對し能く其命脈を保つと五十年間なりしが其後其存立を危ふすべき事件漸く發生するに至り終に一千百四十五年土耳其國の州令の一人エデツサ基督教の領地を奪取し且基督教の人民を殺戮せり

パレスティンに在る基督教徒エデツサの凶報を聞き大に驚き援を「羅巴」の各國に請ひたり「羅巴」諸國此請を容るゝ熱心あると殆んど第一十字軍の時同様らち是に於て純正篤信なる聖徒にナードなる者新に十字軍を興せらるべからざ

るを説き且雄辯を奮て當時の二大國若即ち日耳曼帝コンラツド第三世及び佛蘭西王ルイ第七世を説き第二十十字軍に興さしめたり
 一千百四十七年三十万の精兵第一十字軍の進路を踐みコンスタンチノールに進めりコンラツド帝獨り同盟軍に先ちボスフォラス海峡を渡り小亞細亞に進入せしが東羅馬帝マニユエルのコンラツドの仇讎あるを以て陰に土耳其帝を告ぐる日耳曼軍の進行を以てし且コンラツドに反心ある案内者を供したり是を以て日耳曼軍「ミンデル」河畔に於て一戦し爲め名譽を得るも利あらむ終に止を得ずナイスに退軍せり此時日耳曼の全軍の十分の九は異教者の劍戟に屠られりと云む又ハ飢渴のためは斃死したりといふ

此時に當り「佛蘭西人」は其王ルイ第七世に従ふて既にナイスに向て進軍し其處より日耳曼の殘卒と合して一と爲り二軍隊共小亞細亞を通過しラオチンヤホに於て烈しく抗拒せらるゝと雖ども苦戰屈せむ風雨を冒し饑餓に堪へアチオツクに至り竟しセルサレム府に達せり然れども騎士軍は歐羅巴を出てしより此に達せるに僅に一部分なりしといふ

是に於てはじめに纒まダマスカスを圍むことを得しが忽ち大敗して又進む能はざるを全軍空しく本國に引歸れり是を第二の十字軍の結局とす

第三十字軍(一千百八十九年より一千百九十二年まで)

より第三十字軍の起るに至るまで四十年を閉す其間マホメツト教國の政治上の一大變革あり即ちカルドの酋長サラヂンと稱せらるゝ者あり少壯にして「ナイル」及び「タイギリス」兩河間のマホメツト教諸國を合せて之を一統せり此頃セルサレムの「ラテン王國」大に亂れて國勢振はざるに至りしかばサラヂン此機に乗じパレスティンに侵入し往々諸邑を掠し終にセルサレム府を圍み十四日して之を降せり(一千百八十七年)かくて彼の耶蘇の聖國は全く亡びパレスティンなる基督教徒は屬する所といへば唯だタイルといふ一府あるのみ
 セルサレム王國滅亡の報知歐羅巴に達するや忽ち第三の十字軍起れり此役は西部の三大國王も亦起て十字架を戴きたり三國王とい「獅心」の稱ありし英國王リチャード第一世佛蘭西王フィリップオーガスタス及び日耳曼のフレデリック赤鬚帝即ち是なり此役は起るや「サラヂン税」といふ新税(十分一税)を基督教

の諸國を謀して以て其軍費を募りたり
 佛蘭西及び英吉利の兩國王は其軍兵を海路よりパレスティンに送達せりと華ども獨りフレデリックの騎兵六万及び歩兵十萬を將ゐて傲然陸地と進行せり其軍備甚だ周到なるを以て歐羅巴を経てヘルレスポント海峡を渡り小亞細亞に入るに至るまで毫も失敗せし事なかりた然るに不幸にして帝のシリシヤの小流の水浴もるの際誤つて溺れ死せり遠征軍其頭領を失ひしを以て百事擾亂して治らず未だシリヤの境界に達せざるに既に全軍の兵數減つて十分の一とあり早うしてエクスア府母たどりつること、よて佛蘭西及び英吉利の軍と合併せり
 是より先だシリヤの基督教徒同盟團結してエクスア府を圍むありしに今や歐羅巴の將校來て之を援くるに會せしかば圍攻の勢甚だ盛なりサラヂンエクスア府を救はんとして果さざ其四方の平原に於て十字軍と「モスレム」の大軍と屢々交戦せしが終に攻圍二十三個月にしてエクスア府基督教徒に降伏せり實に一千百九十年をり
 エクスア府既而降りしかば基督教徒は大に之を祝し聖基恢復の吉兆と爲せり然れども幾くあらず佛蘭西王十字軍を脱して歸國せしかば此豫望も忽ち挫折せり此脱軍を招きたりし原因に蓋しフヒリツプ王が英吉利王リチャードの輕佻にして驕傲をると怒りしに基けりといふものあれども又是れリチャード王の名譽盛にして己の上に出るを大に妬まざるに因るものといふべし
 リチャード王の留るに尚しばらく交戦し屢々勝利を得たり然もども外に應接の味方なきが爲に終にサラヂンと休戦の條約を締び兵を引上ること、おれり其條約の概しく基督教徒に便利ある者ありし又以てマホメツト教徒の寛大ありしを見るに足るといふ

第四以下の十字軍

今上に記載したる三四の十字軍の十字役中の大なるものと十次で尚數回(三四回)の十字軍を企てしと雖ども或は全く靈地に向はぬ或はさしたる結果を生せずして廢めり故に概略をのべん

(第四十字軍) 此十字軍の將帥は宗教上の熱情より師を起せしにあらむ寧ろ功名を貪るの心と武勇を嗜むの情に刺銜せられたる者あり其ダルメシヤの基督教

府ゼラは服してヴェニス國の命に從ひしめんとするに當りてロヴェニス艦隊の
幫助を請へり(一千二百二年)而して竟にパレスティナに渡航せむしてコンスタ
ンチノープルに進向し遂に東帝國を覆滅し(一千二百四年)其墟址に一の「ラテ
ン王國」を建つ此王國一千二百六十年まで繼續せり

(第五十字軍) 第五十字軍の戦場の埃及にして(一千二百十六年より一千二百
二十年まで繼續)始めに十字軍勝利を得しと雖も終に大に失敗し埃及王は
降らざるを得ざるに至れり後ち一千二百二十八年に至り日耳曼帝フレデリック
第二世軍を起して此十字軍を續く此役で帝凱旋しセルサレム府に入り埃及王
に迫り其府并に他の諸府と基督教徒に譲らしめたり然れども後幾はくも亦斯
くして得たる所の所領は皆悉く奪はれ了んぬ

(第六十字軍) 此遠征は一千二百三十八年ナヴァール王の下に屬せる「佛蘭西
人」及びコロンウオール伯リチャードの旗下ある英吉利の騎士の發起に係るも
のとして竟に開戦に至らむ評議を以て事を了り而して其條約基督教徒のため
に利便あり然れども平和を保つと僅に二年にしてコラヌム地方の「土耳其人」の

侵寇はあひ之きが爲の「ラテン王國」に顛覆せられ「土耳其人」はパレスタイン
の大半を占領するに至れり

(第七十字軍) 右の災厄起る事及んで敬神純正なる佛蘭西王ルイ第九世(世ふ
聖ルイと稱する王)慨然熱情を發し一千二百四十九年第七十字軍を起せり然し
ども此役も何の效果も死のみならむ王の敵は爲に論とされ夥多の贖價を出して
王及び其兵を救ふに至れり

(第八十字軍) 後ち二十一年を経て(一千二百七十年)聖ルイ王第八十字軍を起
せり是最後の役へ此役も復何の効果を収むるもして止めり王の軍を進むるや途中
に於て兵鋒を轉じてチュニス府を圍めり然るに疫病軍中に起り王も亦倒れた
り英吉利國の太子エドワードもルイ王と力を協せて十字軍に與かり此時パレス
ティナに向て進軍したりしかど僅に小戦を試むるの後ち空しく本國へ歸り去る
り其後幾むくも亦基督教徒の唯一の要害ありしエックア府も敵の爲に掠取せら
れ是に於て聖地全くマホメツト教徒の手中に落ちたり

十字軍の結果

十字軍の全く其直接の目的を達すると能はむ即ち聖地をマホメット教徒の手より恢復するに至らむして廢みたり然れども此數回の大遠征たる暗に甚だ重大なる結果を生じたるものなり

西國諸國民の十字軍に隨ふや互に同心協力したるを以て互に相識ると前日一倍に發急相接ぐるの義氣を長し同情相憐れむの情を起し且更に思想を擴大せしむるに至れる等是十字軍より生じある第一の利益なりし

次に十字軍の數多の生産技術等も關する知識を東國より携歸て技術製造を進歩せしめたり又近代の商業の始めて發達せしも實に此遠征の間在り其故は伊太利の海岸諸邦の或は船を出して十字軍を運送し或は糧食并に戦具を運輸せるを以て地中海の商賣及び渡航速に増加し香料并に東洋の驕奢品を愛好せるの風漸く歐羅巴に蔓延し又ヴェニス、ゼノア及び其他の伊太利諸邦の民地中海の東岸并に希臘帝國の海濱に商品蓄藏所と設くるに至りたるはをり

其他十字軍の封建制度并に貴族政治の勢力を減殺せり何となれば十字軍の爲めに封建貴族の其采地を分割し或は之を賣却したる者多しとされむなり

彼の武官即ち騎士なる者の起原は蓋し十字軍より更に舊しと雖ども其勢力と威權を得るに至りしは此等の軍役に由るもれ多し其異様なる綽名、戦袍、及び旗幟等を使用するの慣習は全く危急紛擾の際に臨み基督教諸國より來會せる千の軍士を容易に識別せるの必要より起りしものなり

十字軍の原來狂憤は氣を起りたる者なりと雖ども其結果に至りては却つて此氣象を減殺するの効ありし者あり初め基督教徒はマホメット教徒を概して之を蛇蝎視せしと雖ども相聞ふに及びて漸く彼我相知るの有様に至り思むの外彼の教徒は一種崇拜すべきの特質あるとは悟り後には騎士將校をして之れを尊崇し歎美せしむるに至れり又廣く他國人と交接せしを以て歐羅巴の兵士の其心大に擴張し其思想も潤大に其考慮も深遠なれり其兵を收めて本國に歸るや全く別人の如くなりしといふ故に知力の復興は已に十字軍の末年に於て端緒を開きたりと言ふべきあり

法王の権力の振張

羅馬法王の事の前にも少し之を述べたりしが其中古の歴史に關係と有ると
頗る切なるを以て更らゝ進んで其權力の振張せる次第を物語るべし蓋し中古の
事蹟を了解するに極めて必要なりと信ずればあり

シヤールマンの死後殆んど二百年の久しき間即ち佛蘭西伊太利及び日月曼の
「カロルビンジャン系統」の諸王が微弱なる政治を行ひし間の社會擾亂して殆ど秩
序亦た有様ありた故に此間にて法王の權勢は漸く振張し政治上に權力を有す
るに至れり然れども第十世紀の中頃日月曼の君主がシヤールマンの餘光を傳へ
て西羅馬帝國の帝となる及んで法王と皇帝との間も世々劇烈なる争ひを生
ず久しく釋けざるの葛藤とあり元來「伊太利人」の旧制度に慣れて日月曼の管
轄を受くることを欲せざるが故に法王の勢は「非日月曼黨」の中心となり本尊とな
れり必竟法王の羅馬府を管領する政治上の主治者たるの資格を以て言へば皇帝
の臣屬たるに相違ふありしと雖も基督教國の法主教長として特別に貴重なる
地位を保ちしなり

法王撰擧の件に就きて大爭論初めて演裂せり日月曼帝のたとひコレクツレ、イフ、カチナ、ス教 宰 會 院

の決議よりて法王の位に撰擧されざる者と雖も皇帝が之を認可するにあらざ
るよりの決して有効と見做し難しとし世々此議論を主張したる然り而して日月
曼帝の勿論己れの欲する所の者を法王に撰擧せんと求めたり此争たる始のに帝
の勢力盛にして百事大方の其意の如く行われしかば日月曼地方の僧正を以て法
王とあし而して自ら百事を指揮せんと計りたり然るに皇帝の衆を違ひソア十地
方より出たる一職僧は爲めの大なる屈辱を蒙るに至れり此僧はタスカニ一の
貧木匠の子にして其人となり剛膽果敢あり是を則ちヒルデアランドとして後ハ
グレゴリ一第七世をして世に知られたる中代の最も著名なる後傑の一人なり
一千四十九年ヒルデアランド法王レオ第九世に召され羅馬府に來り議長兼教宰
に任じ會院に參與して法王を輔けたり此職に在ると二十年間五法王を歴任し常
に英才を著し大に重用せられたる其教會をして全く獨立せしめんとする策略
を立てたるに實に此間の盡力をりし元來ヒルデアランドの其依て以て歐羅巴を
一新すべき方便の一に教會の外他に復た依頼すべきものなしと信ぜし故に教
會を以て之を諸衆の俗權の上の位せしめんと冀圖せるを是れ蓋し過激にして

且困難なる謀圖なりしと雖ども當時醜弊積んで山の如くありしを以て斯る激暴を投ぐるも非ざれば到底之は救済を能はざりしあり

一千七十三年ヒルデアランド法王の位に即きグレゴリー第七世と稱せられ先づ

日耳曼帝の有する僧職授與權なるものに向つて一撃と試んと企てたり此權

の僧正及び和尚は就職の章票として鈴及び杖を與ふるの權にして之より由て其日

耳曼帝の臣屬するを示すの儀式なりき是に至りグレゴリーは僧會をして議決せ

しめて曰く凡そ何人たりとも俗人より僧職を受くる者の授職者も受職者も其

之を破門の罰に處すべしや

日耳曼帝ヘンリー第四世此命令を輕侮して毫も顧みず是より於て法王嚴令を發し

て帝を破門し且日耳曼及び伊太利に在る帝の臣民に告げて其帝に忠勤するの誓

約を解除し爾後いたし王命に背くも天帝汝等の罪を咎免さるべしと布令せり

ヘンリー大王大に怒りて急ぎ戰備をとらかりしが幾らくもかく宗教の權力の大

なるを悟り無形の法力が大に國內の民心を左右し其權勢甚だ恐るべきを歴然と

して知察せり何と云ふれば僧侶及び僧徒等が國內至る處に説教して頻りに帝を攻

撃せしを以て叛徒四方を起り警報相接したればありヘンリーは始めの心竊に復讐

を誓て伊太利に入りしが終に屈して帝をグレゴリーに請はざるを得ざるに至り

一十七年十一月二十五日ヘンリー帝法王の宮に召せられ其赦免を請へり

臨時歐羅巴全土に於て最も有力なる君主として未だ曾て君主は蒙らざりし極め

て甚だしき屈辱を受けざるを得ざるに至れり當時法王の勢力の夫ありしと見

るべし此時帝はまづ進んで其過誤を懺悔せしのみか嚴冬の雪中に身まはし毛襦

袂着たはるのみにて徒跣して城の外廓に立つと三日間にして始めて赦さるを得る

べき破門を免さざりしとぞヘンリーは此怨を報ひんと欲し更に軍兵と興し急ぎ

法王を攻めしむがレゴリーの止を得ず羅馬より逃れ竟にサレルノの謫所にて死

せり(一千八百十五年)

嗣で法王とある者皆斷然としてレゴリーの政略を執れり而して歐羅巴全土に

擾亂と政治の改革の爲めを惹き震動せる際と雖も法王の管治のみは依然として

變動せざりしを以て其權勢日一月を加はれり葡萄牙アラゴン英蘭蘇格蘭サル

ディニカ両王に及ぶ其他の諸王は陸續相倣つて羅馬法王の臣屬と爲り竟る日

可建帝ヘンリー五世も亦勝て居しウォームスの條約(一千二百二十二年)を以て
 公然僧職授與權を法王に奪ふに至り
 インノセント三世(一千二百九十八年より一千二百十六年)に至る(大に法王の權
 力を増加せしめ日耳曼の羅馬知事をして忠節の誓約を爲さしめ十字軍を起して
 佛蘭西の「アルビセンセス宗徒」(按、カソリック教の制規に服従せざる基督教の
 一派)を撲滅し英蘭は王ジョンを折伏し之に貢物を課し實に王中の王と爲り
 て歐羅巴全土の君主たらんとを望むに至り
 但し此大望を如何して維持したるや又之を如何して抵抗したるや其顛末を記さ
 んとせば中古史上の一大章を要すべしと雖ども茲に其詳細を盡す能はざ
 るのみならず其勝敗の竟も孰れを陳述せしむを陳述すること尚且難しとす此事
 一就其大家の言へるとあり曰く「蓋し法王は能く日耳曼帝の權力を覆滅した
 りと雖ども竟も自ら他の王侯の權力に屈從せざるを得ざりしと謂ふべし」と
 是より先東西教派の別生じたり其理由と尋ぬるもこれれは是コニスタンチノブレ
 ールの教長と羅馬の法王とは教權の争ひより生ぜしものなり今の所謂希臘教と羅

馬教との差別は此時に起れりと思ふべし

武官の興廢

武官或は騎士と譯すこの制は全く封建制度より發生せしものなりまかれども封
 建制度をして盛んならしめし者の實に此制度ありといはざるを得ざるなり其は
 じめに徴々たる者なりしや次第に成長して一大制度となり中古數百年の間西部
 歐羅巴諸國民の風俗習慣思想及び情操の上を驚くべき影響を及ぼせしや十字
 軍の起るに及んで其形体益々完成し隆盛と榮譽とを極めたるが後ち終に狂妄放
 肆の極端に陥りやがて封建制制度と共に全く消滅し歸ることなれり
 此制度の原米「ゴツス人」中にお存在せし二種の特別ある習慣に起因せり其一は基
 だしく武人を尊崇景慕するの念に基きたる習慣其二は大母婦女を敬愛優遇する
 の情に基きたる習慣是より此二種の習慣が發達するに隨ひ第十一世紀の頃即ち
 封建制度が既ち整然たる形体を爲す頃に至りては苟も一地方の君主たる者各
 々其域中に一の學校と設け臣屬の子弟をして君家の子弟と共に武藝禮式を學ば